

2635  
41



始



斗 5H 55

2635

41

野澤正浩  
三浦喜雄

共著

卷五 (下)

尋常  
小學  
修身書教授細案

東京目黒書店發兌

263.5-41

野澤正浩  
三浦喜雄

共著

卷五(下)

尋常  
小學

修身書教授細案

大正  
11. 10. 19  
内交

東京目黒書店發兌

## 凡 例

一、本書は修正尋常小學修身書卷五につき、教材と教法の兩方面から詳細に研究し、以て實際教授の参考に資せんとしたものである。

一、本書は以上の趣旨に基いて、毎課をば教授の要旨・教材の研究・教授の實際の三段に分ち、教授の要旨に於ては、其の課に於ける目的を明瞭に記述し、教材の研究に於ては、例話は教科書に示してある原典は勿論、其の他尙幾多の資料をも參酌して、出来るだけ正確に調査し、之を實際談話の參考になるやうに記述した。また訓話は例話と交渉して、其の徳目の内容を明かにし、道徳的思想を涵養して、一面には日常の行動云爾に對して道徳的批判の正を得せしめ、一面には彼等の内面的生活をして豊純に道徳化せんといふ考を以て記述した。而して教授の實際に於ては、

毎時に互つて教法の要領を記し、直ちに教壇上に役立つやうに考へて記述した。

一、其の他多くの圖版を挿入して、説話上の活寫に便にし、作法及び教授細目等をも附録として實際教授上の資に供して置いた。

一、本書に於ける例話資料及び訓話資料等は兒童の發達及び境遇を顧慮し、其の精神のある所を捉へて適切平明に話すことを忘れてはならない。

一、本書は今回三浦君が止むなき事情ありしたため、専ら小生が筆を執つた。茲に併せ記して責任を明にして置く。

大正十一年九月

著者識

尋常小學 修身書教授細案 卷五(下卷)

目次

第十四課	勉學	.....	一
第十五課	勇氣	.....	三三
第十六課	忍耐	.....	六一
第十七課	自信	.....	八七
第十八課	主婦の務	.....	一一一
第十九課	朋友	.....	一四九
第二十課	禮儀	.....	一七五
第二十一課	度量	.....	一九七
第二十二課	信義	.....	二二六
第二十三課	誠實	.....	二四二
第二十四課	謝恩	.....	二六四

目次	二
第二十五課 博愛	二八一
第二十六課 德行	三〇八
第二十七課 よい日本人	三三四
附録	
作法・教授細目・徳目聯絡一覽表	

目次終

小尋常修身書教授細案卷五下卷

野澤正浩 共著  
三浦喜雄

第十四課 勉學

教授の要旨

本課に於ては、不撓不屈の精神を以て學問に勉強すべきことを諭すを以てその要旨とする。

人は誰でも學問を修めなければならない。それは第一自己の生活上の必要からである。農夫に播種耕耘の智識なく、工匠に材料工具に關する智識なく、漁夫に漁撈・操舟に關する知識なく、商人に商道に關する知識がなかつたならば、決して優良な農夫たり工匠たり漁夫たりまた商人たることは出来ない。その他如何なる職業をなす人でも、それ〴〵其の職業に要する知識といふものが極めて大切なものである。

第二には社會的生活を營む上に必要である。私共が社會に立ち、社會の人と共に生活して行くには、そこに社會的の義務あることを自覺して、それを實現して行かなければならない。即ち社會の進歩に盡し、公衆の利益を圖つて行かなければならない。而して之を有效になすには是非學問を修めなければならない。

第三には人たらが爲に、即ち人格の養成に向つて必要である。それには豊富な智識、純美な感情、堅實な意志の調和的修養が大切である。従つて學問をなすことは人格養成上必要である。本課に於ては是等の内容をよく理解させ、殊に少年、青年の時期は、學問をなすに最も適當な時期であることを會得させ、常に倦まず撓まず勉學すべきことを諭すを以て教授の要旨とするのである。

### 教材の研究

### 例話資料

#### 勝安芳

##### 一、安芳の略傳

勝安芳は初め名は義邦、通稱を麟太郎と言ひ、後安芳と改め、號を海舟といつた。文政六年(紀元二四八三年、今から約百年前)正月、江戸の本所龜澤町に生れた。幼時から資性穎敏で且意志の強い人であつた。十六歳の時、家督を相續したが、家道振はないで生計に頗る困難を極めた。併し常に修學の念は炎々と胸に燃え、熱心に劍道と蘭學とを修めた。

安政二年(紀元二五一年——年三十三の時)に幕府は海軍傳習所を長崎に開設し(我が國に於ける海軍の嚆矢)傳習生四十餘名を選抜して、蘭人につき海軍のことを傳習させた。安芳も其の内の一人で、而かも彼は最優秀者であつた。

安政六年十一月(三十七歳の時)米國へ派遣を命ぜられ、翌萬延元年(紀元二五二〇年)正月、軍艦威臨丸に搭じて品川を發し、茫渺たる太平洋の風浪を破つて、三十八日目に彼地の桑港に到着し、新樹の綠濃き初夏に、無事品川に歸航した。我が國で、我が國の軍艦に乗つて外國に渡航したのが之が嚆

勝安芳の肖像



矢であつた。

安芳歸朝の後は重く幕府に用ひられ、幕政を輔佐し、銳意海軍の發達に盡力した。こゝに於て天下の志士は彼の英風を望んで教を乞ふもの甚だ多かつた。土佐藩の坂本龍馬を始め薩長藩の諸

俊傑も多く其の門に學んだ。

元治元年(紀元二五二四年)七月、長藩が關を犯して、敗殘の兵士五十餘名が大阪に来て長藩の藏屋敷に隠れてゐた。衆議して之を焼かうとした時、安芳はたゞに殷富の都會を灰燼に歸せしめるのみでなく、延いて禍を無辜の人民にまで及ぶことを恐れ、群議を排して長藩士を諭し、其の屋敷を致さしめた。

慶應二年(紀元二五二六年)八月、安芳密旨を奉じて長州に使した。併し彼は歸つて關老に説くに、徳川家の危急と邦内の大勢を以てした。而して其の言ふ所激烈であつたから、即日蟄居を命ぜられた。併し其の後將軍慶喜が安芳の異才あるを識り、托するに天下の大事を以てした。安芳感激してまた國事に奔走した。

慶應三年十月、將軍慶喜大政を奉還するや、血氣の輩は之を悦ばず、將軍を擁して大事に及ばうとした。安芳大義名分を説いて之を制し、朝廷と幕府との間に奔走して、慶喜の恭順の狀を詳述し、一意以て國家の安泰と徳川氏の存立とを謀つた。既にして鳥羽・伏見の戦起り、尋で王師はもう江戸城に迫つて來た。安芳おもへらく徳川氏の存亡まさに危機に迫つた。そこで彼は高輪の薩藩邸に赴き、參謀西郷隆盛に面會して、慶喜は深く前非を悔い、重厚に恭順の意を表せるを陳べ、戦をやめて百萬の生靈を無事に救はうといふことを議し、且官軍にして勢を恃んで妄りに干

戈を動して、時一の快を貪るが如きは、徒らに國家を亂す所以で、これ豈至仁至慈の陛下の大御心に添ふ所以でないことを力説した。隆盛は固より度量宏大の人、其の上深く安芳の誠意に動かされ、數項の條件を約して其の説を納れ、即日進軍の令を中止した。而して安芳は江戸城を明渡した後は専ら江戸の人心の鎮撫に努力した。かく安芳の烟眼を以て、巨腕を以て、國家の擾亂を未發に防いだことは、蓋し其功績たるや實に偉大といはなければならぬ。

明治二年七月外務大丞に任ぜられ、同じく十一日に兵部大丞に轉じた。六年三月鹿兒島に行つて島津久光に面謁して議する所あつたが皆容れる所となつた。十月參議兼海軍卿に任ぜられ、八年元老院議官となつた。安芳は既に將軍をして恭順させ、永く其の祀を絶たざるに至らしめたのを以て畢生の事業を完了したとし、十一月職を辭し以後閑日月を弄して自ら樂んで居た。併し憂國の至誠は或は詩歌となり、或は文章となつて折々發現した。二十一年五月特旨を以て華族に列し、勳功によつて伯爵を授けられた。同年また樞密院顧問官に任ぜられた。三十二年一月十九日病にかゝり、二十一日の午後五時半遂に永久の眠に入つた。享年七十七歳であつた。

## 二、安芳の苦學

(一) 貧困と學志 勝安芳の家は初めから赤貧であつた。彼が七歳の頃、本丸の御庭拜見に出かけた時、着る着物がなくして親類から借りて着て行つたといふ。彼が幼時の貧窮の有様を語つた中に、



「おれが子供の時には非常に貧乏であつて、或年の暮などにはお正月に食べる餅を搗く錢がなかつた。が本所の親類から、餅をやるから取りに來いといつたから、おれはわざ／＼貫ひに往つて、風呂敷に入れて背負つて來る途中、兩國橋の上で、どうしたはづみか、風呂敷が破れて折角貰つた餅はみんな落ちてしまつた。其の時はもう夜で提灯はなし、道は眞暗だし、落した餅を拾ふことができない。尤も二つ三つは拾つたが、あんまり忌々しかつたから、それも川の中へ投げ込んで歸つて來た云々。」

誠に偽なく貧乏を語つて居る。併し彼はかゝる貧窮の内にあつても大に修業して他日立派なものになつてやらうと言ふ意氣は胸中に紅に燃えて居たのである。

(二) 劍術の修行 安芳が十七八歳の頃から精神の鍛鍊と劍術の修業に勵んだ。彼の直話を讀むと、當時の光景が眼前に活躍して見える。

「おれの本當に修業したのは劍術だつた。劍術は當時その指南者であつた島田虎之助といふ先生について學んだ。先生の塾へ寄宿して自分で薪水の勞を執つて修業した。寒中になると、先生の指圖に従つて、夕方から稽古着一枚で、王子權現に行つて夜稽古をした。先づ拜殿の土臺石に腰かけて、冥目沈思して心膽を鍊磨し、然る後起つて木劍を振りまはした。それから又元の石に腰かけて心膽を鍊り、又起つて木劍を振りまはした。かういふ風に夜明まで五六回もや

つて、それから歸つて直ぐ朝稽古を爲し、夕方になるとまた權現へ出掛けて一日も怠らなかつた。始の程は深更に只一人、境内に居るのだから、何となく心が慄して、枝を吹く風の音も凄く聞え、覺えず身の毛がよだつて、今にも大木が頭の上に仆れかゝるやうに思はれたが、修業が積むに従つて次第に慣れて來て、後には寂しい中に却つて一種の趣があるやうに思つた。

時には同門生が二三人やつて來ることもあつたが、寒さと眠さにとに辟易して、何時も半途から近所の百姓家を叩き起して寢てしまふのであつた。併し己は馬鹿正直にも、そんなことは一度もやらなかつた。所が此の修業の效能が、あの瓦解(大政奉還の際の騒ぎをいふ)の前後に現はれて、あんな艱難辛苦にあつても少しもひるまなかつた。ほんとに此の時分には寒中足袋もはかず、袴一枚で平氣だつたよ。暑さ寒さなどいふことは、どんなことか、おれには殆ど分らなかつた。體は鐵同様だつた。かうして年とつても、身體は依然達者だし、足下も確かだし、根氣も丈夫なのは、全くあの時の修業の餘慶だ云々。」

何と眞劍な修業振であるまいか。私共は先生のかうした火のであるやうな修業振を見ては深く反省する所あらねばならない。

(三) 蘭學の研究 勝安芳は身體の鍛鍊と共に禪學をやつて精神も鍛鍊した。また彼は實際生活に必要な學問の習得にも奮勵した人であつた。

## 跡筆の芳安勝



當時我が國の國狀は西洋の學術をも研究せなければならぬ状態にあつた。而してそれをなすには専ら和蘭語を通してするより外に道がなかつたのである。

安芳は少時城中に於て和蘭から獻納した大砲を見た。爛眼な彼は直に其の精良なのに感じ、又其の砲身にかいてある横文字を見て、是非解釋して見たいと思つた。こゝに彼は遂に決心して、當時斯學の大家であつた箕作玄甫といふ人のもとにいつて教を請うた。併し玄甫は頭を横に振つて「蘭學は氣短な江戸人には適しない。それに拙者は多忙だから教へる暇がない。」といつて斷つた。併し氣概のある彼は之がために一旦立てた志を中止するといふことはしなかつた。彼は憤然として「何に貴下に御厄介にならなくても、立派に蘭學に成功して見せる。」と心に叫んで立ち去つた。

當時赤坂の溜池に永井青厓といふ人が居た。此の人は黒田侯の翻譯を司つて居る人で蘭學に通じ、また藏書も多く

あつた。安芳は直に其の門を叩いて門人となつた。日々教へて貰ふ傍ら新しい書物をも讀むことが出来て、彼は修學の上に非常に幸福を得たことを心から喜んだ。

當時世に行はれて居た蘭語の辭書としては只一種しかなかつた。従つて其の價も高く一部が六十兩であつた。安芳は本來からの貧乏人であるから、之を手に入れるなどは思ひもよらぬことである。併し彼はどうかして其の書を得たいと思ひ、百方苦心の結果、蘭醫赤城某から、一ヶ年十兩の謝料で借り受け、晝夜之を寫し取つた。しかし彼は固より謝料を持って居ない。で一ヶ年に二部寫しとつて、其の一部を人に賣つて其の約束を辨じた。寫した辭書の一部は今尙寶物として残つて居るといふ。當時のことを彼自ら其の卷末に記して、

「弘化四年丁未、秋、業に就き、翌仲秋二日終業。予、此の時、貧、骨に到り、夏夜無寐。冬無衾。唯日夜机に倚つて眠る。加之、大母病氣に在り、諸姉幼弱不解事。自ら縁を破り柱を割つて炊ぐ。困難到于爰又感激を生じ、一歳中二部の謄寫成る。其の一部は他に鬻ぎ、其の諸費を辨ず。嗚呼此の後の學業の其の成否の如き不可知、不可期也。」

と言つて居る。弘化四年といへば彼の二十五歳の時である。彼はかく困厄の中にあつても毫も挫折する所なく、奮然とそれらを排して不撓不屈の精神を以て益々修業に勉めたのであつた。

又此の頃のことであつた。或日安芳が書店で新刊の一蘭書を見付けた。それは兵書で而かもま

たと得難い珍書であつた。當時彼は西洋の兵學を熱心に研究して居る際であつたから、之を欲しくてたまらない。がしかし價五十兩といふ大金は、素寒貧の彼にはどうすることも出来なかつた。しかしどうかして手に入れたいものだと思つて、十餘日もかゝつて、親類其の他の知己の間を奔走して漸く其の金子を調べ、勇んで書店に来て見ると、こはいかに、其の書はもう他人に手に渡つてゐた。彼は痛く失望して其の買主を聞くと、四谷に住んで居る與力某だといふことがわかつた。そこで彼は直ぐ某を訪ねて、精はしく事情をのべて讓與を願つた。が某は頑として聽容れない。「然らば暫らく拜借を願ひたい」といつて頼んだが、矢張聽容れない。そこで彼は「晝間は御入用であらうから、夜間寢後に拜借を願ひたい。」と熱心に頼んだ。與力某もその執拗なのに驚き「それならば夜分十時過ぎでお貸ししよう。併し戸外へ持出すとはお斷りする。」といつた。そこで彼は翌晩から某の家に通うて寫し取ることにした。當時安芳は本所の錦絲堀に住まつて居たから四谷までは一里半もある。併し彼にはそんなことは問題でない。雨が降つても風が吹いても、ただの一夜も休まない。又其の時刻も違へない。さうして半年餘の苦勞を重ねて、とう／＼寫し取つてしまつた。終へた夜に彼は其の由を告げて深く好意を謝し、且筆寫の際に起つた疑問について二三質問した。與力某は大に驚いて「自分は恥しい乍らまだ全部を見通してゐない。貴下の熱心に對し、誠に慚愧に堪へない。私のやうな碌々たるものが此のやうな良書をもつてゐても野人

が玉を懐いてゐると同様だから全部貴下に進呈しよう。」といつた。安芳は驚いて、「私は寫させて貰つたのもうたくさんである。二通りはいらない。」といつて固辭したけれども、主人はどうしても聽かない。「是非貰つてくれ。」といつてやまなかつたから、彼はとう／＼いただいて、寫本と共に家の寶として所藏することにした。其の後譯があつて寫本の方は一部八冊價三十圓で人に譲つたといふことである。

其の他安芳の苦學について語るべき多くがあるが、要するに彼は劍道を學ぶについても、また蘭學を修めるについても、彼は不撓不屈の精神を以て、千辛萬苦を忍んでそれに當つたのである。一言以て言へば彼の修學・修業は實に眞劍であつたのである。後日彼が國家有用の人となり、國家のために偉大の功績を立てたのも、彼の天性に基く所もあらうが、その眞劍がそれをなさしめたのである。その刻苦勉勵がそれを爲さしめたのである。

(注意)本文には教科書に記してある補助教材も織込んで書いた。

### 訓話資料

本例話と交渉して次の如き内容で訓話する。

○諸子は日々諸子の學科について勉強してゐるのは何のためなのか○勝安芳が國家に重く用ひられたのは何に基くのだらう。

(一) 學問の必要——人は誰でも學問を修めなければならない。それは第一には自己自身の生活の上に必要なものである。どうだ農夫には學問がいらないだらうか。工匠にはどうだらう。漁夫には。然らば商人には。さうだ、農夫には播種・耕耘に關する智識がなければならぬ。でないとも良農たることが出来ない。工匠には材料・工具に關する智識がなければならぬ。でないとも良工たることが出来ない。漁夫には水産・操舟に關する智識がなければならぬ。でないとも良漁夫となることが出来ない。商人には商道に關する智識が豊かになければならぬ。でないとも優秀な商人となることが出来ない。諸子は農業學校のあることを知つてゐるだらう。工業學校のあることも知つてゐるだらう。また水産學校のあることも、商業學校のあることも、知つてゐるだらう。どうだ是等の學校のあるといふことは、農業を營むものには農業に關する、漁業に従事するものには水産に關する、商業に従事するものには商業に關する豊富にして而かも堅實な智識の要することを物語つて居るものであるまいか。其の他人々は何の職業に従事するにしても、其の職業に關する智識即ち學理を要することは、諸子の容易く領く所であらう。若し自己の營む職業に關し何等の智識をもたなかつたときは、其の職業の發達に於て、また効率に於てどうであらうか、そこに何等の進歩もなく、改良もなく、効率も低級で、寧ろ次第に萎微するであるまいか。かうなると自己の生活といふものは決して安全でなく、また幸福でない。次第に不安が襲ひ來て、遂に滅亡に泣かざるを得ないではなからうか。で學問するといふことは、自己の生活の安全と幸福とに向つて大切なことである。

第二には社會の我として生活して行く上に必要である。諸子も既に知つて居る通り、私共は我一人だけが單獨に生活して居るのでなく、社會の人々と共に生活して居るのである。だから私共は社會のために、また民衆のために盡さなければならない。即ち國家・社會の進歩を促し、民衆の幸福を圖つて行かなければならぬ。どうだらう。かうしたわばならない務を成し遂げるに當つて、我に學問のあると否とは、何等關係せぬであらうか。いゝえだらう。學問のない所には進歩もない。學問のない所には幸福もない筈である。實に學問は進歩を産み、幸福を産む母であるまいか。だから私共は社會の一人として學問を修め、さうして社會の人々と力を合せ心をつにして、社會の進歩を促し、民衆の幸福を圖らなければならぬ。で學問することは社會的生活を營む上にも是非必要であることが容易く領くことが出来るよう。

第三には完全な人として生きて行く上に必要である。本來人といふものは不完全な人として生きて行くものでない。完全な人として生きて行かなければならぬ。不完全な人といふのは知識の不足な人、感情の不純な人、意志の薄弱な人をいふのである。此の反對で完全な人といふのは知識が豊富で、感情が純美で、意志が堅固である人をいふのである。かういふ人を人格者といつ

て、人としての價値をそなへた善き人なのである。人は人格者として立つて行くときに、其の人は眞の人として生きて行く人といふのである。所でさうした人格者たるには、どうしても學を磨き徳を修めなければならぬ。即ち人格は學問をなし、道德を修める所に成立するのである。諸子が日々かうして學科にいそしんでゐるのも、自己自身の生活に對して、また社會的生活の營みに對してであるけれども、また自己の人格の完成に對してでもあるのである。故に學問をなすといふことはかうした點にもあることを知つて、是非勉學せなければならぬ。

○勝安芳はどんな風にして勉強したか○學問をなすにはどんな方法によるべきであらうか。

(二)修學上の要件——さう、安芳は師について學び、また獨學にもよつて、遂に立派に成功したのであつた。諸子は今、諸子の言の如く、日々學校に通うて、師の君について學んで居る。諸子の只今學ぶべきとして之が最善の方法である。併しだん／＼中學校も卒へ、高等教育も卒へて、學校生活から全く離れた後日にあつては、諸子の既にそなへた國語の力をもつて獨學して、以て常に自己の向上發展を圖り、また時代の進歩に順應して行かなければならぬ。

所で諸子よ、學校即ち師について學ぶにしても、そこにまた學ぶべき方法のあることを知らなければならぬ。簡單に言へば學習法のあることを知つて居なければならぬ。それは第一は專心といふことである。專心とは書を読み、また講義を聞くとときに心を他に向けず、一心に其の方

にのみ向けることである。書を読みながら心に他事を思ひ、講義を聞きながら思を他事に移すが如きは、それを放心の状態といつて、眞實學ぶ所の姿でないのである。この放心の状態にあつては、いかほど書を読み業を習ふとも、確實に自分の所得になる所なく、勉強は殆ど無効に終るのである。學問をなす上に一番貴ぶ所は、其の學ぶ所の事柄が悉く自分の所得になることである。之をなすにはたゞ一意專心に學ぶにあるのみである。學習に專心なものは、假令生れつき平凡のものであつても、そこに成功を見ることができるのである。之に反し假令どんなに天才の人であつても、放心の姿で勉強してゐたら、遂に凡才に勝をゆづらなければならぬのである。修學の上に於ける專心といふことは誠に大切な要件である。

第二には繼續といふことである。繼續といふのは中間で止めたり、また怠つたりすることなく、ずつと續けて學習して行くのをいふのである。彼の一時は殆ど狂するばかりに熱中しても、暫らくして氷の如く冷えるが如きは繼續でないのである。學問といふものは常に專心で且繼續して行く所に成功するのである。一日温めて十日冷すが如きは決して修學の道でない。勿論繼續といつても、寸時の暇も惜んで間斷なしにやれといふ意味でない。換言せば運動も休止も悉く止めて、時間の全部を學習の方に消費せよといふ意味でない。適當に運動もし休止もして、常に新しい元氣を以て持續的に學べといふのである。此の意味に於て繼續といふことは修學上大切な要件なの

である。

第三には審問といふことである。審問といふのは、書を読み、業を習つて行く中に、其處に疑義が生じたなら、よく考慮した後、師にまた友などに質すをいふのである。私共が常に諸子の學ぶ有様に注目してゐるが、中には疑義があるにもかゝらず、問ふことを恥ぢてか、問はないものがあるのを認めて居る。これはどんな心理なのであらうか。問ふことは自己の無知を語ると思つてゐるのであるまいか。若しさうとすればそれは大なる間違である。疑義を質すことは無知どころでない、却つて其の人の賢明を語るものである。教師の方では質疑するを悦び、然らざるを憂へるのである。「問ふは一時の恥、問はぬは末代の恥」といふこともあるから、疑義は躊躇する所なくどん／＼質すがよい。疑義を其の儘にして置くことは、決して修學の道でないのである。審問といふことも修學上大切な一要件なのである。

要するに諸子は日々の學習に於て、どの科目に關らず、常に専心に學び、繼續して修め、而して疑義ある場合には恥ぢる所なく十分質して、以て其の學ぶ所を明確に深刻に自己の所得とせなければならぬ。一言にて言へば専心・繼續・審問の三つは修學上大切な要件である。

○勝安芳の苦學したのはいくつ位の時か○學問するには年齢があるか○いつころが最も適當か。

(三)修學と時期——學問には年齢の制限がない。生涯がそれである。併し人の年齢を幼年・少年・青年・壯年・老年といふ様に分けるならば、少年(小學校時代)・青年(中學校時代)・高等教育時代)の時代は修學をなすに最も適した年齢である。否此の時代は是非學を修め業を習ふべき時代である。人間の準備期として、一日も無駄に出来ない大切な時代である。所で諸子は今は少年時代である。従つて修學・習業に對して一番大切な時代である。此の時代を閑過したならば諸子の將來は決して幸福であり得ないのである。で諸子よ、この若く元氣に満てる時代をば決して閑過する事なく、安芳のやうな不撓の精神と堅固な意志とを以て、専心に學び熱心に習うて後日の成功を期さなければならぬ。朱文公といふ人の詩に

少年易老學難成 一寸光陰不可輕

未覺池塘春草夢 階前梧葉既秋聲

といふのがある。また陶淵明の詩に

盛年不重來 一日難再晨 及時當勉勵 歲月不待人

といふのがある。いづれも少年時代の爲學に對して教訓し、奮起を促した詩である。かういふ詩を讀誦して、常に勉學の規箴とするがよい。

併し尙注意すべきは、勉學は少年・青年の時代のみであつて、學成り業を了へた後はもう其の要

がないと思ふことはならない。修養は男女に關係なく、人間の生涯を通じてなさなければならぬ。兎角日本人は學校を了へて社會の實務に立つやうになると、もう書を手にしぬやうになる。従つて漸次頭が古くなり、時勢に後れ、遂に老癡者として社會から放棄されるやうになる。これは日本人の大なる缺點で、大に反省せねばならないことなのである。前にも言つたやうに讀書は生涯のものである。學問に年齢がないのである。で死ぬるまで自己の職業に關するもの、精神の向上に關するもの、文藝に關するもの等を手にして、一つは時勢の進運に伴うて行き、一つは自己の人格の向上を圖り、一つには趣味を豊かにして行かなければならない。

要するに諸子は修學の時代である。そのために一日も閑過してはならない大切な時代である。であらゆる困難支障にも堪へて、不撓不屈の精神を以て修學し習業せなければならぬ。而して學業の成つた後といへども、常に讀書して修養を怠らないやうにする。かくして我はよりよく生きて行くのである。これが人としての本當の活き方である。

○安芳は一部の書を得んとしてどんな苦心をしたか○就いて學ぶ師を得んとして、どんな残念なことがあつたか○昔と今と較べたなら、そこにどんなちがひがあるか。

(四)修學と今昔——さうだ、彼は一部の書を得んとして實に苦心した。就いて學ぼうとする師から冷たく斷られての残念があつた。昔は書を得ようとしても、また師に就かうとしても、中々困難であつた。また不自由であつた。所で今の世はどうだ。書を得んと思へば、其の書はいつでも得られる。學校にはいらうと思へば、其の志すどんな學校にでも自由に入ることが出来る。すべてが自由であり解放である。どうだ昔と今とを較べて見たら實に霄壤の差違であるまいか。諸子は實にかうした有難い聖代に生れたのである。本當に多幸多福であるまいか。宜しく聖代に感謝して、眞劍に修學して習業して、其の成功を期せなければならぬ。

○安芳が蘭書を寫したのは誰かの命令か○與力某が遂に高價な蘭書を安芳に與へしはどんな譯か。

(五)自學心——さうだ、安芳が執拗に貸與を請ひ、遂に夜間謄寫を許されたにつき、彼は毎夜毎夜風雨を厭はず、時刻を違へず、約半歳の間、與力某の家に通うて、とう／＼寫し了へたのも、全く彼自身の熱心からであつて、決して人の指圖によつてさうなしたものでない。而して與力某が其の高價な而かも稀な良本を遂に彼に與へたのも、全く彼の熱心に感動したからである。このやうに人からの指圖でなく、自分自身で學ぼうといふ心を「自學心」といふのである。

誰でも學を修め業を習はうには、かうした學習心といふものが旺盛に動いてゐなければならぬ。而かも其の心が外からでなく、自身に内面から起るのであらねばならない。所で少年の時代は兎角遊樂の方面に心がとられ易くて學習心が淡く有勝である。而かもそれが本當に自分の内面

から湧くのでなく、外部から責められて止むなく動くといふものも少なくないのである。かうした状態の學習心であつては修學の效率が甚だ低いのである。學習心は人からでなく、外部からでなく、自分自身の内面から起つて、火の様に燃えてるのでなければ修學の效率が高くないのである。換言せば自から内に發動する學習心によつて學習するとき、其の學習が眞に自己の所得となり、また其の效率が高いのである。試みに問ふが、どうだ諸子の内面には學習心といふものが動いてゐるか。それが旺盛に動いてゐるか。それが外からでなく自分自身に湧き生じたか。

諸子よ、さうした自學心といふものは、どうしたら各自の内面に生起するだらうか。さうか、そこが諸子の工夫です、諸子よ、よく落ちついて靜かに考へて見よ。

1、一體修學はそれは誰のための修學だらうか。

2、人は修學は是非なさねばならないものだらうか。

3、せねばならないと知つたとき自身にはどうすればよいだらうか。

どうだ、かういふ問題にぶつかつたとき、諸子の心の内に何か油然と湧き起るものがないだらうか。さうか。それが即ち内面に發動せし自學的精神といふものである。自學心は、我は是非學習せねばならないと目覺めたときに内心に油然と起る一つの心の働きである。諸子よ、目覺めよ、目覺めない所にその自學心が起らないのである。また紅に燃えないのである。炎々と燃える自學

心のない所には決して修學は成功せないのである。

(六) 結 び——要するに學問は誰も修めなければならない。それは(1)自己の生活のために(2)社會的生活を營むために(3)自己人格の完成の爲からである。而して學問を修めるには常に不撓不屈の精神を以て當らなければならない。天才の人も平凡の人も、刻苦に刻苦を、努力に努力を重ねて爲さなければならない。才を恃んで怠り、平凡に失望して廢するが如き事決してあつてはならない。修學は人としてせねばならない尊い仕事である。諸子此の點に十分目覺めて、眞に内部から湧き起る自發的の學習心に基いて、少年・青年といふ學ぶべき時期を誤まらず、勉強しなければならぬ。特に今は昔と異つて修學は自由であり解放である、修學に關する總ての設備は至れり盡せりである。で諸子は宜しく此の聖代に感謝して、幸福を喜んで、一層奮勵して、豊富に純美に堅實に學習して、そこに有爲の人となり、圓滿の人となつて、以て國家・社會の進歩に貢獻し、進んで世界人類の福祉に致し、かくして人としての本分を全うしなければならない。分つたか。さうか、私は今日さうした善き子供を多くもつたことを深く喜ぶのである。

## 参 考

### 一、勉強

(芳賀矢一先生)

元來修養といふことは竝大抵一と通りの事ではない。それで古人は修業には勉強が大切だと信



じた。今は勉強といふ言葉が非常に安く使はれて、一時間位讀書して、今日は一時間勉強したなどいふが、一時間位の讀書が果して勉強といひ得るであらうか。勉強といふことはさう容易なものでない。我が日本人は修業を道として神聖視したによつて、其の道を得ようとするためには、中々の勉強をしたものである。例へばかの寒稽古といふ事を見よ。わざと寒中の朝早くから困苦を忍んで勉めるといふ事は、唯だ修業の容易ならぬ事を悟らせて精神修養に資する所以である。寒中朝早く起きて劍術を學び、柔術を學んだ所が、術その者が殊に寒中に上達するといふ譯ではない。それだけの熱心氣力が無ければ萬事がならぬといふ修養に外ならぬ。小娘が三味線を習ふでさへも、寒稽古といふ事をする。寒の中に稽古すれば聲がよくなるやうに信じて居るが、實はやはり藝術を苦しんで學ばせるといふ勉強の意味から出たのであらう。

昔は武者修業といつて、武士が諸國を修業して廻つた事も小説などによく出て居る。これも修業の一つ。射を學ぶものが三十三間堂で、一萬本の矢數を射通すなどいふものも勉強の一つである。丁稚奉公で白雲あたまから、手代番頭に叱られ乍ら、手代となり番頭となるのも、一人前の商人に出世するための修業。書生部屋に居て豆を嚙んで苦學するのも亦立派な人物にならうとの修業。修業とは單に智識を學ぶためではない。よい修業になつたといふのは、今の語で言へば經驗といふやうな意味がある。樂に出来ない事を忍んでするといふ事を、昔の人は修業と言つたのである。

である。日本人にはすべての點に於て此の勤勉の美風があつたればこそ、國運の進歩發達が遂げ得られたのである。

以上は芳賀矢一先生が「日本人」にかゝれたのを抜抄したのであるが、之によつて我等の祖先は常に修業に對する理想をもつてゐたといふ事を知り、且つ修業は困苦を忍んで爲さなければならぬといふことを意識しなければならぬ。今の學生には此の點の理解がだん／＼稀薄になつて行くやうに思はれてならないのである。

## 二、讀書法

(三宅雪嶺先生)

書を讀んで愚になるものもあるが、書を讀まないで愚になるものがどの位あるかわからぬ。讀書するといつても、其の人の性質によつて大いに違ふ。僅かを讀むのに多くの時間を費すものもある。また速く讀んでも、何が何だか、一向要領を得ぬものもある。或部分をとび／＼に讀んでも上手に要領を捉へるものもある。めい／＼の性質によつて同じくない。

古來世界に存する書物は幾萬になるか數へられない。従つて之を讀み盡すことも全く不可能である。其の一部さへ讀むことも頗る困難である。假令讀んだとてどれだけ效あるか疑問である。そこで讀書するには、書物を十分選ばなければならぬ。さうしてそれについて讀むとしても豫め必要と不必要とを差別せねばならない。必要な所に重きを置き、不必要な所は捨て、置く。

必要な中でも最も必要な所を取つて行つて、そこに精力の經濟を行はなければならぬ。

つかれた頭でだら／＼と讀んで一向要點を捕へず、讀み終つて呆然たるが如きは寧ろ中止した  
がよい。それよりも戶外運動でもして元氣の復活を圖り、新來の勇氣をもつてしつかり讀んで、  
其の精神のある所を掴むがよい。そこに讀書の體驗がある。

人の一生は短かい。青年もウツカリして居ると、いつの間にか老人になつて仕舞ふ。學ぶべき  
時期によく學ばないと後日の生活が幸福でない。

讀書は誰人に於ても大切なことである。併し日本人は兎角此の精神が稀薄である。學業成つて  
學校をでると、讀書よりも、つまらぬことに多量の時間をつぶして居る。他國の偉人を見よ。グ  
ラッドストーンは大なる讀書家であつた。チェールもビスマルクもさうであつた。米國の大統領  
リンコン及びガーフィールドは貧困の時、隙さへあれば攻々として讀書した。其の他大なる事  
業家にして讀書家が少くない。讀書と偉人はそこに密接の關係あることを知らねばならない。  
書物は生かして讀まなければならぬ。殺して讀むことは讀書の眞意義でない。

以上は「世の中」にでて居る三宅雪嶺先生の説にたよつて記したのであるが、青年諸君即ち中  
學生等に對してとりわけ深刻に警める所があると思ふ。

### 教育勅語

#### 一、勅語

「學ヲ修メ業ヲ習ヒ」

#### 二、奉釋

##### (一) 語句

「學」とは學問のことである。學問を組織化し系統化したるを「科學」と言ふ。併しこゝは廣義  
に「學問」と奉解してよい。

「修メ」は身に體得することである。

「業」はわざのことで、即ち職業を意味するのである。

「習ヒ」は其のことによく習熟するを言ふ。

(附記) こゝに「學ヲ修メ業ヲ習ヒ」と仰せられたのは「學業ヲ修メ習ヒテ」といふのをかく  
分けて仰せられたものとも奉察することが出来る。

##### (二) 大意

人は貴賤貧富の區別なく、また天性の賢愚に拘ることなく、誰も學問を修めなければならぬ。  
學問を修めることは、知識を廣め徳性を養ふ所以で、人たるもの大切な道である。

併し學を修めて知識を廣め徳性を養ふとも、實地に當つて業務を執ることが出来なかつたら、

世に立つて人たるの務を全うすることが出来ない。だから學問を修めると共に業務を習ふことも怠つてはならない。即ち修學と共に習業も人たるものの大切な道である。と仰せられたのである。

### 聯絡

本課と聯絡ある兒童の既習の知識は次の如くである。尋常小學修身書卷三第五「學問」

二宮金次郎の勉學○金次郎は不仕合を重ね難難辛苦の中に人となつたけれども、よく學問にとめたから、世人に敬はれ後の代までも尊ばれる人となつたこと○人は貧なる家に生れても金次郎に倣うて學問を勵まなければならぬ。父母の許に何の不足もなく幸福に暮すものにあつては、尙更學校の課業に勉強して必ず勝れた人とならなければならぬこと○人は農工商いづれの職業に従事しても學問をなすことが大切であること等。

### 同卷四第八「勉強」

渡邊登の苦學○有爲の人は難難辛苦の中に暮しながらもよく學問を修めたことは之を渡邊登に見ることが出来ること○人はどんな境遇にあつても、志を立てて勉強すれば、何事をも成しとげ得ること○勉強は自ら進んで爲すべきことで、人に強ひられて爲すが如きは眞の勉強でないこと○艱難汝ヲ玉ニス(格言)○日々學校で學んだことは歸つて必ず復習すること等。

## 教授の實際

### 區分

第一時 例話を授く。

第二時 訓話を授く。

### 教具

勝安芳の肖像

### 教法

例話に於ては次の要項の下に授く。

(一) 勝安芳の略傳。

(二) 安芳の苦學。

(一)に於ては安芳の略傳を説いて、其の人の全人格——勿論大體であるが——に觸れさせる。

(二)に於ては(1)安芳が貧困の中にあつても修業して他日立派なものになつてやらうといふ強固な意志が常に胸中に動いて居たこと。

(2)従つて彼は身を切るやうな寒中にも稽古着一枚着て、每晚權現堂に通つて心膽を鍛へ劍術を

練つたといふ其の修業振が實に眞劍であつたこと。  
③彼はまた蘭學に志すや赤貧と戦ひ、屈辱を忍び、困苦に耐へ、所謂不撓不屈の精神を以て之に當つたこと。

等につき切實に説く。而して之と聯結して

- (一) 學問の必要。
- (二) 修學上の要件。
- (三) 修學と時機。
- (四) 修學と今昔。
- (五) 自學心。

等の要項の下に適切に訓話する。最後に教育勅語「學ヲ修メ業ヲ習ヒ」の御句に歸結する考である。

かくして爲學は人生に於て根本的に最も大切な道であるから、適切に諭してよく體得させ、現實にするやう注意する

### 第一時

△例話を話す

### 一、問答

既に習つた卷三第五「學問」、卷四第八「勉強」等の内容と連絡して

○諸子は日々學校に來るのは何のためか○學問とは何か○學問をするにはどんな心得が大切であるか○眞劍に勉學して成功した古人で諸子の知る人はいふ風に問答して

「今日は若い時から不撓不屈の精神を以て學習し、國家のために偉大な成績をのこした尊い人について話す云々。」

と告げて本課の教授にはいつて行く。

### 二、例話

次の要項につき切實に話す。

- (一) 勝安芳の略傳 (全人格に觸れて)
  - (1) 貧困と堅志(燃える心)。
- (二) 安芳の苦學
  - (2) 劍術の修業(金鐵の心)。
  - (3) 蘭學の研究(不撓の心)。

以上の内容は「例話資料」を参照して平明に適切に説き、安芳の熱烈な學習に對して深く感服さ

せる。

### 三、整理

○勝安芳はどんな家に生れたか○貧困の中に居ても彼の胸中に常に燃えて居たものは何か○その學習心はどんなに表はれたか○劍道の修業振は○蘭學の學習振は○彼が遂に立派に成功したのはどんな心の發動に基いたのであらうか……といふ風に問答して一層深く感激させ、自分もまたさうした不撓不屈の精神を以て學んで行かうといふ意志を惹き起させる。

### 四、教科書を授く

1、一讀させる。

2、質疑に答へる。

3、精神のある所を捉へさせる。

安芳の熱烈な勉強心はどこに表はれて居るか——斯の心は安芳の將來を如何にせしか。

### 第二時

△訓話を行ふ——教育勸語に歸結

### 一、問答

○勝安芳が國家に重く用ひられたのは何に基くのだらう○安芳はどんなに勉強したか○かく苦

學したの彼のいくつ位の時か○安芳の時代と今とを比較したら修學の便否はどうだらうか○安芳の勉強は自身の發意か、それとも人に強ひられてか。

### 二、訓話

以上の問答と交渉して次の諸項の下に適切に教訓する。

- (一) 學問の必要。
- (二) 修學上の要件。
- (三) 修學と時期。
- (四) 修學と今昔。
- (五) 自學心。
- (六) 以上の結び。
- (七) 教育勸語「學ヲ修メ業ヲ習ヒ」に結合。

語句の讀方——意義——結合

以上の内容は「訓話資料」を参照し簡明に適切に説く。但し訓話するとき各問答に即して行つて行く。

### 三、批判

次の事項につき考察批判させ、また反省もさせて實踐上の指導を行ふ。

- (一) 諸子の學習と安芳の學習とを比べて見て、其の魂の上に相違はないか。
  - (二) さうした學習魂の持主は安芳にのみ限るか。
  - (三) 諸子にはどうして其の魂が起らぬか、熱灼しないのか。
- (注意) (三)を工夫の問題として彼等をして随時に工夫させる。

## 第十五課 勇氣

### 教授の要旨

本課に於ては何事をなすにも困難を恐れず勇氣を振つて之を成遂ぐべきことを論ずを以てその要旨とする。

勇氣とは危難・威壓・困苦・迫害・障碍等に對して、毫も恐れず、屈せず、ためらはず行動する所の氣力をいふ。併し空拳で猛虎を搏ち、船なきに激流を涉らうとする様な思慮の伴はない氣力ではない。冷靜に事柄の性質を考へ道理に照して見て、正善であつた時、其の處する方法を定めて、敢然と決行して其の目的を達して後已む所の氣力をいふ。之を眞の勇氣といふのである。眞の勇

氣は即ち道德である。

人は如何なる業を執り、如何なる事に當るにしても、そこに困難があり障碍がある。それを恐れ、それのためらうやうでは、その業もその事も成るものでない。勇氣を振つて敢行して行く所に遂行があり成功があるのである。

また人は自己の所信を公にし、眞理を傳へんとする時、そこに非難があり、妨害があり、甚だしきに至つては迫害の身に及ぶ事もある。かゝる場合にも勇氣を振つて、その所信を貫徹し眞理の擁護に努めなければならない。

本課に於てはかうした内容をよく理解させ、例話と、また彼等の生活と交渉して、之が現實心を啓培して行く所に要旨を置くのである。

### 教材の研究

#### 例話資料

##### 勝安芳の勇氣

勝安芳は前にも言つた如くに、年三十三の時、海軍傳習所の練習生に選拔されて、和蘭人について海軍のことを習つたが、さきに刻苦して蘭書を學び蘭學の素養が出来てゐたから、傳習上甚

だ好便宜であつたのみでなく、また熱心に其のことを學んだから、その進歩殊に著しく人々を驚歎させた。二箇年にして業を卒へてから、彼は傳習所に留つて練習生を教へることになり、屢、九州の近海に航行を試みて、實地の練習をも積み、かくして三年に及んだ。

安政五年(紀元二五二八年)六月、我が帝國と北米合衆國との間に通商條約が締結された。そこで之が批准書を、我が國から特使を派遣してワシントン府で交換することになつた。此の時、合衆國政府は我が使節を迎へるために軍艦を我に派遣することになつた。而して我が國からは非常の場合用意として我が軍艦一隻を彼について行くことにした。

當時我が國には三四隻の軍艦があつた。が併しいづれも脆弱な小艦で太平洋を渡航するとしては甚だ危険であつた。其上之を運用する士官も水兵も十分でない。士官といひ、水兵といひ、漸く三四年前から長崎で和蘭人の手によつて訓練されたはや／＼のみで、實地の經驗は勿論、技術もまだ未熟練であつた。で實は政府も之を危んで、或は派遣説に傾き、或は中止説に傾き、所謂諸説紛々の姿で決する所がなかつたのである。

此の時に當つて、日本人が自分の國の軍艦を自分で操縦して、その技倆を外國人に示し、彼等に一泡吹かせるに最もよい機會は今だ。今をおいて後はないといつて、最も熱烈に其の派遣を主張した一人が居た。それは即ち勝安芳其人であつた。安芳は「既に船艦を造り、海員を練つて

置きながら、遠洋航海の用に充てないならば、一層のこと海軍を起さない方がよかつた。腕がないといつて亞米利加派遣を危むならば、先づ練習艦を率ゐて印度洋に航海して、其の實際をためしてみよう。」といひ出して猛烈に幕府に迫つた。幕府も遂に安芳の勇氣と熱心とに感じて、遂に之を許して安芳等を派遣することに決した。蓋し我が國人が我が軍艦に乗り込んで太平洋を横切るといふ壯舉は、國史あつて之が初めてであつた。

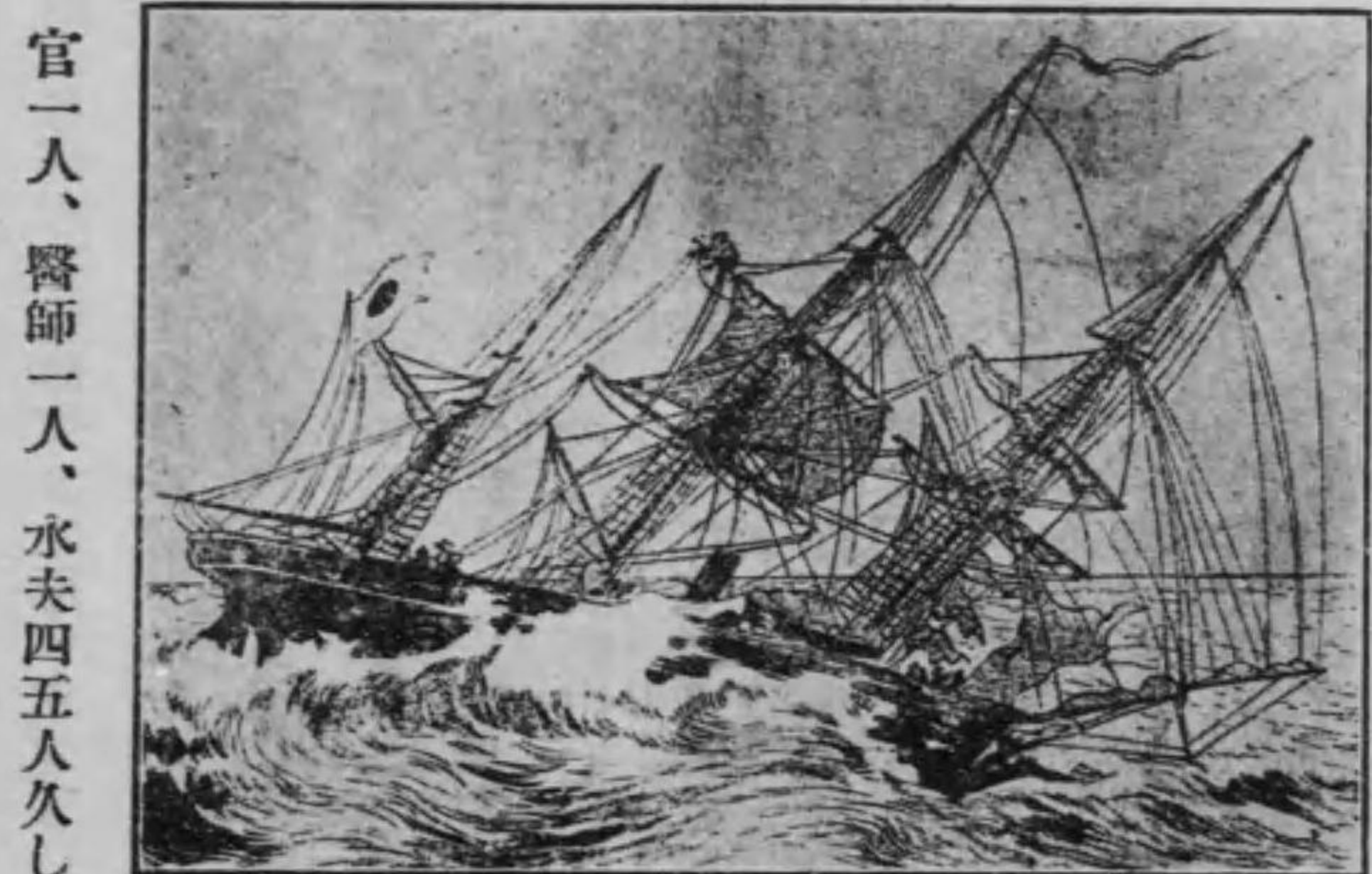
當時品川灣にあつた軍艦の中で、此の長期の航海に役立つと思ふものは朝陽丸と觀光丸との二隻であつた。其の内でも朝陽丸は比較的堅牢に出來てゐたから、安芳等は朝陽丸を選んで夫々準備にかかつた。ところが幕府の方からは觀光丸にせよと命じて來た。安芳は觀光丸の非なるを知つてゐたけれども、此の際、彼れ是れと争うては千載一遇の好機を逸する恐れがあるからといつて、忍んで其の命に従うて、更に夫々の準備に取りかゝつた。ところが米國の領事から觀光丸では危険であるから、他のものにせよといふ忠言があつた。そこでまた觀光丸をすて、神奈川から更に咸臨丸を迎へて、それ／＼準備をした。此の間に於ける安芳等の苦心は實に想像以上のものであつた。

咸臨丸といふ軍艦は西曆一八五六年(安政三年)に和蘭で造つた船で、長さ百六十三呎、幅二十四呎、噸數二百五十噸(和蘭噸數)、馬力は壹百馬力で、十二門の大砲を備へ、三本橋の蒸汽船で

あつた。

萬延元年正月十三日(今から六十餘年前)に、咸臨丸は品川を出帆して長途の航海についた。艦は小艦であつたけれども、之に乗つてゐるものは大膽不敵な日本男兒のみであつた。殊に其の指揮官は偉丈夫勝海舟であつた。

咸臨丸の内には我が國民に獨立自尊の精神を吹き込んだ彼の名高い福澤諭吉先生も同乗してゐた。先生の當時のことを述べられた記事の中に、



「今度咸臨丸の航海は、日本開闢以來初めての大事業で、乗組士官の面々は固より日本人ばかりで萬事に當る覺悟であつた。處が其の時、亞米利加の甲比丹ブルックといふ人が、太平洋の海底測量のために小帆船に乗つて航海中、薩摩の大島沖で難船した。が幸に助かつて横濱に来て、徳川政府の保護を受けて、甲比丹以下士官一人、醫師一人、水夫四五人久しく滞在の折柄、日本軍艦が桑港へ航海と聞き、幸便だから

之に乗つて歸國したいといふので、其の事が定まらうとすると、日本の乗組員は米國人と一絡に乗るのは厭だといふ。何故かといふに、若し其の人たちをつれて行けば、却つて我等は亞米利加人につれて行つて貰つたやうに思はれて、日本人の名譽にかゝるから乗せないと剛情を張つた。夫れ是で政府も餘程困つた様子であつたが、到頭それを無理壓し付けにして同船させたのは、政府の長老も内實は日本士官の技倆を覺束なく思つて、一人でも米國の航海士が同船してゐたならば、まさかの時に何かの便利にならうといふ老婆心であつたと思はれる。」

と言つてゐる。結局米國人を同乗させはさせたが、一切干渉させないといふ條件であつた。咸臨丸の航海中の有様については安芳は

「丁度其の頃はおれは熱病を煩つて居たけれども、疊の上で犬死するよりは、軍艦の中で死ぬるがよいと思つたから、頭痛でうん／＼いつてゐるをも構はず、豫ねて通知して置いた出帆期日も迫つたから、妻には一寸品川まで船を見に行くといひ残して、向ふ鉢巻で直ぐ咸臨丸へ乗り込んだ。それから横濱へ行つて石炭を積み、それから愈東へ向つて日本の地を離れた。……乗組員は上下合せて百餘名もあつたらう。凡そ此の頃遠洋航海するには、石炭を焚かないで帆ばかりでやるのだから、咸臨丸も幾度か風波の爲に難船しかつたけれども、乗組員いづれ



もかねて覺悟の上の事であり、且は血氣盛りの者ばかりだつたから左程心配もしなかつた。おれの病氣も熱のために吐血したことも度々あつたけれども、一寸も氣にかけないで置いたら、桑港へ着く頃には自然に全快してしまつた。桑港へ着くと、日本人が獨りで軍艦に乗つて、此處へ來たのは之が初めてだといつて、亞米利加の紳士等も大層褒めてくれて、船底の掃除やベッキの塗替へなども悉皆世話してくれた。それからおれどもは、南亞米利加へまはつて日本へ歸らうとしたが、亞米利加の人達は此處まで來ればよいから、そんな無謀なことはやめて早く日本へ歸れと勧めた。併し船中は皆書生氣質の者ばかりだから、そんなことには耳を傾けなかつた、所がおれどもより前に亞米利加に來て居つた日本の使節連は此の事を聞いて、おれどもを狂氣だといつて、斷然南米廻航の事を禁止した。使節から禁じられては一言もないから、おれどもも鬱勃たる雄心を抑へて、すこゝ歸國の途に上つたが、行きがけには何處へも寄航しなかつたから、歸りには布哇に立ち寄つて、それから浦賀へ歸つた云々。」

といつて居られる。實に此の航海は難航海であつた。殆ど毎日のやうに天曇り、風吹いて雨雪を捲き、海上凄く荒れて、大波は絶えず舷を打ち甲板を洗ひ、動搖甚だしく、時に船體が振折られようとしたこともあつたのである。甲板に備へ付けてある舢舨四艘の内、二艘まで激浪に奪ひ去られたといふ。かゝる凄愴激動の中にも安芳等は毫も恐れず、航海を續け、三十八日目に元氣よ

くサンフランシスコに到着した。歸路には布哇に立寄つた爲四十八日を費したが、萬延元年五月五日に咸臨丸は無事我が浦賀に歸つて、その使命を全うしたのであつた。此壯舉や實に我が國史あつて以來未曾有のことで、我が航海史上に特筆すべき不磨の文字なのである。尙福澤先生の自傳の中に、

「此の航海について大に日本のために誇ることがあるといふのは、日本の人が初めて蒸氣船なるものを見たのは嘉永六年。航海を學び始めたのは、安政二年の事で、其の業成つて外國に船を乗出さうと言ふことに決したのは安政六年の冬、即ち目に蒸氣船を見てから足掛け七年目、航海術の傳習を始めてから五年目であつて、それに萬延元年正月に出帆しようといふ其の時、少しも他人の手を藉らずに出掛けて行かうと決斷した。其の勇氣といひ、其の技倆といひ、是れだけは日本國の名譽として世界に誇るに足るべき事實であらうと思ふ。前にも申した通り、航海中は一切米國人の甲比丹ブルツクの助力はからないといふので、測量するにも日本人自身で測量する。亞米利加人も亦自分で測量して居る。互に測量したものを後で見合せるだけの話で、決して亞米利加人に助けて貰ふといふことは一寸もなかつた。それだけは大に誇つてもよい事だと思ふ。今の朝鮮人・支那人・東洋全體を見渡した所で、航海術を五年間學んで、太平洋を乗り越さうといふ其の事業、其の勇氣のある者は決してありはしない。それ所ではない、昔露西亞

のペートル大帝が和蘭に行つて航海術を學んだといふが、ペートル大帝でも、此の事は出来なかつたらう。よし大帝は一種絶倫の人傑なりとするも、當時の露西亞に於て、日本人の如く大膽にして且學問思想の緻密なる國民はなかつたらうと思はれる。」

といつてある。咸臨丸といふ小さな軍艦で、茫渺たる太平洋を横切つた事は實に我が國の誇である。我が國人の膽勇と技倆とを世界に示した不滅の誇である。而してこの誇を産み出した第一人者は言ふまでもなく勝安芳である。即ち彼の膽勇と優秀な技倆とが此の誇を作つたのである。一言で言へば、此の高價な成功は全く彼の勇氣に基いたのである。

### 訓話資料

本例話と交渉して大體次のやうな内容で訓話する。

○勝安芳等が小さい軍艦にのつて、太平洋の荒波を無事に越え、洋の彼方の人々をして驚嘆させ、我が國の航海史上に不滅の記事を残したのは、つまるところ何に基いたのであらう○勇氣とは何か。

(一)勇氣の意義——さうだ一種の氣力である。即ち危難に恐れぬ、困苦に撓まない、支障に屈しない、誘惑に囚れない、而も尙且進んで止まない所の精神の力即ち意氣である。併し勇氣の中にも虚勇といふのがある。即ち血氣にはやつて前後を顧みず水火に飛込むが如き、自分の體力を

恃んで空拳以て猛獸を搏たうとするが如きはそれである。虚勇は勿論眞の勇氣ではない。従つて勇氣は眞の勇氣であらなければならない。

眞の勇氣とは、諸子は尋三のとき木村重成の勇氣について習つたらう。あのやうに思慮の伴ふ勇氣をいふのである。即ち事の前に其の事の性質を考へ、可能を察し、また道義にも照して、然る後その事に向つて猛進するのをいふのである。所で諸子よ、彼の安芳等が小艦咸臨丸に乗込んで、太平洋の荒波を破つて米國に渡航したことは暴勇だらうか眞勇だらうか。

- 1、僅か三百噸たらずの小艦で太平洋を横切することは果して可能だらうか。
- 2、海上にはいつ雨風が暴れて大波狂ふの恐れがあるかわからないぢやなからうか。
- 3、危むといふ幕府の意志に背く嫌はあるまいか。
- 4、さういふ否定があるにも拘らず、敢て實行しようと思はしは、事前に於いて思慮あり分別ありといふことが出来ようか。
- 5、若し出来ないとせば彼等の行動の全部が暴勇に屬したといふべきであるまいか。

さあ諸子はこの點をどう考へるか。

諸子よ、それは眞勇だ、暴勇のやうに思はれる所もあるけれども立派な眞勇だ。

- 1、即ち咸臨丸は小艦は小艦だが併し太平洋を横切るとして可能であることは彼は構造の上か

らして確く信じたのであつた。

2、航海殊に長期の航海にあつては、暴雨風の恐れ海波狂ふ恐は勿論ある。併しそれはもう豫期しなければならぬ。之を恐れて居ては航海は出来なくなる。折角の機會も失ふこととなる。且彼等には假令さうしたことがあつても、毫も恐れなまいといふ大膽があつたのである。

3、幕府の方では大變あやぶんだが、併し安芳等の方では假令初めての遠洋航海であつても、十分、萬里の波濤を蹴破るだけの技倆と自信があつたのである。

4、それよりもつと大きな問題は、彼は自國の軍艦を操つるのに外人の力を藉るといふことは實に國辱だと思つたのである。彼は實に國家の體面を保たんが爲に、日本海軍の名譽を保たんがために、大和民族の意氣を示さんが爲に、自己といふものを全く犠牲に供したのである。決して血氣のはやりからでなく眞劍の勇みであつたのである。

5、故に其の事の前に於て、其處に思慮が足りなかつたとか分別を缺いたとかいふ事はない。従つて暴勇でなく立派な眞勇であつた。

と私は信じて居る。

要するに諸子よ、勇氣といふことは事をなすに當つて恐れぬ、撓まない、屈せない、退かない、しかも進んで止まざる所の一種の意氣をいふのである。併し其の意氣たるや思慮分別の上即

ち合理の上に働く意氣なのである。それが即ち眞の勇氣である。で勇氣といつたら此の眞の勇氣をさすのであることを十分承知しなければならない。

○諸子よ、勇氣といふものは諸子から離れて外にあるものか、それとも諸子の内部にあるものか○然らばどんなときにそれが外部に現はれるか。

(二)勇氣の實現——さうだ、勇氣といふものは我から離れて外部にあるものでなく、我の内部に潜んでゐるのである。而して之が現實の場合としては諸子の言の如く色々な場合がある。諸子の現在生活の上から言へば

(1) 學習上——學科を學ぶとき其の苦みに堪へて行くが如き

(2) 作業上——家事を手傳ふとき其の困難に堪へて行くが如き

(3) 交際上——誘惑を退くが如き

(4) 運動上——日々の體操や遠足の時其の困難に堪へ寒暑に屈せぬが如き

場合はそれである。また諸子の將來の生活の上からいへば

(1) 或る事業をなさんとする時、そこに幾多の困難があり障害があつても、之を排し之に堪へて、それが達成に向つて奮闘するが如き(平時の勇)

(2) 或は若し國際上の平和が破れて、對者國と葛藤が生じた時、私の一身一家を犠牲にして、公

のために勇ましく奮戦するが如き(武勇)等はそれである。

過去の聖人・偉人にして、我が内面に潜む勇氣を外に實現した例としては、諸子の既に學んだ木村重成・勝安芳等は勿論其の好例であるが、次の如き人々も好例の人たちである。

昔支那の孔子が、大樹の下に弟子を教へて居たとき、宋の司馬桓魋といふのが其の樹を引き抜いて孔子を壓殺さうとした。弟子どもは速かにその場を去ることを勧めた。併し孔子は「天徳を予に生ず、桓魋それ予を如何せん」といつて其の場を動かさなかつたといふ。これ死生の間に立つて泰然自若たるもので、これは全く内部の自信から生じた大勇である。

また昔ギリシヤの國のソクラテスが、彼は無實の罪のために獄に投ぜられたとき、其の友クリトーが脱獄を勧めたけれども、彼は「汝の厚意は謝す。併し我今脱獄せばこれ國法を破るものである。國法には絶対に服従せねばならぬ。」といつて頑として應じなかつた。さうして遂に國法の命するがまゝに毒を仰いで死んだ。これは全く眞理の擁護のために自己を犠牲にした大勇である。

我が國に於て昔僧日蓮は、自己の宗教を弘めんが爲に大に努力したが。他宗門の人々から非常な壓迫と危害とを加へられた。併し彼は泰然として動する事なく教義のために一生を捧げた。

これは全く自己の堅固な信念から生じた大勇である。

かく何れも大勇・眞勇の持主であつた。而して其の勇氣たるや外から與へられたのでなく、皆自己の内面から迷り出た勇氣であつた。

諸子よ、かく勇氣といふものは、外から來るものでなく、各々人々の内部にひそんで居るのである。換言せばめい／＼の持物である。人の持物でない。従つて自分の持物は自分で使つていかなければならない。自分で自分の生活・活動の上に現さなければならぬ。而して現すべき場合は前にも言つたやうにいろ／＼あるが、いづれの場合に於ても、よく使ひよく現はして善良な結果を收めて行かなければならない。若し人の生活・活動の上に勇氣といふもの、現はれがなかつたら、その生活その活動が次第に衰へ、遂に破滅し終るのである。諸子よ、勇氣は私共の幸福を産む上に、ひいては國家・社會の福祉を進める上にも大切な徳である。故に諸子は内に、旺盛に此の徳を養うて、外に旺盛に表現して、さうして自己を幸福にし、社會・國家の福利をも増進して行かなければならない。これが諸子のなすべき善の大切な一つである。

(三)勇氣の養成——勇氣は誰人にもその内面にひそんでゐるけれど、修養によつて一層之を旺盛にすることが出来る。即ち身體を強健にするのである。知識を明徹に磨くのである。道徳を堅固に修めるのである。昔から剛勇であつた人、沈勇であつた人、大勇であつたといふ人は、いづれ

も身體の强健な人、また明徹な知識を有して事理に明かな人、また徳義の高い人であつたことによつてそれが明かなのである。要するに勇氣は本來の勇氣にも基くのであるが、本來の勇氣は修養によつて更に増加し旺盛になるのである。

### 参考

#### 一、勇氣

勇氣は克己・忍耐・進取等の實行の方面に對する意氣である。これを以て剛強奮進の徳といふ時、最も勇の意氣を體驗することが出来る。従つて人の意志的生活に對する徳であるが、この意氣たるや、又同時に共同善社會善を意識するといふ理性に支配せられねばならない。故に今勇氣を定義して見ると、共同善に奉獻しようとする合理的意志が、剛強奮進の意氣を以て事に當り、恐怖困難等に對して本能的に畏縮しない所の徳をいふのであるといはれる。孔子曰く「勇者ハ懼レズ」と、然し恐るべきをも恐れざるを以て勇と稱したのでは決してない。是は孔子の弟子子路が孔子が顔淵に向ひ「之ヲ用フレバ即チ行ヒ、之ヲ舍ツレバ則チ藏ル、惟我ト爾ト是レアルカ」といはれたのを聞き「三軍ヲ行バ誰ト與ニセンカ」といつて猛勇無双の自分と共にせんとするといふだらうと思つたのに豈に圖らん「暴虎馮河死シテ悔イナキ者ハ吾ハ與ニセズ、必ズヤ事ニ臨ンデ懼レ謀ヲ好ンデ成サン者ナリ」と答へて無謀の奮進を戒めて居られる。アリストートルは更に勇と

は事に臨んで漫に怯懦であるのと、亂暴であるとの中庸であるといつたも同様の事である。勇とは恐るべきは之を恐れ、周密なる思慮の下に斷然として奮進するをいふのである。

故に勇は常に道義に對する尊敬心と相伴はなければならぬ。剛強奮進の意氣あるも、道義に對する尊敬心なくば其の行や虎狼の所行である。道義に對する理解と尊敬心があるも、之を行はんとするの意氣を缺く時は薄志弱行途に一事も成し遂げる事が出来ない。故に吉田松陰は其の士規七則に於て「道ニ志ス義ヨリ大ナルハ莫シ、義ハ勇ニ因リテ行ハレ、勇ハ義ニ因リテ長ズ」と戒めてある。人一度道義と意氣との合一の境に至らんか、茲に「自ら反ミテ縮カラズンバ褐寬博トイフトモ吾レ慚レザランヤ、自ら反ミテ縮クンバ千萬人トイフトモ吾レ往カン」と孟子のいはれた眞の勇氣の境に至られる。褐寬博とは賤民である。内に省て疚しき時は由なき賤民の中に行くのも恐ろしい。然し一度疚しからざらんか、千萬人の前に立つ豈恐るゝ所あらん。眞の勇氣はこの道義心の上に立つて始めて生じ得るのである。

以下勇の目を論じて行かうとするが、之をなさんには心術に關する者と行動に關する者との二に分けるを便とする。今其の心術に關する方を述べると、消極的に恐怖・困難・慾情・誘惑に堪へ忍ぶ方面には誘惑を退け、私慾に克つ克己、辛苦に堪へ、困難を凌ぐ忍耐がある。更に堪へ忍ぶのみならず、進みて爲さんとする積極的の方向より見たならば、事を爲さんとするに當り常に

向上して一刻も懈怠せざる進取、勤勉の意氣がある。事に當つて退卑する事なき勇往邁進の元氣がある。更に一度是なりと信ぜんか、些の遲疑する所なき決斷の志氣がある。斯の如きは共に勇の心術的方面である。

以上の如き心事を以て行動する時に於て、之を其の對象に依り、學問事業に關する勇氣と軍事に於ける武勇との二方向に分けて論ずる事が出来る。學問事業に於ける勇氣は又積極的と消極的との二つに分れる。積極的勇氣といふのは、苟も可なりと信じて或る事業を成さんとするの時に於ては、幾多の困難幾多の障害あるも之を排し之に堪へ、斷じて行ふ所鬼神も之を避くといふ底の意氣を以て斷々乎として成し終へるもので、大政治家大事業家等に於て之を見るものである。彼の立志傳中の人物は多く之に屬せざるものは無い。消極的の勇氣とは苦痛・困難・迫害等の避くべからざるを知る時は、一段高き道念の存するを知る事よりして、之を信じ、之に安住して、將さに來らん禍害・危難・苦痛等を回避する事なく、毅然として之に堪ふるをいふのである。孔子衛の國より宋國に入らんとし、大樹の下に禮を教へられたる時、宋の將桓魋といふ者が卒に命じて樹を倒して孔子を殺さんとした。門人狼狽して其の逃避を勧めた時、子毅然として曰く「天德ヲ予ニ生セリ。桓魋其レ予ヲ如何」と遂に従容して色を變へなかつた。この大勇氣は實に徹底したる大自信の力に依らずんば不可能である。而して事斯の如きに到るは實に勇の極致である。

東西幾多の學者宗教家にはこの類頗る多い。

勇一度武勇に入る時には純然たる行動上に於ける積極的方面であり、世上普通に於て勇氣と稱するは全く之を指示する。而して武勇には既に軍人に賜はりたる勅諭に於て宣うてある如く、大勇と小勇との二がある。小勇とは何ぞ「血氣にはやり粗暴の振舞に出づる事」である。徒らに自己體力の充實を傲り、其の横溢を抑へる事が出来ないで、他人を威嚇し、迫害する野蠻的の銳氣である。斯の如きは決して眞の勇氣でない。戰場往來の老將軍の言に依ると、平生血氣にはやり、大言壯語し、他人を凌辱した者は、必ず十人が十人戰場矢石の間に於ては、氣餒え、神落ちるの徒であるといふ。小勇の徒は要するに眞の勇士でない。所謂暴虎馮河の勇とは此れである。大勇の人は然らず「能く義理を辨へ、能く膽力を練り、思慮を殫して事を謀り、小敵たりとも侮らず、大敵たりとも懼れず、己が武職を盡さん」とするの人である。平常人に接するに溫和謙遜を以てし、剛毅木杗であつて、而して一度大事件に際するや、周密なる思慮を以てよく事を處理し、敵に向ふや奮進猛擊少しも屈する事なきをいふのである。戰場に於て殊勳を立つるの士は多く平素に於ては溫順であつて我意を振はざる人であるといふ。心すべき事である。大楠公は這邊の消息を切實に道破して居る。即ち

上勇といふものあり。心に物を思ひ事に臨んで少しも騒ぐ氣色もなく、物言ひ、行跡ともに常

に變ずる事なき者をいふなり。簡様なる者は本心少しも違はぬ故に死すべき所を死ぬるものなり。又生くべき所をも生きて重々の用に立つ者なり。仁義の勇者といふなり。

血氣の勇といふものあり。勝に乗る時は大功の者より詞さはやかに聲高くして、諸人にすぐれたる體に見ゆれども、事の急なる時は死ぬべき所を通れきたなき死をするものなり。

生得の勇といふ者あり。其の行は大かた何事にも大將の下知を輕んじ、傍輩に雜言をいひ、私の事どものみ好み、是れを好しと思ひ、人を人とも思はざるなり。自然の事に臨んで一命をすつれば能き事とのみ思うて、片むきなる者なり。かやうの者は大方死際惡しく、むざとしたる死様をする者なり。武勇はあれども智慧のなきしるしと思ふべし。

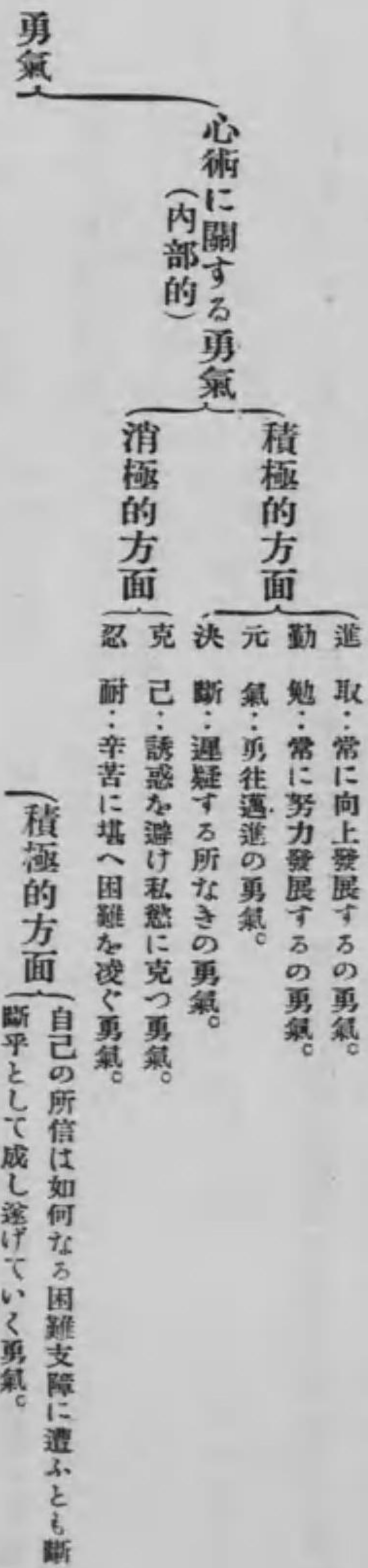
臆病といふ者あり。譬へば事に遭うておくれ、未だあはざる以前に後れ、顔の色替り、物言ひあとさきになり、息づかひあらく、聲ふるひ一眼の内かはり諸體その常にかはるものあり。是は臆病といふ病なり。

一大事に際しては、あらゆる手段を盡しあらゆる人事を盡して、其餘は之を天命に委するといふのは沈勇といふ武勇の消極的なる一形式である。

尙武の精神は我が國民性の重大なる精神の一である。彼の全國幾百萬の兒童の情緒に共鳴して一人も知らざるなき一人も歓迎せざるなき桃太郎の遠征談の如き、實に我が日本民族の武を尙ぶ

の精神の結晶して、外に投射せられたるものである。此の精神凝つては即ち我が特有の道德、武士道を生じた。今日及び今日以後の教育が、少しにてもこの民族固有の尙武の精神を薄弱ならしめたとしたならば、それは確かに國民教育の大任に當つて居る教育者の祖先及び國家に對する大罪惡である。大夫の弓杖振りたて射つる矢を後見ん人は語りつぐがね」と萬葉集笠金村之を歌ひ、更に彼の武勇詩人大伴家持が「丈夫や空しくあるべき、梓弓未振り起し投矢持ち千尋射わたし劔太刀腰にとり佩き足引の八峯踏み越えさし任くる情障らす後の代の語りつぐべく名を立つべし」と歌ひ、一讀懦夫を起たしむる底の熱烈なる勇武の意氣を有したりし、これ等祖先に對する大罪惡である。

以上に基き之を分り易く表にまとめて見ると次のやうになる。



行動に關する勇氣  
(外部的)

學問事業に對する勇氣

消極的方面

道念によつて迫害危難苦痛等に毅然として堪へる所の勇氣

軍事の場合に於ける(武勇)勇氣

大勇  
小勇

## 二、勇氣の源泉

(一)奮闘と勇氣——偉人たうとするには奮闘を要し、奮闘せんには勇氣を要する。而して其の勇氣は所謂血氣の勇氣でなく、また蠻勇でなく、眞の勇氣である。眞の勇氣は數ふる諸徳の中でも殊に主要なもので、古今東西の齊しく重する所である。

(二)勇氣の養成法——既に勇氣の重んずべきを知れば、進んで之が養成法を考へなければならぬ。古來此の徳の必要を論じ、又其の養成の忽にしてはならないことを説けるもの極めて多くあれども、其の方法を示すものに至つては實に寂漠たるの感がある。思ふに勇氣養成の要訣は其の源泉を涵養するにある。

(三)身體の強健——勇氣の源泉として先づ指を屈すべきは、其の身體を強健にするにある。勇者は強健の人に多く、怯者は虚弱の人に多い。併し病弱なもの皆悉く怯懦だといふのではない。稀には強壯者を凌ぐ程の勇者もないではない。これ勇氣の源泉は單に身體の強健にのみあるのでなく、猶他にも存することを證明するのである。

(四)智——然らば第二の源泉は何か。病弱な學者であつて往々勇氣に富めるものあるを思へば、智も亦其の源泉たるべきであるまいか。蓋し智がなければ惑があり。惑があれば疑が生じ、疑が生れば意氣沮喪する。故に無智で能く勇なるものはないのである。勇氣は盲目的に危害を無視するに存するものでなく、能く危害を豫知して之に打ち勝つにある。智者は必ずしも勇者ではないけれども、眞の勇者は又智者でなければならぬ。世に學者は臆病だといふ評もあるけれども、それは知識のまだ透徹せないものゝことで、眞の智者をいふのではない。無智であつて勇あるがやうに見ゆるは、謂はゆる盲蛇に臆ぢざる勇氣で、眞に勇あるのではない。知識透徹し事理に明かなるより生ずる勇氣は概ね尙ぶべきである。かの學者高僧にして沈勇あるものは即ちこれである。

(五)徳——智が眞勇の源泉たることは上に説きし如くである。然し徳の之に伴はないときは眞に大勇は出づるものでない。眞勇あるもの智者に多いといふけれども、蓋し智には多く徳の伴へるものである。徳の伴はない智は眞智でない。従つて之から出る勇氣も眞勇でない。だから眞勇の源泉として最も重すべきは徳なりといはなければならぬ。

(六)有徳者の眞勇——徳は眞勇の出づる一大源泉である。徳あるものは俯仰天地に愧ぢない。其の心公明正大で毫も後暗い所無いから、氣の痿ゆることなく、義のある所乃ち勇氣の隣物として



躍動するを覺える。良心は眞勇の根源である。人若し勇ならうと欲せば良心に従ふたらよい。謂はゆる自ら反みて縮くんば千萬人といへども吾往かんの概あるものが即ち是である。古來の聖賢の大勇は即ち此の種の勇氣である。人よく此の源泉を涵養せば眞の勇氣は自ら湧き出て、滾々として晝夜絶えることがないであらう。(澤柳政太郎著修身書に據る)

### 聯絡

既習の知識であつて、本課と聯絡あるものは次の如くである。

尋常小學修身書卷一第六「元氣よくあれ」。

常に野外に出て元氣よく遊ぶこと○學校にあつて課業を學び家にあつて仕事をすることも元氣よくあること○日常の起居動作はすべて快活であること○寒暑に恐れぬこと○粗暴を元氣よきことに思ふは誤りであること等

同卷二第八「臆病であるな」。

臆病者の例話○俗にいふ化物や幽霊は固よりなきもの、これあると思ふは多くは臆病から起ると○妄りに物におぢれて人に笑はれることなきこと等。

同書卷三第十二「勇氣」。

木村重成の勇氣○眞の勇氣を養ひ、言ふべきことは斷じて之を言ひ、行ふべきことは斷じて之

を行ふこと等。

要するに勇氣については、

- 1、勇氣は眞の勇氣であらねばならないこと。
- 2、眞の勇氣とは、よく理知に訴へて正しいと認めたる事に對して實現すべき勇氣であること。
- 3、正しいと認めたることに對しては、假令どんな威壓があつても言ふべきことは言ひ、行ふべきことは斷乎として行ふこと。
- 4、勇氣實現の方面としては、
  - (イ) 日常の起居動作は快活であること。(ロ) 遊ぶ時にも學ぶときにも元氣よくあること。
- 5、其他

(イ) 臆病は勇氣の反道德であること。

(ロ) 粗暴と勇氣とを混同せぬこと。

等が既有的知識である。

### 教授の實際

### 區分

- 第一時 例話を授く。
- 第二時 訓話を授く。
- 第三時 考察批判。

教具

勝安芳の肖像 咸臨丸の圖 世界地圖等

教法

例話に於ては、勝安芳が國家の體面を保たんがために、我が海軍の名譽を保たんがために、大和民族の意氣を示さんがために、自己を全く犠牲に供して、一小艦たる咸臨丸を操縦して、大洋の怒濤激浪を蹴破つて遂に桑港に到着し、彼の國人をして驚歎措かざらしめた其の絶大の功績と旺盛な勇氣とを説くを以て主眼點とし、訓話に於ては、

- (一) 勇氣の意義。
- (二) 勇氣實現の場合等。
- につき話して、勇氣に對する内容を明確にし、實踐の方向を指示し、尙一步進んで彼等の理解に顧みて
- (三) 勇氣の生ずる源泉

につきても知らしめて、此の徳を徐々に養成さる。

第一時

△例話を授く。

一、問答

○木村重成はどんな人であつたか○どんな場合に勇氣を現はしたか○勇氣を現はす場合として他にまだあるか……といふ風に問答して、

「今日は勝安芳の勇氣につき語らう。」  
と告げ、それから本教材にはいつて行く。

二、例話

次の要項の下に適切に話す。

- (一) 勝安芳優秀の成績を以て海軍傳習所を了へたこと。
- (二) 通商條約の締結と使節の派遣につき。
- (三) 使節派遣に對する安芳の熱心な主張につき。
- (四) 安芳咸臨丸を操縦して使命を全うせしこと。

咸臨丸の出帆と安芳の病氣——航海中に於ける大困難——桑港に到着と米人の感歎——無

事歸國して使命を全うした——勇氣と成功。

以上は「例話資料」の部を参照して簡明に適切に話す。

三、整理

安芳の勇氣のある行動につき問答して一層理解を確實にし、感激を深くし、現實心を刺戟する。  
四、教科書を授く

第二時

△訓話を行ふ。

一、問答

○勝安芳は幕府が日本軍艦を米國へ派遣せようと企てた時、どういふことを願ひ出たか○それはどんな考であつたのだらう○幕府は安芳の願に對してどうしたか○何故容易に許さなかつたのだらう○安芳の願ふ所は不可能なことなのだらうか○幕府は遂にどうしたか○航海中の有様はどうであつたか○桑港についたとき彼の國人はどうしたか○太平洋を横切る初航海の結果はどうであつたか○此の立派な成功は其の基く所何だらうか……といふ風に問答し、之と交渉して次の項につき訓話する。

二、訓話

(一)勇氣の意義につき。

(二)勇氣を現實にする機會につき。

(三)勇氣の源泉につき。

以上の内容は「訓話資料」を参照して平易に適切に話す。

三、整理

以上説いた所の要點を問答して一層此の道念の啓培に努める。

第三時

△安芳の話を経て批判させる。

一、次の如く問答して安芳の行動につき道德的批判を行ふ。

1、勝安芳はどんな人であつたか。

2、安芳の生活に於て始終を貫く一つの尊いものがあるが、それは何だらうか。

3、勇氣に満ちた人であつたといふことはどうして分るか。

4、勝安芳のえらひ所、尊ぶ所はどんな點だらう。

二、次の如く問答して、彼等をして深く反省させ、これからの生活につき深い領をなさしめる。

1、諸子はこれまでの諸子の生活に於て、勇氣を現はしてゐるかどうか。(各自をして靜かに

過去を想起させる)

2、今後の生活に於て諸子はどうせよと思ふか。(反省と共に勇氣の現實法につき工夫させる)

(注意)更にもう一時を割いて、各自の工夫せし所につき批判してやることもよき指導である。

### 備考

#### 咸臨丸

咸臨丸は幕府が和蘭に注文して建造した軍艦で、安政四年八月長崎に到着した。三本橋の蒸汽船で、大砲が十二門備へてあつた。港灣出入の場合には蒸汽を用ひ、遠洋を航するときには専ら帆を用ひたのである。當時我が國の軍艦中で遠洋航海に堪へる見込のあつたのは此の外に朝陽丸と觀光丸との二隻あるのみであつた。今戦艦長門と比較するときは次の如くである。

艦名	要目	全長	全幅	深さ	吃水	噸數	馬力	速力
咸臨丸	門	六六〇・七呎	九十五呎	四十二呎	三十呎	三三八〇噸	一〇〇	二十三日 (二時間十里二十八町)
和蘭	船	二五五	三十五	二十	十五	二百五十噸	八十	二十三日 (二時間十里二十八町)

咸臨丸に乗組んで合衆國に渡航せ人々は

艦長 軍艦奉行木村攝津守。

指揮官 軍艦操練所教授方頭取勝麟太郎。

運用方 同教授方出役佐々倉桐太郎外二名。

測量方 同教授方出役小野友五郎外二名。

その他蒸汽方・公用方・通辯・醫師・水夫・艦長従者等合せて九十六人であつた。福譯諭吉は艦長従者として乗組んだのであつた。

亞米利加合衆國へ派遣の使節は正使外國奉行親見豊前守、副使外國奉行村垣淡路守、目付小栗豊後守等で、其の乗つた船は合衆國軍艦ボーハタンであつた。

## 第十六課 忍耐

### 教授の要旨

本課に於ては、人は如何なる艱難に出遇ふとも、挫折することなく、よく忍耐して行く精神を養ふを以て其の要旨とする。

すべて人は何事をなすにも、そこに困難があり支障がある。而してそれには自然的のものもあ

れば人爲的のものもある。所で其の事を成し遂げるには、それ等のために挫折することなく、よく忍耐して行かなければならない。若しさうでない、従つて事の成功もない譯である。故に忍耐といふことは事の成功に對して大切な意志の力である。換言せば至切な一徳である。

忍耐は又單に我が事の成功の上のみでなく、社會的生活を營んで行く上にも大切な徳である。私共が社會の人々と共に生活して行く内に、時に衝突があつたり、壓迫があつたり、侮辱があつたりする。此の時それ等に對し、我に耐へ忍ぶ所が無かつたならば、即ち忍耐の徳が發動しなかつたならば、そこに破壊があり、擾亂があり、甚だしきに至つては彼我の滅亡があるのである。故に私共が圓滿に平和に社會的生活を營んで行くには忍耐の徳はまた至切な一徳である。

本課に於てはかうした理解を明確にして、この徳を養ひ、常に之を現實せんとする精神を啓發するを以て要旨とするのである。

### 教材の研究

#### 例話資料

##### コロンブスと忍耐

コロンブスは新世界の發見者である。世界の文明の恩惠者である。永久に尊敬すべき世界的偉

人である。今から此の大恩人、大偉人につき物語ることは本當に諸子と共に幸福とする所である。

##### 一、コロンブスの生れし時代

聖地保護の目的を以て起した十字軍は端なくも東西貿易の媒介者となつて、軍隊を輸送した御用船は埃及から東印度の貨物を載せて歸り、歐洲人は之を珍として求めるものが非常に多かつたから、爾來東印度の貨物はサラセン人の手を経て續埃及に輸入せられ、ヴェニスやゼノア等の商人は之を船に載せて歐洲の市場に販賣し、その貿易が頗る好況であつた。が其の後十字軍の勢が衰へて回教徒の勢が益々優勢となるに従ひ、かれ等は宗教上のひがみ根性から基督教徒たるヴェニスやゼノア等の商人を迫害し、之がため漸次貿易の通路が杜絶されるやうになつた。こゝに於て、さなきだに交通不便で

像肖のスブンコロ



意の如く輸入し難い東洋貿易は遂に一大頓挫を來し、歐洲の市場は需要多くも供給が之に伴はざるの光景を呈現した。そこで回教國の治下を經由せず、無難に且迅速に印度と直接貿易の路を開きたいものだと、中世紀末の歐洲人の齊しく希望した所であつた。

こゝに於て識者は阿弗利加の南端を迂回して印度に達する新航路を發見して、此の難問題を解決しようとして試みるに至つた。乃ち葡萄牙國王ヘンリー(西紀一三九四年——一四六三年)は聰明で大膽で且海事を好み、早くから印度に達する新航路を發見して時代の要求に應ぜようとの志を抱き、盛に天文学や航海術の研究をなさしめて、新航路發見のことを奨励された。がこれがため航海家は續々として輩出し、新陸地は頻々として發見され、前途頗る有望であつたが、天は此の人に永き壽命をかさず、また志の全く成らないうちに惜くも永久の眠に入つた。

ヘンリー王の死と共に一時冷却した航路發見の熱度はジョン王(西紀一四八一年——一四九五)の治世となつて復活して來た。千四百八十四年には葡萄牙の船が赤道以南に航すること千五百哩、其の後三年を経て亞弗利加の南端喜望峰が發見され、千四百九十八年に至つてブスコダ・ガマが喜望峰を廻つて東航し、印度のゴアに達し、こゝに始めて東印度との聯絡をなすに至つた。空前の大探検家コロンブスは西曆千四百三十六年頃(今から四百八十六年前)北部伊太利のゼノアといふ所に呱呱の聲をあげた。彼は實にこの如く活氣旺盛せる時代に生れたのであつた。彼が千古の疑問として人外に置かれた太平洋を横切つて祕密の扉を開き、新大陸を發見して、人類に學界に偉大な功績を樹てたのも偶然でないといはなければならぬ。

## 二、コロンブスの幼時

コロンブスの家は世々羊毛の櫛梳を業としてゐた。が氏は幼時から海が頗る好きで、小學時代から航海に關する學科の研究に熱中した。小學校を卒へた後、更に進んでパピア大學に入り、幾何學・地理學・天文學・航海術等を修めたが、間もなく退いて十四歳の頃から航海業に従事して、地中海だの亞弗利加の近海だのを航海し、かくすること十年間餘で、大いに海上の仕事に熟練し、また航海上の經驗を重ねたのであつた。

## 三、地理學の研究と斷案

當時葡萄牙國のヘンリー王は大いに海軍思想を奨励したのと、又地理が航海の利あるとによつて、多くの探検家・航海者が輩出し、續々阿弗利加沿岸の諸島を發見して、人智の開發に貢獻したのであつた。歐洲諸國の學者・探検家は競うてリスボンに來て、名譽ある發見者の口から、いろいろと異聞・珍談を聴くのであつたが、コロンブスも其の中の一人で、彼は千四百七十年リスボンにはいつて來た。時に彼は三十七歳であつた。

コロンブスはリスボンに來て、曾てヘンリー王の下にあつて、阿弗利加を探検して名聲噴々たりし伊太利の名族バルトロシオ・モニス・デ・ベレストレルロの娘ドナ・フェリッパと結婚して、其の母と共に同棲してゐた。母はコロンブスが海事上の知識に富み、且航海に多大の興味を有つてゐるといふことを知り、亡き夫の遠征航海について知つてゐる所を細大漏さず物語つた。其の上亡

夫が秘藏してゐた海圖・航海日誌等を残らず出して示した。之が後日コロンブスの大計畫に對する大なる暗示となつたのであつた。コロンブスは是等の貴重なる圖書によつて、益々此の方面の研究を努め、屢々ギニア航海に遠征を試み、或は海圖を作製して之を世に公にした。コロンブスの作製した海圖は、從來の俗説を排して、極めて精確なものであつたから大いに諸學者の信用を得た。

コロンブスは其の後リスボンを辭して、近時發見されたポルト・サントといふ島に移住した。此の島には姻戚の關係ある知名の航海家ベドロ・コレオといふ人が居たので、此の人と相往來して印度の航路につき、また西すれば未知の大陸を發見し得ること等について議論をたかかはして居た。而して此の島は發見後、まだ間のないことであつたから、探檢家の往來が頗る頻繁で、彼等の口から海上の新事實を聴くに甚だ便利であつた。併し思慮深きコロンブスは悉く彼等の言ふ所を信じなかつた。彼はそれ等について嚴正な批判を下すのであつた。また一方彼は此の島にあつて、古來からの有名な地理書は勿論、著名な航海者・旅行家の斷簡零墨に至る迄精細に研究したのであつた。さうして彼は遂に次のやうな斷案を下した。

「地球は水と陸との二部から成つてゐて、其の形狀は球の如くである。さうして西或は東に進んで止まなかつたならば、必ず其の出發した地點に再び歸着することが出来る。而して今世に知られてゐる世界は全體の三分の二で、三分の一はまだ未知の世界である。さうして此の三分の

一は屹度亞細亞の大陸が遠く延びて、其の東端が大西洋を隔てて歐羅巴及び阿弗利加の兩大陸と相望んでゐるに違ひない。又大西洋はこれまで想像してゐるやうなそんな茫漠たるものでなうて狭いものだらう。だから歐羅巴から西に向つて航行するときは容易に亞細亞の東端、日本又は支那に達することが出来る。」

此の斷案に於て、地球が球狀をなして居るといつたことは今日に於ても誤らない斷定である。併し未知の世界に對する見解は根本的に誤つて居た。併し此の誤りがやがてコロンブスをして阿弗利加を迂回するよりも、真直ぐに西航して印度に達する方が捷徑であること信じさせ、遂に意外の大發見をなすに至らしめたことを思ふと、誤解も時に効果のあるものだといふ笑も出る。兎に角此の誤解が彼をして幸福ならしめたのであつた。要するにコロンブスが當時の知識發達の程度に於て、假令誤つてゐるにしても、これ等の考を立てたことは卓見といつてよい。併し當時にあつては、人々の知識の程度が尙低級で、誰一人此の言を信する者がなかつた。却つてコロンブスを以て大なる空想家だといつて嘲笑したのであつた。

#### 四、葡萄牙王に説いて援助を乞ふ

コロンブスは新大陸を發見せんと決心した。而かも其の決心は鐵石よりも堅かつた。併し之を達するにはそこに堅牢な船舶と熟練な水夫と諸般の準備とがある。併しこの三事は當時のコロン

プスではどうすることも出来なかつた。そこで彼は葡萄牙王ジョン二世に謁見して、世界の地理を説き、西航して印度に達する航路を開きたい希望をのべて、その供給と援助とを乞うた。茲に於て其の可否を當時有数の學者・高僧及び宮内官等を以て組織してゐる地學協會の議に附した。然るに當時にあつては研究尙足らず、コロンブスの説を以て徒に空想を抱くものとして誰も信じなかつた。従つて其の説も嘲笑の裏に葬られて、遂に葡萄牙政府の拒絶する所となつた。コロンブスの失望は彼の想像する地球よりも大であつた。

五、イサベラ皇后に説いて援助を得

併しコロンブスは之がため毫も其の所信をかへない。却つてさうした批難に遇ふ毎に其の所信を現實にして、一泡吹かしてやらうといふ決心が堅くなつて行くのであつた。彼は益々研究を重ねてゐるうちに、茲に不幸なことは、彼が最愛の妻は病氣にかゝつて亡くなつた。加ふるに貧が益々彼に迫つて來て、彼は遂に其日の食料も得ることが出来なくなつた。茲に於て一子デーゴを携へてリスボンを去り寂しく西班牙國に移つた。メデナ侯の紹介によつてイサベラ皇后に引見の許を得んとして得ず、空しく王都に留つて機會を待つて居た。其の内に高僧メンドサの知遇を得、此の人の盡力によつて、才徳双美の聞え高きイサベラ皇后に謁見することが出来た。コロンブスは大に喜んで自己の志を精細に物語つた。皇后は熱心に其の説く所を傾聽されたが、乞ふ所の問題

は頗る重大であるとして、之を天文學者及び地理學者等の會議に諮問された。所で此の會も亦空論論として斥けた。のみならず當時西班牙はムーア國と戰爭し、力を他に注ぐことを許さない事情



圖の見引にスブンコロるたり歸りよ見發陸大后皇ラベサイ

もあつたために遂に拒絶された。こゝに於て彼は非常な困難に陥り、のみならず一般からは「伊太利の空想家」と綽名され、市井の子供までが痴と呼び狂と呼ぶのであつた。彼は此の冷酷な苦痛を耐忍しながら製圖・彫刻などによつて僅かに生計を營みつゝ、六年の月日を送つたのであつた。今は西班牙も頼むに足らず、千四百九十年の冬、愛兒を携へて海路佛蘭西に移らうとして、バロス港の附近までやつて來たが、囊中にはもう一文の貯もない。飢寒身に迫つて歩行も意の如くならない。彼は萬事茲に窮して食を乞はうとしてララビタの僧庵に立寄つた。幸に庵主ジュアン・ベレス(西班牙屈指の高僧でイサベラ皇后の懺悔僧として尊信最も篤かつた人)の知る所となり、此の



民の歡呼の聲が山河に響き渡る時であつた。皇后は數多の交渉委員を選び、航海に要する諸費用及び新世界發見後の處分等につきコロンブスと熟議させた。併し新世界發見後に於ける處分についてはコロンブスの要求が西班牙王宮の容れる所とならず、彼は意を決して再び佛國に走らうとした。が併し一方セント・エンゼル僧の諫言によつて皇后の意遂に決し、使を遣はしてコロンブスを召還し、茲に援助を與へることを言明された。かくして千四百九十二年四月十七日新大陸發見に關する契約を皇后からコロンブスの手に交附され、こゝに愈、多年の宿望を達する第一日が實現したのであつた。コロンブスが西航の大計畫を企ててから實に十八年目であつた。

#### 六、遠征の準備とバロス港の出帆

千四百九十二年五月、コロンブスはイサベラ皇后に告別してバロス港に到り、遠征の準備に取りかゝつた。同港の大立物として航海業者の間に大なる信望と勢力とを有してゐた二勇士マルチン・アロンゾ・ピンゾン及び其の弟ギセント・ヤネズ兄弟の盡力によつて、三艘の帆前船が出来、それに水夫百餘名、其の外官吏・醫員・使丁等合せて百二十名を分乘し、コロンブス自らは新に艤装された、最も大なるサンタ・マリア號(百餘噸)に座乗して全體を指揮し、次にビンタ號にはマルチン・ピンゾンが船長となり、最も小なるニナ號にはギセント・ヤネズ之が船長となつた。

八月三日の朝、絶大な使命と絶大な壯舉とを乗せた探檢船三艘はバロス港を出帆した。埠頭の見送人は未明から人の黒山を築き、熱湯の海ありと語る者、船を呑む海獸ありと談する者、乗組員の運命を憐む者、コロンブスの暴舉をあざける者、皇后の無法をそしめる者、人々は口々に語り合つた。船の港を離れて朝霧の中にかくれ行くを見送つて、數萬人の見物は再び此の船を見るこゝが出来ないと語つた。殊に家人は泣いて永別を悲み、遠征の人々も悲離哀別の情に堪へないものの如く悄然として立つて居た。獨り毅然たるは提督コロンブスのみであつた。

#### 七、航海中の危難と堅忍

かくて一行は西南方に進路を取り、七日目にカナリヤ島に碇泊し、船を修理して、九月六日更に西の方に向つて航行した。水夫等が當時世界の最極端と思つてゐたテネリフ島も過ぎ去り、またフェロ、ゴメラの二島も波間に没してしまつた。而して洋上は渺茫として無涯である。水夫等は次第に不安の念が生じて來た。コロンブスは百方之が慰撫策を講じ、或はやがて發見すべき陸地には金銀財寶が充滿してゐることを説き、或は到着地の意外に近きを説きなどして、彼等の志氣を鼓舞し安心を與へて航海を續行した。が併し日を日に幾日重ねても海洋は依然として渺茫無涯である。哀れ陸地の片影だに見えない。水夫等は益々恐怖を抱き、絶望の餘り、コロンブスに向つて「海底の藻屑とならんがために無涯の水界を航行するは没理漢のなす事だ。速かに方向を轉

じて歸航せよ。」と迫り、船中何となく殺氣に満ち、コロンブスの身邊には危難が迫つてゐた。併し偉大な勇士は少しも騒がず静かに之が慰撫に努めてゐたのである。

進み行くに随ひ、時としては鳥の如き聲が聞え、陸地のやうな影が見える。船員は勿論コロンブスまでも眞と思つて喜んだ。併しそれも翌日になると、たゞ一團の雲が水天髣髴の間に懸つてゐるのであつた。無智に近い水夫どもは、その度毎に不平・怨嗟・憤怒・嘲罵の聲が益々高まり、遂に一部のものはコロンブスを殺して海中に投せんと謀るのであつた。

併しコロンブスは堅固な決心を以て動かざること山の如く、常に溫和な態度をもつて彼等に接し、或は苦痛の後に快樂のあることを説き、或時は「余は王命を受けて新世界を開拓せんとするものである。汝等餘りに騷擾するに於ては、首尾能く航海を終へた後、必ず嚴罰に處する。」といつて威し、或時は「汝等今我を海に投じて殺すなら、汝等もやがて自身に死するに至るであらう。それは我死なば航海がわからなくなつて仕舞ふからだ。」と或は論し、或は威しなど、百方心を盡して慰撫しつゝ、困苦と危難とに耐へながら進んで行つたのである。

#### 八、新陸地の発見と上陸

かうして船が益々進んで行つた時、波上に河中にあらざれば生ぜない雜草が夥しく流れて來、また莓の實の附いたのが枝の儘流れて來て居る。こゝに人々は初めて陸地に近づいたことを知つた。

水夫初め皆の心が引立つた。十月十一日コロンブスは乗員一同を甲板上に集めて「今や新世界の発見が近いた。汝等意を安んじてよい。第一着に陸地を発見したものには既定の賞金の外更に天



鷲絨の胴衣一着を與へるであらう。」といつた。乗員一同は元氣づいて、夜に入るも一人として眠に就くものはない。船は満潮に乗じて疾行し、其の爽快實に言外であつた。コロンブスは望樓に坐して絶えず前方を凝視してゐた。午後十時遙か遠方に一點の燈火の明滅するを認めた。コロンブス思へらく「これは屹度新世界の漁火であらう。陸地はもう呼應の間にある。」と。既にして翌朝午前二時頃先驅をなせるピタン號から爆然一發の銃聲が聞えた。これは言ふまでもなく陸地発見の合圖である。一同狂するばかりに喜び勇んだ。前方を見ると、黒い島が三里ばかりの海上に眠つて居る。乗員一同覺えず快哉を叫んだ。時に紀元千四百九十二年十二月で、コロンブスがバロス港を出帆してから七十

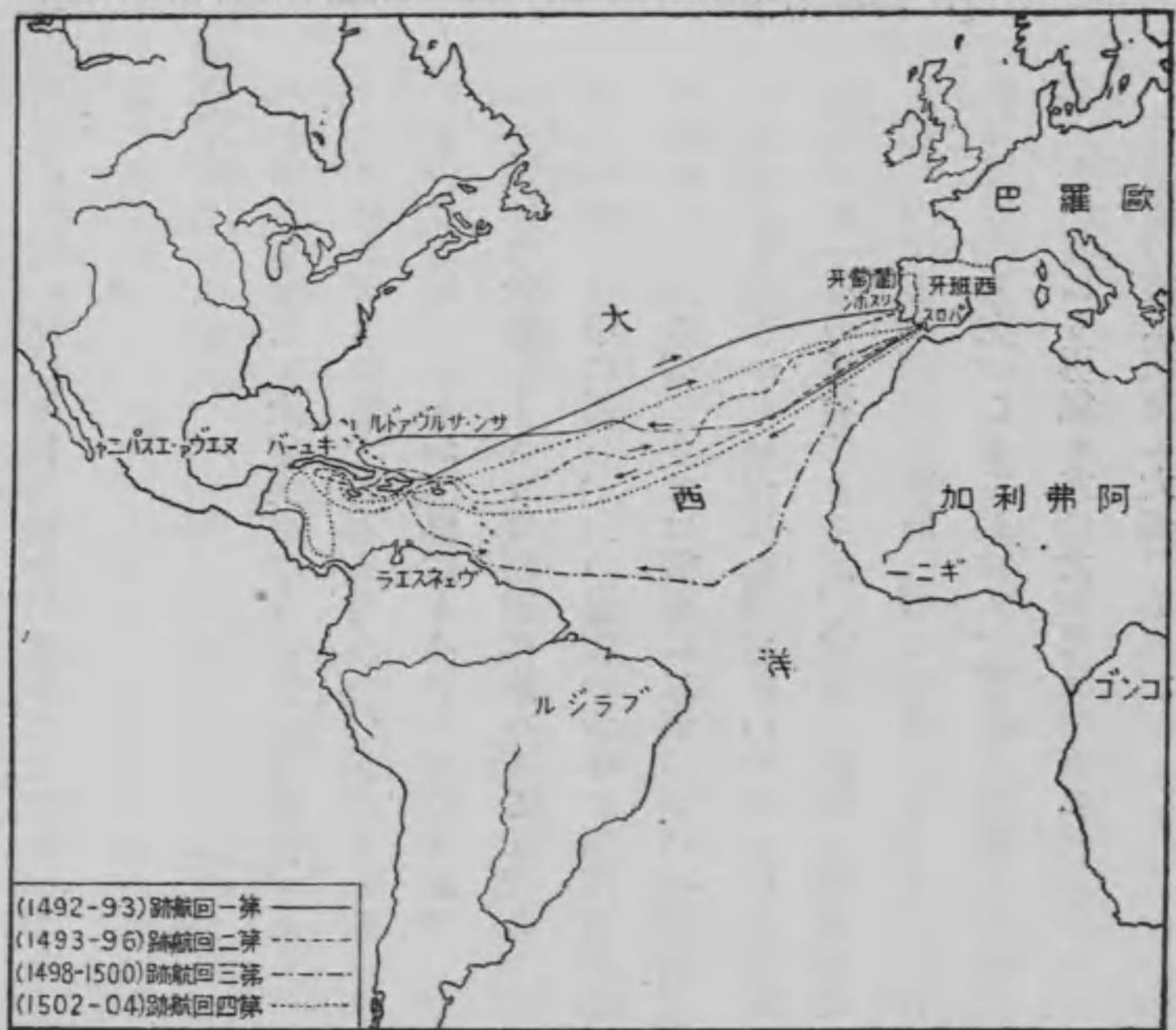
二日目であつた。

水夫等はコロンブスの周囲に集つて之を祝し、其の先見の明に服し、曩の失禮を謝して雀躍狂喜するのであつた。而して發見した陸地は廣さ數哩に過ぎなかつたが、地平坦で綠滴たる美しい森林を以て蔽はれてゐた。赤銅色の土人は海濱に人の黒山を作つて、熱心に新來の珍客を眺めて居た。がいたく打驚いたものと見え、やがて皆森林の中に逃げ込んだ。

コロンブスは此の時船員の一部に上陸の信號をなし、自分は深紅の鮮かな戎衣を着け、西班牙王室の紋章ある國旗を持ち、歡喜を眼の光に浮べて眞先に上陸し、後よりビンゾン兄弟も各、其の船よりボートを下し、探檢隊の記號たる綠十字にフェルデナンド王及びイサベラ皇后の頭字FとYとを點出した旗を懸して之に従うた。陸に上るや彼は忽ちに地に平伏し、喜びの涙に咽びつゝ、三拜九拜して在天の神に感謝の祈禱をなし、隨從せる船員も亦之に和して禮拜した。コロンブスは腰なる劔を抜いて高く翳し、ビンゾン以下を周圍に整列させて、嚴肅な態度を以て、此の地を西班牙國の所領となす旨を宣言し、島はサンサルバドルの名を與へた。即ち今の西印度諸島の一つである。尋でエキマス、キューバ、ハイチ等をも發見した。

九、コロンブスの歸航と光榮

千四百九十三年一月、コロンブスは報告のために新發見地を解纜して、一行が三月十五日正午パロス港に安着した。歡迎の人より起る喝采は天地も崩れるばかりで、さきに怒りし者、そしり



し者、罵りし者、泣きし者も皆争つて歡迎した。同港は有史以來の大盛況を極めたといふ。コロンブスはパロス港を上陸して當時の國都バーセロナに入り、やがてフェルデナンド王及びイサベラ皇后に謁見した。王及び皇后の喜びは一方ならず、破格の禮遇として之に椅子を與へ、玉座に近く着席を許された。コロンブスは新世界發見の顛末を述べ、携帶して來た種々の珍奇なる動植物・金石・器具及び土人を天覽に供した。西班牙政府はコロンブスに授けるのに最高の爵位大公を以てし、出入に必ず儀仗を附して彼の名譽を表彰した。人としての光榮はこゝに至つて、その最高といはなければならない。

之も全く彼の堅忍不拔の精神が産み出したものである。實に忍耐の徳の光明の輝きといはなければならぬ。

### 訓話資料

本例話と交渉して大體次のやうな内容で訓話する。

○コロンブスはどうした人であつたか○その新大陸発見といふ偉大な事業は一に彼の何の力によつたものだらうか○忍耐とはどんなことか。

(一) 忍耐の意義——さうだ艱難に耐へることである。また恥辱を忍ぶことである。例へばコロンブスの如きは甲に屬し、かの無頼の青年に對する韓信の如き、喜劍の嘲罵に對する大石良雄の如きはそれである。(こゝでは簡單に二者について話す) 甲は普通之を忍耐といひ、乙は之を忍辱といつて居る。しかしいづれも忍耐といつてよいのである。

忍耐も一種の勇氣であるが、前課に於ける勇氣は進むに強いのであつて、こゝの忍耐は堪へるに強いのである。また尋四に習つた克己とくらべて言ふと、克己は自分の内心から起るいろ／＼の私慾に打ち克つことであつて、忍耐は外部から來る艱苦や恥辱に堪へ忍ぶことである。事の成功にも進歩にも勇氣と共に大切な徳である。

○忍耐の徳は何故に大切であるか。

(二) 忍耐の必要——さうだ、それはコロンブスについて考へても分るし、また前に話した大石良雄の例について考へても分る。どうだ、あの時コロンブスに忍耐がなく、良雄に忍辱心がなかつたならば、あの大探檢の事業に成功し、あの復讐の計畫に成功して、共に不朽の名譽を後昆にのこすことが出来たであらうか。いゝえであらう。其の他昔から政治上に偉功を立てた人について考へて見ても、教育上に功果をあげた人について考へて見ても、工藝上の發明に成功した人について考へて見ても、忍耐の徳がいかにそれ等の産みの母であつたといふことが容易に説き得るのである。故に忍耐は成功を産む母として、また幸福を産む母として、大切な徳といはなければならぬ。

人の生涯はどつちかといへば困苦が多い、障礙が餘計である。試みに考へて見よ、諸子は今學習時代であつて、日々かうして學校に通つて學修してゐるが、どうだ、それは容易なものかと考へてゐるか。それから諸子は尙進んで中等學校に入り、もつと進んでは高等の學校にも入つて教育を受ける覺悟であらうか、どうだ、それ等に於ける修學習業は容易なものかと考へてゐるか。さうだらう、決して容易でない。學習其の物からの苦痛は勿論だが、中には貧困と障害のある者もあらうし、其の他いろ／＼の支障もあらう。それからいよ／＼學習を了へて實社會に立つて實際の業務に従事するとしても、それは決して樂なものでもなく、其の遂行に對し成功に對して、幾

多の困難があり、また障碍のあるのは事實である。所で諸子よ、どうだ其の困難に打ち勝つて、障碍を排除して、完全に成果を収めるには、そこに勇氣があり、忍耐力がなければならぬではないか。それがなうて其處に成功があり、喜悅があるものではなからう。賢い諸子は一齊にさうだと頷くであらう。

それから諸子よ、單にそれだけではまだ足りない所がある。それは忍耐の徳は一時的のものか、それとも永續的のものかといふことである、換言せば人は一事をなし一業を成し遂げたならば、それでもう忍耐の徳が不要であるか、どうかといふことである。諸子はどうか考へるか。

さうだ、永續的のものである。即ち人は一事をなさば、また次の一事をなさなければならぬ。一業を成しとげたら、また次の一業をなしとげなければならぬ。人の仕事はそれからそれへとあるものである。また生ずるものである。いやあるものでなく、生ずるものでなく、あらしめねばならぬもの、生じしめねばならないものである。それは人の活動は生涯のものであるからである。活動即ち仕事は永續的のものであれば、どうだその仕事の上から生ずる困難・障碍に對する忍耐も亦永續的のもでなからうか。故に忍耐の徳は必ず一時的の性質のものでなく、永續的の性質のものである。換言せば此の徳は人の生涯に於て常に現實すべき徳である。殊に忍辱は大なるものは時にであるが、小なる忍辱は殆ど毎日といつてよい(對者から起る忿怒・不平等の實例を

擧げて話す)。故に常に此の徳を修養して此の徳を現實しなければならぬ。

○諸子の現在に於てどんな場合に此の徳を實現すべきか。

(三)忍耐と實現——以上は忍耐について一般的にいつたのであるが、最後に諸子の現生活に於て、どんな場合に此の徳を實現すべきか、それについて考へて行かう。さうだ、

1、日々の學習の上(困難と忍耐)

2、日々の作業の上(同上)

3、友と交つて行く上(忿怒・侮辱等と忍耐)、

の如き場合はそれである。

學習するとき「どうも困難だな、自分に出来ようもない。」と思つたときは、それはもう其の困難に敗けたのである。で「困難は困難だが、之は是非我に於てなさなければならぬ我が仕事である。我はやる。」と、かう目覺めて其の困難と支障に耐忍して、熱心に勉強しなければならぬ。作業に於ても同様である。妙なもので、忍耐して熱心に勉強すると、學習する事柄がよく分る。よく分ると其處に學習の興味が生起し、苦痛も感じぬやうになる。障碍も意に介せぬやうになる。學習もかうした境地にまで進まなければならぬ。

友と交はるとき、往々意見の相違から、或は好惡の情からして侮辱されることがある。此の場

合にとこく、迄も衝突し、飽くまでも抵抗するときは、そこに葛藤が起り、破壊が生じて来る。だからかうした時には十分思慮して忍耐の出来るだけ耐忍する。併し逆も出来ない場合には冷静にかへり、正理に訴へて論争し、解決するがよい。

以上の理會・態度は只に現在の生活の上のみでなく、諸子の將來に於ても同様である。  
孟子曰く

「天ノ將サニ大任ヲ是ノ人ニ降サントスルヤ必ズ先ヅ其ノ心志ヲ苦シメ其ノ筋骨ヲ勞シ其ノ體膚ヲ餓エシム。」

と實に真理である。成功せんとする人の信條とせなければならぬ。而して此の信條の遂行は即ち忍耐の徳を守つて行く所に初めて可能なのであるまいか。

要するに忍耐は事の成功に對しても、共存上の平和に對しても、一生涯持續的に守るべき大切な徳である。故に人は常に此の徳を養つて、常に之を實現して行かなければならぬ。

### 聯絡

既習知識であつて、本課と聯絡あるものは次の如くである。

尋常小學修身書卷第二十二「辛抱強くあれ」

一少女母の命に従ひ絲の束を絲卷にうつす手傳をなす○どんな難儀な仕事も途中で止むことな

く倦まず撓まず辛抱してなすこと○幼時から物事に辛抱強き習慣をつくること……等。

### 教授の實際

### 區分

第一時 例話を授く。

第二時 訓話を行ふ。

### 教具

コロンプスの肖像 イサベラ女王コロンプスを引見する圖 世界地圖 地球儀等

### 教法

例話に於ては

(一)コロンプスの生れし時代。

(二)コロンプスの幼時。

(三)地理學の研究と斷案。

(四)葡萄牙國王を説いて援助を請ふ。

(五)西班牙の皇后を説いて援助を得。

- (六) 遠征の準備とバロス港の出帆。
- (七) 航海中の危難と堅忍。
- (八) 新陸地の発見と上陸。
- (九) コロンブスの歸港と光榮

等の諸項の下に、コロンブスの修學・持論・堅耐、殊に堅忍不拔の精神を以て探檢に成功して、航海上に學界に偉大な貢獻をなした點を中心として説く。次に

- (一) 忍耐の意義。
- (二) 忍耐の必要。
- (三) 忍耐と實現。

等の諸項につき訓話して、忍耐の内容を明確に理解させ、之が實現の方向を指導し、以て常に現實化する所あらしめる。

尙本課に聯絡して短氣は損氣のもとだといふことを適當な實例と交渉して知らしめることも無用でなからう。それは才幹もあり、精力もあり、十分の働のある人でありながら、僅かばかりの短氣から位置を失ふ人も世によくあるからである。

第一時

△例話を話す。

一、問答

○諸子は尋二のとき、一少女が母の絲をかけて途中亂れたとき、其の子はどうしたか覚えてゐるかね○辛抱強くなかつたら、その絲はどうなつたらうか○所で仕事の成功といふことと、辛抱強くあるといふことは、そこにどんな關係があるか。……等問答して、  
「今日はコロンブスといふ人が忍耐によつて偉大な事業をなしたとげたことを話す。」  
旨を告げ、教授の實際にはいつて行く。

二、説話

次の要項の下に適切に話す。

- (一) 生れた時代。
- (二) 彼の幼時。
- (三) 地理學の研究と斷案。
- (四) 葡萄牙王國を説いて援助を請ふ。
- (五) 西班牙の皇后を説いて援助を得。
- (六) 遠征の準備とバロス港の出帆。

(七) 航海中の危難と堅忍。

(八) 新陸地の發見と上陸。

(九) 歸港と歡迎と光榮。

以上は「例話資料」を参照して簡明に話す。

三、整理

○コロンブスはどうした人であつたか○新大陸を發見するまでの彼の困苦はどうであつたか—自分の志を遂げんためにどうしたか○航海中に於ける困難はどうであつたか○その笑罵のうちに危難のうちにあつて彼はどうしたか○然らば彼の此の世界的成功は一に彼の何の力によつたものだらうか……といふ風に問答して一層感激を高め、其の現實心を鼓舞する。

第二時

△訓話を授く。

一、問答

○コロンブスの世界的成功は一に何によつたのであつたか○忍耐とは○何故に必要なか○之を實現する機會は……等。

二、説話

次の要項の下に適切に話す。

(一) 忍耐の意義。

(二) 忍耐の必要。

(三) 忍耐と實現。

(附) 短氣は損氣のもとなること。

以上は「訓話資料」を参照し、簡明に教訓する。

三、教科書を援く。

一讀—質疑に答ふ—精神のある所を捉へさせる。

四、修養の工夫

忍耐心を養成するにはどうしたらよいか。各自をして工夫させ、其の得た方法によつて修養して行くやう指導する。此の際教師の工夫、修養等についても話して暗示を與へる。若し教師に此の體驗がないとせば、古人の工夫を語つて暗示してもよい。

備考

一、コロンブスの最後

コロンブスは其の後第二・第三・第四回の航海を試みた。第二回の航海(一四九三年—一四九



六年)に於てはジャマイカ、ボリトリコ、グアドルプ等の諸島を發見し、第三回の航海(一四九八年——一五〇〇年)に於ては遂に南米オリノコ河口を探検した。しかし是等の航海は彼にとつては皆不幸の航海であつた。それは渡航したものは豫期した金・銀・財寶の得られないのみでなく、却つて新殖民地の基礎を固める爲に勞働せねばならなかつた。之がコロンブスに對する一つ不平であつた。それにまた他の一方では彼の立身を嫉める一部の小人輩は頻りに彼を讒誣中傷し、王は遂に怒つて彼を免黜して其の罪を問はんとし、使節を遣はして彼を鐵鎖で縛つて本國に送還させた。併し彼は歸つてから書をイサベラ皇后に上つて、冤を訴へ情を陳べて幸に潔白の身となることが出來た。第四回の航海(一五〇二年——一五〇四年)に於ては暴風に遭ひ、且病を得て歸つた。此の時にはイサベラ皇后はもう神去つてあらなかつたから、誰一人コロンブスを顧るものなく、彼は無限の怨を吞んで千五百六年五月二十日バリアリドに於て永久の眠に就いた。時に年七十歳であつた。

コロンブスは四回の航海に於て發見した陸地は甚だ多かつたけれども、皆之を亞細亞の一部だと思ひ、まだ亞米利加大陸を發見せしことを知らないで歿した。誠に残念であつた。

## 二、兒童用書の挿畫

コロンブスの一行が今サンサルバドル島に歡喜を眼の光に浮べて上陸する所で、圖中西班牙の

國旗を手にして立てるは即ちコロンブスである。十文字形の旗は探検隊の記號旗で、之れはフェルデナンド王とイサベラ皇后の頭文字FとYとが點出してある。

## 第十七課 自信

### 教授の要旨

本課に於ては、深く自己の力に信頼し、如何なる困難にも打勝つて、其の確信する所を貫徹するに努めるやう論ずるを以て其の要旨とする。

自信とは自分で自分の能力又は價値を信じ、これに信頼して、如何なる困難にも打勝つて、其の志す所を貫徹し、また如何なる障礙をも排除して動かぬのをいふのである。

すべて人は何か事をなすにも、また自己の所志を實行するにしても、自信がなければならぬ。若しこれ無つたならば、其の事に伴ふ困難に對して直に萎縮し、或は其の事に伴ふ障礙に逡巡して、遂に其の目的を達成することが出來なくなる。之に反して自信あるものは假令幾たび失敗し蹉跎して窮境に立つとも、また如何に妨害され威壓される所となつても、ためにそれを廢止し、また逡巡するといふことがない。却つて益々奮闘して目的を達成せねば止まないものである。で自

信も勇氣や忍耐と共に事の成果の上に、また所信の遂行の上に大切な一徳である。延いては國家社會に對する奉仕を全うする上にも至切な一徳である。本課に於てはかうした内容を理解させ、之が實現を諭すを以て要旨とするのである。

### 教材の研究

#### 訓話資料

##### 吉田松陰と自信

(一) 一偉丈夫生る——時は天保元年(紀元二四九〇年)の八月四日、天は長州の一角に一人の偉丈夫を生んだ。偉丈夫! それは誰か。身は安政の獄裏に繋がれて、遂に「親を思ふ心にまさる親心今日のおとづれ何と聞くらん。」と、一首の辭世を残し従容として小塚原の刑場の露と消えた吉田松陰先生が其の人である。

先生は長州の萩の東郊松本村(今の山口縣阿武郡椿郷東分村字松本)に生れた。名は矩方、幼時大次郎と稱し、後に寅次郎と改めた。松陰は其の號である。父は杉百合之助で、母は兒玉氏の出

像肖の陰松田吉



で瀧子といひ、先生はその第二子であつた。六歳の時、出で、叔父吉田家を嗣ぎ吉田姓を冒し、實家に同居して居た。

(二) 父は王家を想ふ誠忠の士であつた——父百合之助は篤學の士であつて、また勤王心に深かつた。常に朝廷の式微日に加へ行くのを見て、天を仰いで涙に咽び、地に俯して悲み泣くのであつた。文化十年の事、徳川第十一代家齊將軍が大政大臣に榮進し、同時にその世子家慶も從一位に叙せられた時、朝廷から此の趣を廣く各藩に御布達になつた。而して此の御布告は勿論萩の城中へも廻つて來た。之を拜讀した父百合之助は「さて、朝廷の御威光も何と衰へたものかな。畏れながら此の御布告を讀み奉ると、何處までも將軍家を畏敬していらつしやる思召があり、と見え奉る。事は全く反對である。それについても憎むべきは幕府だ。此の儘に打捨て、置けば、彼の跋扈は何處まで及ぶか限りの知れぬ事である。」と言つて、眼から玉の雫をはらりと落さたれといふ。かうした一事から考へても、彼の父は如何に王家を想ひ、王家のために盡さうといふ心が深厚であつたかが分る。

(三) 米を搗きながら學を修む——先生の父は農工商の上に立つ士であつたが、貧なる家道は、藩公への勤番の餘暇を割いて、田畑に立ち、また時には草鞋を作り草履を作つて、一家の生計の助としなければならなかつた。

父既にかうであつたから、其の子たるものも碌々として他の子供と共に遊ぶといふ譯にいかなくあつた。先生は兄梅太郎と共に鋤をとり鋤を握つて父を助け、また米を搗くのであつた。而して

先生は此の時米搗臺の上に書物を載せて讀んだ。先生の少時にあつては、机の上で讀書するといふよりは、さうした勉強が多かつたといふ。其の苦學の有様思ひやられるぢやないか。

(四) 同舌を捲いて其の聰明に驚く——先生はかく家事を助けながら寸暇を利用して勉強し、また暇ある限り叔父玉木文之進に就いて修學したのであるが、先生の凡ならざる一を聞いて十を悟るで、幼少にしても老成の風があつたのである。而して眼光炯々として人を射る相貌は、路上の人をして少なからず畏敬の念を拂はしめた。或人が先生の此の相貌を見て、父百合之助に「異なるかな此の子、昔し韓人豊公を相て曰く『骨貌は未だし、獨り眼光炯々として人を射る近づき難し。』と、此の子至誠物に接し、言行欺かず、是れ豊公の及ぶ所にあらず。」といつ

米搗臺



たさうである。所で此の一語は實に空虚でなかつた。先生十一歳の時、藩主毛利慶親公が、文武師範の士を城中に召されて、親しく學藝を試みられたが、先生も其の家兵學の師範たるの故を以て藩主の御前で、群臣列座の中で、武教全書を進講した。が先生は少しも臆する所なく、明快に進講したので、竝居る人々はいづれも舌を捲いて驚歎し、藩主もいたく感賞されたといふ。

(五) 一生を貫きしものは尊王愛國の精神であつた——先生は一寸の時間をも空費せず、之を讀書に利用して熱心に修學されたことは前に言つた通りだが、其の選ぶ所の學科は兵學(家學であつたから)は勿論經書・史學・地理學・政治學等であつた。詩歌文章は餘技として學ばれた。佛教も支那語も蘭學も學ばれた。併し其の中でも最も重ぜられたのは地理學と史學と數學で、塾生にも至要の學科として教へられた。殊に地理學は先生の好み且才ありと信じて居られた方で、金子重之輔が學問の方法を問うたとき先生の答に

「地を離れて人なく、人を離れて事無し、故に人事を論ぜん欲せば先づ地理に觀る。」とあるは有名な言葉である。歴史も深く之を重じられた。勿論四書とか五經とかいふ所謂經書の類も深く研究されたけれども、實地の効果はそれ等よりも史學の方が多と考へられた。先生の熾烈なる愛國心、國民的自尊心は國史の研究から得られたのである。叔父玉木氏に

「僕足下に國史を讀むを勸む。漢事に明かにして國事に茫乎たるは學人の通病なり。故に先づ國

史を讀むべし。」

と、かく國史の研究を勧められた一事を見ても、先生はいかに重じられたかが分る。

數學は當時一般に疎せられ、殊に武士として之を學ぶことは一つの恥辱のやうに考へたものが、先生は「天下の事は士農工商の別なく、數理を外づれたものはない。」といつて之を重んぜられた。「九數乗除圖」といふ算術早學びの表を村塾で出版して、塾生に學ばさせられたこともあつた。

先生は「徳を成し材を達するには師恩友益多きに居る。」といつて、少時から良師良友を求めて切磋に勉められた。西は九州に遊んで葉山佐内・横井小楠等を始め、幾多の師友に親しみ、東は江戸に遊んで安積良齊・山鹿素水・佐久間象山等を師とし、また其の門下生とも交つた。就中象山には終生師事して教を受けられたのであつた。先生はかくして廣く天下の志士と交を結び、虚心坦懷苟も己に優れる者あれば熱心に其の言を聴き、かくして一は古人の書によつて、一は生きた今人によつても學を修め心を練つて行かれたのであつた。實に先生は熱心な勉學家であつた。さうして其の抱有する學識は豊富で且徹底して居た、而して胸中に常に紅に燃えてゐる、いや一生を通して燃えてゐたものは實に我が國民道德の大本たる尊王愛國の精神であつた。先生は如何にもして全國民に我が國體の本義を知らしめ、尊王愛國の精神を吹き込ませようといふのが先生の大主義

であつた。先生は實に此の大主義のために奮闘し、此の大主義のために生命を捧げられたのであつた。

(六) 壯圖空しく破れて獄裏の人となる——十一歳の時藩公の膽を寒からしめた先生は、其の後江戸から歸つた山田宇右衛門といふ人から「今や世の變が近づいて來た。詩書文筆などに悠々として歲月を浪費するのは腐儒の者共である。汝は活眼を開いて天下の形勢を達觀せよ。」と激勵された。先生は之を聞いて痛く感奮し、よし國家のために盡さうといふ報國の思念が炎々と燃え初めた。

時や外艦は屢々去來して切りに我との開港貿易を迫つた。國民は怖れ、國論が沸き、世は騷擾を極めた。先生は之を見て空しく故山に日を消すに忍びない。四方に遊歴して志士と交り、國事を談じて皇家のために盡さんと決心し、嘉永三年八月、短褐孤劍を提げて郷門を立つた。時に年齒二十一であつた。

先生は先づ九州に下つて知名の士を訪うて國事を談じ、また憂國の士と交を結んだ。次に江戸に出て諸儒の門を叩いて教を受け、また天下の志士に交り時局を談じた。しかし東遊中殊に先生をして敬服させたのは佐久間象山であつた。象山は信州松代の人で、夙に泰西の學に志し、熱心に兵制・築城・造船等の術を研究し、識見も亦卓絶する人であつた。

嘉永六年、相州の浦賀に黒船がやつて來た。先生は象山を訪ねて其の處すべき道を問うた。象

山は

「近世西洋の學者、蒸氣力をかけて船車を行き、甲艦濤を衝いて日に百里の海を渡り得る。戎器精銳、兵法輕捷、海陸と共に其の便を極めて居る。國富み兵強きこと天下に冠である。此の秋に當り日本男子たるもの奮發一番、萬里の波濤を踏破して海外諸國を歴遊し、詳かに歐洲大陸の形勢を察知せねば、進んで大事をなすことが出来ない。また居ながらにして彼を禦ぐの術を知ることは出来ない。」

と答へた。此の熱烈な言が深く先生を曉らしめ、萬里雄飛の志を發動させたのであつた。

浦賀碇舶の米艦が去ると、今度は露國の軍艦が長崎にやつて來た。之を聞いた先生は好機逸すべからずとして、

「彼を知り己を知るは治國の要道である。此の機に乗じて彼の國に渡り其の大勢を探らう。」

と領いて、直に江戸を發して長崎に向つた。併し先生が長崎についた時、何ぞ圖らん、露艦は黒煙を空に吐きながら長崎港を發し、歸國の途上にあつた。先生は千秋の恨を吞んで再び江戸に戻つたのであつた。

安政元年、米艦は再び姿を現はして江戸灣にはいつて來た。上下の混雜非常なものであつた。

米艦來！ 先生の胸は躍つた。一度露艦を逸した先生は、今度こそはと即ち刎頭の友金子重輔

と相携へて、横濱の間を往來して彼に近づく策を廻らした。策成るや、知己と袂別の宴を張つた。酒酣なる時、先生初めて米艦に投じて海外に航するの意を述べた。會するものいづれも「是れ當代の熱血兒だ」といつて其の壯圖を祝した。たゞ宮部鼎藏のみが、「是れは甚だ危策だ、寧ろ斷念した方がよい。」と言つて諫止した。それは當時海外に渡航することは幕府の嚴禁する所であつたからである。先生は之を聞いて、「事若し破るれば命を受けて死あるのみだ。豈拱手して此の好機を逸することが出來ようか。」と言つて、其の夜金子と共に横濱に向つた。

先生は金子と共に羽田に往き、更に神奈川に走つた。が米艦は既に此處を去つて下田港に碇泊して居た。そこで直に下田にいつて洋上を眺めると、米艦は煙を收めて靜かに波間に横つて居た。先生等は天にも昇る心地して、米艦に近づかうとしたが失敗した。再三失敗した。併しそれがためひるまなかつた。三月二十七日、天は曇つて地は眞暗である。眞夜中に黒い二つの影が一隻の漁舟を窺み、暗に乗じて海上に漕ぎいで、大波・小波を乗り切つて、波上に横る米艦に漕ぎついた。さうして具さに年來の志望を告げて、乗船を願つた、この時米國の一士官は

「卿等の壯志は大に悦ぶべきも、貴國の法律は海外渡航を嚴禁し居る。然るに今卿等の志を容れて貴國の法禁を破らんか。これが貴國との紛議の禍因となるも計り難い。今や貴國と商議を重ねて居るから、やがて兩國の條約も成立つて、親交の日も近きにあらう。故に其の時を俟つて

外遊するも遅くはない。」

といつて、承知して呉れない。先生は

「私共は國法を破つて此處に來たのだから、また還ることは出來ない。還れば乃ち國禁を犯す罪によつて重く刑せられる。では非貴國に伴へ給へ。」

と、百方陳述して哀願したけれども、彼等は頑として聽き容れなかつた。遂に短艇を裝して先生等を陸に送りかへした。先生は絶望の涙を拭ひ、金子を顧みて、

「嗚呼天なり命なりだ。今は是非がない。我はこれから潔く服罪せよう。君、直に此の地を去れよ。」

と二人は途を別にして江戸に歸らうとした。一方米艦は翌日になつて此の事を幕府に告げた。これがため遂に先生等は捕はれ、江戸に送られて圜圖の人となつた。先生は

世の人はよしあし事をいはばいへ

賤が誠は神ぞ知るらん

と此の時の心事を詠じられた。尋いで先生は江戸の獄舎から、長州野山の獄舎に護送され、後父の家に塾居を命ぜられた。時は安政二年十二月で、先生の齡は二十六であつた。壯圖空しく蹉跌し、囚服を纏うて故郷に入つた時の先生の心の中はどんなであつたらう。

松 下 村 塾



(七)維新の元勳を生んだ松下村塾

先生は野山の獄舎にあること一年と九ヶ月、安政二年の冬赦されて塾居を命ぜられた。時に先生の名望を慕ひ來つて、教を請ふ者が非常に多かつた。先生は固く辭したが人々は請うて止まなかつた。そこで先生は家學(軍學)を教へるといふ名目で藩主の許可を仰いで子弟に接することにした。併し先生の教へる所は軍學のみでなく、實は外に大切なものがあつた。それは大義名分を明かにして、尊王愛國の魂を鼓舞し振興するにあつた。それは當時先生の書かれた松下村塾の記事を見ても明かに分る。即ち

「抑も人の最も重しとする所のものは君臣の義なり。國の最も大とする所のものは華夷の辨なり。今天下如何なる時ぞや。君臣の義、講ぜざること六百餘年、近時に至つて華夷の辨を併せて又之を失す。然り而して天下の人

才。且安然として計を得ると爲す。神州の地に生れて皇朝の恩を蒙り、内、君臣の義を失し、外、華夷の辨を遺る、學の學たる所以、人の人たる所以其れ安くに在る哉。」

とある。實に先生の教育の大主義はこゝにあるのである。

先生が下田で囚はれた時にも、獄卒に向つて皇國を尊び皇道の重んずべきことを説かれた。また江戸の獄舎にあるときも、野山の獄裡にあるときも同様であつた。獄卒も囚人も深く先生の至誠に感じ、深く先生を尊敬した。實に先生の尊王愛國心の鼓吹は單に塾内だけでなく廣く一般であつた。が併し最も甚大の感化を與へたのは松下村塾であつたのである。

先生が尊王愛國の精神を鼓吹するにも、そこに確乎不動の自信を以て當られた。それは「人の爲す能はざる所をなし、人の言ふ能はざる所を言ふ。余をおいて其の人なきなり。是をおいて余が事なきなり。」

といふ先生の言に徴しても明かである。微々たる一村塾であつたけれども、其の抱負は實に蓋世の概があつた。

「長門僻して西陲にありといへども、其の天下を奮發し、四夷を震動する亦未だ量るべからず。」

「萩城の將に大に顯れんとする、それ必ず松下邑に始らんか。」

「松下陋村といへども誓つて神國の幹たらん。」

といつて居られる。この確乎たる自信、この蓋世の抱負を以て、二箇年半の間、僅かに八疊と十疊半の二室の裡に門人と共に起寢して、歳末・年始といへども講學を廢せず、肺肝を披瀝して教導

を激勵されたのであつた。此の結果松門から多數の國士を出し、明治維新の大業に貢獻し奉つたのである。實に維新の元勳は此の松下村塾から生れたのであつた。

(八)幕府の專斷と志士の捕縛——前にも言つたやうに先生は常に君を思ひ國を想ふ赤心は胸中に燃えて居た。時は安政五年の春であつた。米艦また來航して、通商貿易の條約を迫つた。幕府は遂に朝旨を仰がないで、横濱・神戸・長崎・函館・新潟の五港を開放して貿易港となすの假條約を結んだ。日頃幕府の專横を憎む尊王の志士は、之を聞いて何條默止すべき。直に八方に檄を飛ばして幕府の罪を天下に鳴らした。こゝに於て國內が湯の煮えかへるやうに騷擾を極めた。諸藩の志士は朝廷に奏して、攘夷の内勅を水藩に下すを請ひ奉つた。

逸早く此の由を知つた幕府は、蒼皇として老中間部詮勝（なべのぶかつ）を京師に遣し、下勅に關するものを捕縛させた。頼三樹・梅田雲濱・小林民部・橋本左内等は捕へられた。また江戸では安島帶刀・日下部三次・橋本景岳・鮎澤伊太夫・藤森天山等が捕縛された。そして幕府は更に長州藩に命じて、先生を江戸に檻送すべしと命じた。これ世に言ふ安政の大獄である。

幕命一下して先生は長州の野山の獄に繋がることになつた。時に先生の父は病褥にあつた。先生は藩主に哀願して、湯藥に侍し病ひ癒ゆるの時を待つて獄に就かんことを請うた。藩主はその孝心に感じて諾された。かくして父の病は快くなつた。門生は相會して袂別の宴を張つた。父

は先生を勵まして

「往けよ、假令身を一時に屈するも、名を萬世に伸べるを力めよ。決して傷むな。」

と、あゝ何といふ悽壯の言であるまいか。門生等は皆泣いた。先生も亦泣いて門を出られた。先生は再び野山の獄に投ぜられた。身は籠の中の鳥であつたが、胸中に燃える至誠は抑へれども抑へることが出来なかつた。六年五月十六日先生を野山獄から更に江戸に檻送する命が下つた。二十五日、先生を乗せた檻輿は萩の地を發した。其の發せんとするとき、門下生等は別れを惜むの餘り、松浦無窮をして先生の肖像を畫かしめた。その書き終るを待つて、先生は自ら次の贊を作つて之に寫された。

三願出<sub>レ</sub>廣<sub>レ</sub>諸葛已<sub>レ</sub>矣。夫一身入<sub>レ</sub>洛<sub>レ</sub>分<sub>レ</sub>賈彪安在哉。心師<sub>ニ</sub>貫高<sub>一</sub>分<sub>レ</sub>而無<sub>レ</sub>素立<sub>ニ</sub>名<sub>一</sub>。志仰<sub>ニ</sub>魯連<sub>一</sub>分<sub>レ</sub>遂乏<sub>ニ</sub>釋<sub>一</sub>難才。讀書無<sub>レ</sub>功<sub>分</sub>橫學三十年。滅<sub>レ</sub>賊失<sub>レ</sub>計<sub>分</sub>猛氣二十一回。人譏<sub>ニ</sub>狂頑<sub>一</sub>分<sub>レ</sub>鄉黨衆不<sub>レ</sub>容<sub>ニ</sub>身許<sub>一</sub>君國<sub>一</sub>分<sub>レ</sub>死生吾久<sub>レ</sub>齊<sub>ニ</sub>至誠不<sub>レ</sub>動<sub>分</sub>自<sub>レ</sub>古未<sub>ニ</sub>之有<sub>一</sub>古人難<sub>レ</sub>及<sub>分</sub>聖賢敢<sub>レ</sub>追陪<sub>ニ</sub>。

檻輿は萩の地を離れ、忘じ難き故山を後にして、山陽を過ぎ、東海道を過ぎ、日を重ねて江戸に着いた。こゝに先生は護送の人に別れて幕吏の手に移され、再び傳馬町の獄裡の人となつた。

先生が獄舎にある間、幕吏は屢、詰問した。併し先生の答へる所は一點の飾る所なく、また隠し包む所なく、實に公明正大であつた。先生の罪は遂に死刑といふことに決つた。先生は固より覺

悟の前であつたから、別に驚きもしなかつた。がたゞ心にかゝるのは故國にいます老父母であつた。十有餘年間、國事に奔走して殆ど寧日がなかつた。随つてこれぞといふ孝養を盡されなかつたことが眞に悲みに堪へなかつた。安政六年の十月二十日に、先生は永訣の書を作つて父母並に兄叔に送られた。其の中にかの

「親思ふ心にまさる親心、今日の音づれ何と聞くらむ。」

といふ一首があるのである。痛切の情迫つて泣かざるを得ないではないか。また同日小田村伊之助・久保田清太郎・久坂玄瑞の三人に一書を與へて後事を托された。

先生は既に死刑の宣告をうけ、死の日は一日々々と迫つて來た。十月二十五日から留魂錄を作り、二十六日の夕方に至つて稿を脱した。其の卷首に

「身はたとひ武藏の野邊に朽ちぬとも、留め置かまし大和魂」

といふ一首が記してある。これぞ實に先生の辭世の句である。而して忠魂錄は我が平生の志を繼がしめようとして、切々として意を述べられた長文の一篇である。

(九)あはれ小塚原の露と消ゆ——安政六年十月二十七日、先生は遂に死を免れることが出来ないうで、悲しい忌はしい小塚原の刑場に護送された。さうして斷頭の席に坐らされた。併し先生は神色自若として些も平生と異ならず、從容として死に就かれた。嗚呼一代の至誠憂國の士は茲に遂



に小塚原の露と消えて仕舞つた。併し先生の辭世の句の如く、肉體は武藏の野邊に朽ちたけれども、其の忠魂や此の土に留つて皇國を守護して居る。我が國體の本義を明かにして皇室を尊び國運の進展に盡さうとする先生の精神は永久不滅である。門人等は先生の至誠に感激し、強大な自信力に勵まされて、先師の精神の貫徹に努め、明治維新の大業に貢獻した者が多かつた。あゝ松陰先生は死んだ、併し松陰先生は死なない。先生は永久に生きてゐる。

(十)松陰神社——文久二年に、時の帝は安政五年以來國事に奔命し、幕府のために捕はれて死についた志士に追赦の詔を賜うた。先生も即ち其の内の一人であつた。翌くれば文久三年の正月、先生の門下であつた高杉晋作・久坂玄瑞・伊藤利輔・品川彌二郎等が相謀つて、先生の遺骸を向手院から更に荏原郡若林村太夫山に改葬した。此の若林村といふのは今の東京府荏原郡世田ヶ谷村大字若林のことである。

明治十五年六月に、當時の有志者は先生の墓畔に一小祠を建て之を松陰神社と號した。降つて二十二年に至り、辱なくも明治大帝は先生の功績を嘉賞され、其の年の二月十一日に正四位を追贈された。而して山口縣阿武郡椿郷東分村字松本にも先生を祀つた松陰神社がある。かくして偉人の徳を慕うて來り訪ふもの今も尙跡を絶たない。誠に先生の徳光や百世の人心を輝々と照してゐるものといはなければならぬ。

### 訓話資料

本例話と交渉して大體次の内容で訓話する。

○松田松陰はどんな人であつたか○その先生の強大な自信力はどんなことによつて窺ひ知ることが出来るか○然らば自信力即ち自信とはどんなことか。

(一)自信の意義——自信とは自分で自分の力を信じ、さうして之に信頼して、假令なさうとするその事が、どんなに困難であつても、之に打勝つて其の所志を貫徹し、また自分の所信に對して、どんな迫害にあつても、また威壓があつても、之を排除して斷乎として動かぬのをいふのである。例へば松陰先生について言へば、先生の生涯を貫いてゐた大精神は尊王愛國の精神であつた。先生は實に此の精神を唱へ、之を國民に植付けるのを以て自己の任とせられたのであつた。而して自分には其の力が十分あると確く信じてゐたのである。さうして此の確信の下にあらゆる困難にも、威壓にも、束縛にも抵抗して、其の所志の貫徹に努力されたが如きはそれである。また安松金右衛門といふ人について言へば(補助教材で教師用百二十二頁にある)「松平信綱の命によつて野火止用水を掘つたが一年経つても、二年たつても水は一滴も至らない。信綱が金右衛門を呼んで詰問されたが、金右衛門はやがて水の來ることを説いて動かぬ。果せるかな三年目の秋に大雨があつて、多磨川の水横溢して長さ十六里の新溝に漲り注いだ。信綱大に喜んで早速金右衛門

を呼んでさきの失言を詫び、金右衛門の卓見を深くほめられた。かく金右衛門が道理から割り出した自分の所信と言ふものを深く信じて、主君から何と言はれても頑として動かなかった如きもその一例である。故に自信といふことは、自分で自分の力を信じ、自分と自分の可能を信ずることである。而して進んでその自信の下に自己の所志を實行することである。さうして成功することである。彼の忍耐も勇氣も此の自信を俟つて其の力を増大するのである。

○何故人には自信がなければならぬか。

(二) 自信の必要——どうだ、諸子が日々かうして學校に來つて學習してゐるのは、つまり何のためなのか。後日實際の社會に立つて事を成さんがための準備であるまいか。後日我が志を遂げんがための準備であるまいか。さうすると諸子は他日事をなすべき人であらう。後日志を遂ぐべき人であらう。それは自己のために、社會のために、また國家のために。そこでどうだ、其の爲すべき時に、その遂ぐべき時に自信があるとなしとは、どれだけ其の成果に對して相違があるだらうか。伶俐な諸子は直に返答が出来るだらう。

どうだ、若し人が何かをなさうとするとき、そこに自信がなかつたならば、第一に其の事に根柢がないぢやないか。根柢のない所には、そこに成功も覺束ないぢやないか、第二に自信がなかつたなら、或る困難に出遇つた時に、一たまりもなく辟易して仕舞ふぢやないか。障害に出遇つ

たときは直に萎縮して仕舞ふぢやないか。

次にまた何か我が志を遂げんとする時、其處に自信がなかつたら、之も前と同じく第一に根柢がない。だから其の成果も覺束ないぢやないか。第二には何か外から威壓でも加はると、直ぐに逡巡して其の方向を失ふではないか。誰か迫害でも加へると、直下に所信を枉げて中止するぢやあるまいか。所で之に反し確乎たる自信が胸中に深く横つて居るときは、假令どんな困難があつても、障害が生じてても、迫害を加へても、威壓する所があつても、少しも恐れる所なく、ためらう所もなく、動ずる所もなく、斷々乎として進行し、遂に成功するではあるまいか。従つて自信は、私共が事を爲さん上にも、また志を遂げん上にも至切な一徳といはなければならぬ。故に諸子は松陰に倣つて、また金右衛門に倣つて、自信の徳を養ひ、而して之を事を成す上に、また志を遂げる上に實現して、さうして自己の成果を收め、また社會國家の福祉を増進せなければならぬ。

○自信はどうして生ずるか。

(三) 自信の生因——自信の生ずる原因はいろいろあらうが、其の中でも最も大切なことは、

- 1、身體方面では強健な體格の持主であること。
- 2、知力方面では、堅實に學を修め、業を習ふこと。

3、道德の方面では、主として私徳を體得すること。

である。知識もなく道德もなかつたなら到底根の強い底力のある自信が生じない。而して知識は深い上に深いのがよい。道德も高いが上に高いのがよい。それは深ければ深い程、高ければ高い程、自信の根柢が強大になるからである。知識なく道德なくして自信ありといふも、其の自信たるや盲目的で、また底力のない極めて薄弱なものである。身體の強健は自己の自信を現實にするときに至切な要件なのである。

其の他自信は自己の力で爲し能ふことを成し遂げて行く間に、次第に生じて來るものである。故に日常出來ることは、事の大小に關らず、何でもよいから、自分で決し、自分で行つて行くやうに努める。其の時假令他人から嘲笑され、輕蔑され、妨害されても、逡巡したり或は恐怖したりすることは要らない。併し自分で正しくないと覺つたときは、深く省みなければならぬ。要するに自信は知徳を修め、身體を練つて行く上に堅實に生起して來る。而して常に自己の小自信を行つて行く上に益、堅實を加へ、遂に知徳體の修練と相俟つて根柢の深い底力のある大自信が成立つに至るのである。

尙最後に注意すべきは、

1、自己の門地・位階・財産等を持ち、或は自己の才氣を誇り、名聞を好み、小成に安んずるが

如きは、いづれも自信のなき者のなすことである。

2、長者を凌ぎ傲岸人に下らないが如きは自信でない。眞の自信ある人は常によく己に優つた者に學び、平素却つて謙讓の態度ある者である。

3、執拗・剛愎・偏狹等は自信に似てゐる非なるものである。

是等は十分心得る所なければならぬ。

### 聯絡

本課と聯絡ある既有的知識は大體次の如くである。

尋常小學修身書卷四第十三第十四「自立自覺」

高田善右衛門と自立自營○人は相當の年齢に達したら自立自營に心掛けて、人の厄介にならないやうに努めなければならない。人として何の業務にも従事しないのは大なる恥である○常に自分のことは自分でなす所の習慣を養うて、妄りに人手を煩はさず、常に勤勉して自己の業務に従事すべきこと○仕事は着實なること、また辛抱強くあること○勞働を賤み、また骨惜みをなさぬこと等。

同書第十五「志を堅くせよ」。

エドワード、ジェンナーと堅志○凡そ事を成さんとするには、先づ志を立てること。次に一た

び立てた上は、如何なる困難をも忍んで之を成しとげること等。  
以上要するに自信と關係ある點は、

- 1、自立自營には自己の自信といふものが根柢にあらねばならないこと (善右衛門が自活の道を開くについても、自身に其の能力のあることを深く信じぬた)
- 2、志を成し遂げるにも、そこに牢乎として抜くべからざる自信のあることが必要であること (牛痘を人に植ゑると疱瘡にかゝらぬといふのがゼンナーの動かぬ自信であつた)
- 3、自立して業務を營むについても、また志を立てて之を遂行するについても、そこに困難があり支障がある。でそれ等の困難に堪へ、支障を排除する勇氣と忍耐とが必要である。而して此の勇氣と忍耐との根柢にあつて、其の力を増大させるものは實に自信力であること。等がそれである。

### 教授の實際

#### 區分

- 第一時 例話を授く。
- 第二時 訓話を授く。

#### 教具

吉田松陰の肖像 松下村塾 米搗臺等

#### 教法

例話に於ては、松陰先生の聰明、勉學、一生を貫いてゐた大精神、踏海の失敗、松下村塾に於ける子弟の養成と強烈な自信、壯烈な最後、死せざる精神と明治維新の功臣等につき説話して、先生の至誠に感激させ、また強大な自信力に觸れさせる。次に訓話に於ては、例話と相俟つて、自信とはどんな意味か、自信は何故に人生に必要な徳であるか、尙進んで此の徳はどうして生起するか等につき説いて、本徳を啓培し以て現實化する所あらしめる。

本課に於ては、單に松陰先生の自信の徳についてののみ知らしめるでなしに、先生の全人格即ち至誠にも觸れさせるといふ考で話して行く。換言せば全人格を知らしめて行くうちに、先生の自信の徳にも觸れさせるといふ考で取扱つて行く。

#### 第一時

△例話を授く

#### 一、問答

エドワード・ゼンナーといふ人はどんな人であつたか○最初どうした所から種痘法を研究せよ

うといふ考になつたのか○自己の所信を貫徹するのに、どんな困難と支障に遇つたか。いふ風に問答して、

「今日のはかの名高い吉田松陰先生が、強大な自信と抱負とを以て天下の人々を指導し、塾生を教養されたこと等につき話す。」

といふ旨を告げて本教授に入る。

二、説話

次の要項の下に話す。

- (一) 長州の一角に一偉人生る。
- (二) 父は勤王の士であつた。
- (三) 米を搗きながら書を讀む。
- (四) 一舌を捲いて其の聰明に驚く。
- (五) 一生を貫きしは尊王愛國の精神。
- (六) 壯圖空しく破れて獄裡の人となる。
- (七) 維新の元勳を生んだ松下村塾。
- (八) 幕府の専斷と志士の捕縛。

吉田松陰

(九) あはれ小塚原の露と消ゆ。

(十) 松陰神社と永久の生命。

以上は「例話資料」を参照して簡明に適切に話す。

三、整理

以上話した要點につき問答して、一層深く先生の燃える至誠に、強大な自信に觸れさせる。

第二時

△訓話を授く——教科書を授く。

一、問答

○松陰先生はどんなお方であつたか○その至誠はどうした所にあらはれて居るか○またその自信は○然らば自信とはどんなことか○人は何故に自信がなければならぬか○自信はどうすれば生ずるか……

二、訓話

以上の問答と交渉して次の要項の下に訓話する。

- (一) 自信の意義。
- (二) 自信の必要。

(三) 自信の生因。

(四) 自信と似て非なるものにつき。

以上は「訓話資料」を参照して簡明に適切に説く。

三、教科書を授く。

一讀——質疑應答——精神のある所を捉へさせる。

四、考察批判

次の項につき考察批判させる。

- 1、彼等の生活と自信につき。
- 2、自信と勇氣につき。
- 3、自信と忍耐につき。
- 4、自信と剛復(執拗・偏狹)につき。
- 5、自信の修養と其の工夫につき。

備考

一、松陰先生の年譜

天保 元 (二歳) 八月四日、長門國萩の城下松本村に生る。藩士杉百合之助の第二子。名は矩

方、字は義卿、松陰と號し、二十一回猛子及び蓬頭子の別號もあり。通稱初は虎之助、後、大次郎・松次郎、又寅次郎に改む。

天保 六 (六) 同藩の山鹿流兵學師範吉田大助の後を嗣ぐ。大助は松陰の仲父たり。

天保 九 (九) 五月家學教授見習として藩學明倫館に登る。

天保一〇 (一〇) 十一月始めて明倫館に出勤し家學を授く。

天保一一 (一一) 藩主毛利敬親の前にて兵書を進講す。

弘化 元 (二五) 九月藩主の前にて孫子虛實篇を講じ、七書直解を賜はる。藩士山田宇右衛門

江戸より歸り、天下の形勢を説きて松陰を激勵す。是より報國の志益々盛なり。

弘化 二 (二六) 長沼流の兵法を山田亦介に學ぶ。

弘化 三 (二七) 山田亦介より兵法の免許を受く。

弘化 四 (二八) 二月及び十一月藩主明倫館に臨みて、松陰竝に門人の家學講義及び作圖を見る。

嘉永 元 (二九) 正月家學教授の後見人を解く。六月、藩主、松陰竝に門人を城中に召して、家學の作業を視る。

嘉永 二 (三〇) 三月水陸戰略を著す。七月藩命に依りて、大津・豊浦・赤間關の海岸を巡視す。

十月人を率ゐて城東羽賀臺に操練を行ふ。

嘉永 三 (二二) 八月藩主の前にて武教全書守城篇籠城の大將心定の條を講ず。八月九州に遊び十二月歸る。此の間平戸に於て山鹿萬介に家學を受け、又新譯の洋書を読み、又長崎にて支那語を學び、熊本・佐賀等に於て知友を得たり。

嘉永 四 (二二) 正月林真人より極秘三重傳の印可返傳を受く。三月藩主に從つて江戸に至り、安積良齋、古賀茶溪、山鹿素水等に從學し、佐久間象山に師事す。六月宮部鼎藏と房相を巡視す。十二月亡邸東北に遊ぶ。

嘉永 五 (二三) 正月水戸を發し、奥羽北越を遊歴し、四月江戸に歸る。五月萩に歸り命を俟つ。十二月亡邸の罪を以て籍を削り祿を褫はる。此の年九月明治天皇御降誕。

嘉永 六 (二四) 十年間諸方遊學の許可を得、正月萩を發し、五月江戸に入る。沿道諸名士を訪ひ得る所多し。六月ベルリ軍盤を率ゐて浦賀に來る。九月佐久間象山等と謀り、露艦に搭乗の意を決し、十月長崎に達す。志を得ずして十二月江戸に還る。

安政 元 (二五) 正月海戰策を作る。正月ベルリ江戸灣に入り、去つて浦賀に泊す。松陰金子重輔と米艦を追ひて下田に至り、三月二十七日夜、之に投じて海外に遊ばんと志を達せず。二十八日自首して縛に就く。九月十八日罪案定りて金子と共に藩は囚はる。十月二十四日長州

野山の獄に下る。

安政 二 (二六) 正月金子重輔獄死。五日村田清風逝く。十月藤田東湖震死、十二月獄を出でて家に禁錮せらる。

安政 三 (二七) 七月塾居中家學を授くるの許可を得。松下村塾を開く。

安政 四 (二八) 松下村塾の増築成る。門人日に進じ。五月幕府安政條約に調印。

安政 五 (二九) 尊皇愛國の念益々深く、畫策論議愈々多し。四月井伊直弼大老となる。八月勅書水戸に降る。九月間部詮勝京都に入る。梅田・頼其の他志士の縛に就く者多し。十一月松下村塾血盟成る。十一月二十九日過激の罪を以て再び家に囚せらる。十二月三日投獄の命下る。

安政 六 (三〇) 五月二十五日松陰の檻與萩を發す。七月江戸傳馬町の獄に下る。十月橋本・頼、刑斬。十二月二十日獄中に永訣書を作る。十二月二十六日留魂録成る。二十七日刊に就く小塚原回向院に葬る。文久三年世田ヶ谷若林に改葬。

明治一五 幕畔に松陰神社を建つ。事上聞に達し金幣を賜はる。

明治二二 二月十日、特旨を以て正四位を贈らる。

## 二、松陰先生の詩歌

次の正氣の歌は先生が檻與江戸に至る途中に於て作られたもので、其の襟懷眞に宇宙を呑むの概

がある。姦人之を誦せば愧死すべく、烈士は爲に萬丈の氣を吐くだらう。

和文天祥正氣歌韻

正氣塞天地	聖人唯踐形	其次不朽者
亦爭光日星	嗟吾小丈夫	一粟點蒼溟
才疎身側陋	雲路遙天廷	然當其送東
眼與山水青	周海泊舟處	敬慕文臣事
巖島慶賊地	仰想武臣節	赤水傳佳談
櫻留義士血	和氣存郡名	孰捫清丸舌
壯士一谷笛	義妾芳野雪	墓悲楠子志
城仰豐公烈	倭武經蝦夷	田村威鞞鞞
嗟此數君子	大道補分裂	尾張連伊勢
神器萬古存	琵琶映芙蓉	嵩華何足論
最是平安城	仰見天地尊	神州臨萬國
乃是大道根	從墨夷事起	諸公實不力
已破紙教禁	議港州南北	名義早已誤

寧、遑、問、失、得、  
 奉、勅、三、名、侯、  
 亦、皆、溝、中、瘠、  
 幸、有、聖、皇、在、  
 曾、不、拂、洋、賊、  
 人、生、轉、瞬、耳、  
 吾、志、在、乎、昔、

天子荐軫念  
 鷄棲鳳凰食  
 歛忽五六歲  
 足以興神國  
 大義自炳明  
 天地何有極  
 願留正氣得

四海妖氛墨  
 其他憂國者  
 世事幾變易  
 如何將軍忠  
 孰惑辨黑白  
 聖賢雖難企  
 聊添山水色

先生の和歌は澤山あるが、こゝに其の中の二三を抄録しよう。復讀翫味せば、先生の至誠に觸れることが出来る。

○獄中の春

朝日さす軒端の雪も消えにけり

吾が故郷の梅やさくらん

○なみだ松のもとにて

かへらじとおもひさだめし旅なれば

ひとしほぬるゝなみだまつかな



○醫師をつけ給はるとききて

とらはれて行く身にさへももち鳥の

かゝるめぐみをいかでむくはむ

○廣島にて駕籠の戸あけさせて

世の中を思ふもせまき身にはあれど

なほ見まほしき廣しまの城

○明石の浦

ひとよねて月にあかしのうらならば

あはれも深きこよひならまし

○一の谷

一の谷討死とげし壯士を

起してたびの道づれにせむ

○湊川にて

かしこくも君が御夢に見ゆときけば

消えむこの身をなにかいとはむ

○亡友金子重輔を思ひて

箱根山こえしき道を越えむ日は

過ぎにし友を猶やしのばむ

○妹どもにつかはす

心あれや人のほたるいまし等よ

かゝらむことはものものふのつね

○佐々木の叔母君に

いまさらにおどろくべしやかゝらんと

かねて待ちつる終のたび路を

○野村和作にあたふ

君のみはいはでもしらむ我思ふ

こゝろのほどは筆もつくさじ

○冷泉雅次郎におくる

賤が身は世にあはずとも大空に

くもりなき日のてらさゝらめや

○述懐

八隅知君の國だに治らば

身をすつるこそ賤が本意なれ

五月雨の雲にこの身は埋むとも

君が光りの月と晴れなむ

かくすればかくなるものと知りながら

やむに止まれぬ大和魂

○留魂録をかき終つて

わが心筆につくしてとめおけば

思ひ残せることなかりけり

討たれたる我をあはれと見ん人は

君をあがめて夷はらへよ

七たびも生きかへりつゝそみし等を

はらはんこゝろわれわすれめ

## 第十八課 主婦の務

### 教授の要旨

本課に於ては、家庭に於ける主婦の務を知らしめるを以てその要旨とする。

女子は後日人の妻となつたときには、そこに妻としての務と母としての務が生ずる。即ち甲者にあつては、夫に事へて貞操を守り、夫の業務を助け、家庭を整理して行かなければならない。また舅姑に對しては孝道を全うし、祖先の祭祀に厚くあらなければならぬ。乙者にあつては、子女の教育に當り、また善良な家風の作興に努めなければならぬ。かくして圓滿な平和な家庭を構成し、家運の繁榮を圖り、延いて國家の繁榮に貢獻しなければならぬ。本課に於ては、かうした點をよくさとらしめるを以て教授の要點とするのである。

### 教材の研究

#### 例話資料

##### 瀧子刀自

第十八課 主婦の務

(一) 瀧子は松陰先生の母堂である——明治維新の新時代を開く、其の氣運の醸成に最も偉大な貢獻をした人は、言ふまでもなく松田松陰其の人であつた。松陰の生涯は僅か三十年に過ぎなかつたけれども、其の至誠の言行は實に人心の方向を定め、一世を指導したのであつた。而して此の大偉人を産んだ人は誰かといふに瀧子刀自であつた。即ち瀧子刀自は松陰先生の母堂である。

瀧子刀自の肖像



百合之助は初め萩の城下にゐたが、大火のあつた際、杉家も全焼の厄にあひ、悉く家財を失つた所から、城東の松本村に移つて、其處にさゝやかな茅屋を構へて瀧子を娶つたのであつた。當時はまだ役にもつかず、家祿のみで、生計を支へることが出来なかつたから、或は田圃に出て耕し、

(二) 夫を助けて鋭意家事に勵む——瀧子の元の姓を村田といひ、二十歳の時松陰の父杉百合之助(長州萩の藩士)に嫁して其の配となつた。松陰はその第二子であつた。元來杉家は微祿であつて、其の日の暮しに甚だ窮してゐたのであつた。夫

或は近所の子供等に書物を教へて、その日の生計を補うてゐたのである。瀧子刀自も夫と共に、或は野に出て耕作を勵み、或は山に入つて薪を採つたりして、専ら夫の労働を助け、生活を補つたのである。たゞにそればかりでなく、婦女の當然なすべき裁縫、洗濯は勿論、馬を飼ふ世話までもして、朝から晩まで、夜は深更に至るまでも甲斐々々しく立働いて、家業に精勵し、家道を治めて行つたのである。

(三) よく姑に事へて孝を盡す——人には親のないものがないが、その親のうちにも、生みの親と育ての親とがある。今一つは一般に不幸でなく幸福に、不自然でなく自然の攝理に基いて第二の親といふのがある。即ち女子が相當の年齢になると、他家に嫁すことによつてもつ親がそれである。即ち第一の生みの親から離れて第二の新しい親を有つのである。その第二の親を舅姑といふのである。舅姑は夫の實父母で、夫と一體の關係をもつ歟は、自分の實父母と同様にこの新父母に對して、實父母と同じ心で、孝道を勵まなければならない。瀧子刀自も無論女子たる以上は、かうした境地に立たなければならない。即ち彼は年齢二十歳にして其の人になつたのである。杉百合之助の妻として自己の心身を捧げたのである。瀧子の美しい心情は夫に對して、また家事に對して充實にそゝがれたが、第二の親即ち一人の年老つた姑に對しては殊に充實にそゝがれたのである。二度々々の食事は常に口に適ふ柔かなものを勧め、身に纏ふ衣服も温かにして輕きもの

を着せ申したのである。家にあつて裁縫する時は、姑の傍に侍つて、四方山の話をして心を慰め、氣を和げたのである。誠に體養にも厚く、また心養にも深かつたのである。心の底から濃密な敬愛を捧げて事へたのである。姑は瀧子の此の親切に對して、心から深く感謝して居られたといふ。諸子よ、何と純真な孝養ではあるまいか。

(四) 心から小姑を勞はる——一般に他家に嫁すると、舅姑と骨肉の親みのある兄弟姉妹がある。之を小舅・小姑といふ。そこで嫁たるものは此の小舅・小姑に對しても、自分の兄弟同様に親しまなければならぬ。夫の兄弟・舅姑の子として敬愛し又親切にせなければならぬ。瀧子にも一人の小姑があつた。併しもう岸田といふ家に嫁して家にはゐなかつた。だが後で生家に戻つて來たそれは嫁せし家は非常な貧困であつた爲、遂に生家に歸つてかゝり人となつたのであつた。當時の杉家も同じく貧困であつたが、併し瀧子は少しもこれを氣にする所がなく、心の底から其の境地に同情して世話した。三人の子を抱へながら炊事・洒掃から裁縫・洗濯に至るまで、自分一手に引受けて、晝夜骨身を削つて立働いて、家事を整理し、家内の親和を圖つたのである。所が其の小姑は病氣に罹つた。而かも起臥さへも自分で出來ぬ程の重い病氣であつた。普通の人なら茲に淺ましい心を起し易いが、瀧子は少しもさうした所なく、益、深く同情して、食事や湯薬は勿論のこと、大小便に至るまで世話し、晝夜看病に怠らなかつた。之を見た姑も「忙しい暇のない身を

以て親類の世話までもしてくれる。」といつて熱い涙を流して喜ばられたのであつた。實に感心ではないか。

(五) 家政を整へ子育につとむ——其の後幸にして夫百合之助は藩の役人に取立てられて城内に移つた。瀧子刀自は家に留つて一意専心に家政を整理し、子供の養育に努められた。前に言つたやうに瀧子の嫁した當時は家甚だ貧困であつたが、夫を助けて家業に精勵し、儉約を守つて家政を治めて行つたため、生計もだん／＼豊かになり、子供の教育にも十分盡す餘裕が出來た。瀧子は銳意心を教育に注ぎし結果、子女は皆心掛のよい人となつた。

中にも二男寅次郎即ち松陰先生は天晴な名士となり、勤王の思念重厚で、少壯から國事に奔走し、屢、困厄に遇つたが、瀧子刀自は常に之を勵まして所志の貫徹に努めさせた。松陰先生が松下村塾を開くや、瀧子は多くの門人をまるで我が子のやうに愛し、進んで衣食の世話までもしたのであつた。門人等は松陰先生の學徳に敬服すると共に、また瀧子刀自の慈愛にも感激するのであつた。外艦の來訪と共に國內が騒しくなり、天下の志士が四方に奔走し出した時、松下村塾は忽ち志士の相談所となつた。此の時も瀧子刀自は酒肴を具へて是等の人々を勞はり、是等の人の爲を圖つたのであつた。實に瀧子は婦女としての美德を悉く具備して居たのみでなく、また男子も及ばない熾烈な愛國心の持主でもあつたのである。

(六)我が子の死を誇ある行動として喜ぶ——前課にも言つたやうに、松陰先生は尊王愛國の精神を普く我が國民に吹込まうとして、松下村塾に於ては勿論、また屢、書を公卿や藩主に致して尊王の大義を説き、王政復古の至當を切論したのであつた。此の時大老井伊直弼は天下の志士を捕へ、威壓を加へることが甚だ惨烈であつた。松陰先生も嫌疑者の一人として遂に江戸に檻禁された。さうして幕府は此の一代の偉人に死の宣告を與へ、安政六年十月二十七日、先生は遂に小塚原の露と消えたのであつた。

此の悲哀な報知に接した時、普通の親ならば屹度卒倒したであらう。また之が人の親としての當然のことである。瀧子も勿論人の親たる以上は、愛子の奇禍に對して無限の悲みがあつたに相違ない。が併し彼はそれがため心の明を失ふ所なかつた。別に動する所もなく、「身を以て王事に倒れた。蓋し男子の本懐であらう。」といつて、「我が子の死は誇りある死だ」と言つて、却つて満足されたのであつた。之れ全く瀧子の平生の修養と赤き愛國心とに基くもので、實に平日の婦人として賢明であるばかりなく、また非常時に於ける母としても賢明であつたのである。誠に婦女に對する尊き鑑の人といはなければならぬ。

(七)瀧子刀自の晩年と光榮——善行の光は永久である。善行に對する感激も永久である。瀧子刀自の美しき貞操と、丈夫も及ばぬ氣節に對しては、明治の御代に至つて、辱くも天朝の知り給ふ

所となり、六年八月皇后陛下(昭憲皇太后)から羽二重一匹を特に賜うて平素の志操を嘉賞し給うた。二十年十一月病み、病重くあつたから土方宮内大臣から皇后陛下に聞え上げた所、菓子一折を御見舞として下し賜うた。二十二年十二月また縮緬一匹を賜ひ、松陰先生の門人であつた品川彌二郎(當時御料局長)が命を承つて書を付して贈られた。甚の書中には、

今朝十一時參内仕候處皇后陛下より御側近く召させられ「松陰の老母へ些少の品なれども遣はし度候間彌二郎より可然取計ひ呉れ」との御言葉ありし故此包(白縮緬一匹)拜戴し、如斯迄大御心を掛けさせられ松陰の母は申迄もなく松陰も地下にて感泣致し候はんと申上げ落涙して御前を退きたり彌二郎の心事御推察可被下候右御品御送附方は庫三様へ談し取計ひ可申候間何卒先師の御靈前にて北堂君へ御渡しあらんこと奉希望候……(備考参照)

とあつた。瀧子刀自にとつては實に至上の光榮ではあるまいか。二十三年皇后宮が山口縣御巡覽の折、瀧子を召して謁を賜ひ難有御詞を賜うた。瀧子は夫及び我子の靈を祀つて

「寅次郎が非命の死を遂げた時、亡夫も亦其の禍に罹つて世を去り、二人共に忠義の志を齎しながら、明治の聖代に逢はないで、老婦のみが重ね／＼の恩典に霑ふこと有難くもあり、亦悲しくもある。」

といつて靈前に熱涙をはら／＼と落された。此の年の八月十七日に松下村塾再興の修築成り、上

棟式を行ふとき、瀧子刀自は輿に乗つて式に列し、往時を回想し、深刻な感激に、幾度か老眼に湛ふ涙を拭はれといふ。八月二十九日再びの病に遂に永久の眠に入つた。享年八十四。皇后陛下から金壹百圓の御下賜があつた。何ぞ無上の光榮であるまいか。肉は既に此の土に化して跡なきも、美しい靈の光は永久に人心を照して居る。

### 訓話資料

以上の例話と交渉して大體次の内容で訓話する。

○瀧子刀自はどんな人であつたか○然らば妻としての務のおもなるものは。

#### (甲)妻としての道

(一)和 合——夫婦の道は和合を以て第一とする。而して和合の中心は愛情である。愛情がなかつたならば夫婦の道は根柢から破壊されて仕舞ふのである。

夫婦の和即ち和合を破る條件には色々あるけれども、其の内主なるものは(一)不足(二)不貞(三)敬の不持等である。茲に不足とは

- 1、衣裳や道具がないとか。
- 2、家が貧乏であるとか。
- 3、學識が足りないとか。

4、技藝が未熟であるとか。

5、容色が醜であるとか。

等で心に満たないものをいふのである。中には此がために遂に離縁するに至るものもある。一體不足といつたやうなことは結婚以前にもう分つてゐる筈である。また分らなければならぬ筈である。自分に不足を嫌ふのであつたら、初めから結婚せぬがよい。其の不足を知つて結婚したとせば、賢明であらねばならない。元來不足といふものは人間には誰もあつてゐる。誰ももつてゐる。併し之は(5)を除くの外は、修養によつて、また二者の協力的活動によつて補充することが出来る。只醜丈は其の人の天賦だから仕方がない。併し外面の醜をすて、心の美をとつて、賢明に結婚した以上は、其の最初の賢明はどこまでも維持して行かなければならない。さうして最後の日迄琴の相和する如くあらねばならない。(二)の不貞、(三)の敬の不持等については、だん／＼のべて行くが、是等も夫婦間の和を破る有力なもので、殊に(二)に於ては正當な離縁の理由ともなるのである。で以上の條件はもう事後にあつては互に賢明に悟り、互に人格を認め、愛敬を保持して、最終の日まで濃密に和合して行くのである。

夫婦相和して、家庭の平和を圖るは夫婦當然の道だが、またこの中に成長する子女も自ら薰化され、善良な性情と健全な氣質とを有するに至るのである。

かくして一家の平和は一郷一村の範となり、進んでは國家・社會の良風・美俗を醸成する源泉ともなるのであるから、和合といふことは夫婦道に於て最も大切な道なのである。

(二) 貞操——貞操といふことは夫は妻を、妻は夫を純真に愛してかはらざるをいふ。實に貞操は二者の間に於ける道德的生命であつて、假令死を以てしても之を全ふする覺悟がなければならぬ。

貞操の徳は、東洋に於ては昔から男子より女子に要求することが一層嚴であつたが、今日のやうに人格觀念の發達した時代にあつては、双方共に嚴守せなければならぬ。併し我が國の組織は家族制度を基礎とし、血統を重する國であるから、共に嚴守すべき中にも、女子は自己の生命として嚴肅に守つて行かなければならない。若しも相互の間に貞操を守るといふ純潔がなかつたならば、一家の不和は勿論、延いては社會・國家の風儀をも亂すことになる。貞操は夫婦間に於ける當然の道であるが、また一家の平和、社會・國家の純潔に對しても大切な双互道德である。

(三) 持敬——持敬といふことは夫婦の間に敬の存することである。敬とは互に人格を認めて禮儀作法を重じて行くのをいふのである。

然らば何故に敬が必要かといふに、夫婦の間が餘りに親しきに狎れて來て、感覺的の愛情に溺れるに至ると、其處に互に禮儀を失し、道を紊り、遂に不和を見るに至るからである。故に夫婦

は親しい中にも常に敬の徳を守つて行かなければならない。

(四) 内助——内助とは、婦たるものが家にあつて夫を助け内を治めて行くをいふのである。一體男女の二者を較べて見ると、男子は一般に筋肉強健で、能く競争や勞作に適するが、女子は筋肉柔軟で、それ等の活動に適しない。これ男女の重なる生理上の差違である。又一般に男子は理知を以つて優り、其の頭腦が論理的であつて、思辨や創作や發見等に適して居る。之に反し女子は一般に感情に於て優り、思想・信仰等が保守的であつて、守成に長じ、隨つて家政の整理、老人の保護、兒女の養育に適して居る。これが男女の重なる心理的の差異である。

此の天の成した兩性の差異は、自ら兩者の位置・職分の差を生じ來たのである。即ち男子は外を司り、女子は内を治めることになつたのである。いづれも天分の致す所である。

併し此の天分の差は決して價値の大小と思つてはならない。また權利の多少とも解してはならない。いづれも人格としては平等である。些の高下はない。従つて此の自覺を以て各其の本分に盡さなければならぬ。

そこで妻たるものが自己の本分即ち内助の任務を全うするには、よく夫の境遇・他位・職業等を理解し、夫の心を以て心として、其の仕事を助け、足りない所を補つて行かなければならない。而して萬一過失があつたら誠を盡して諫め、失敗あれば十分勵まして行くのである。また夫の性

質をよく知り、其の趣味に同化して、純真に慰安して行くのである。かくしてまた一方には家政をよく整理して、子女を養育して、夫をして後顧の憂なからしめるのである。要するに内助の務を全うするには、よく家政を整理し、子女を教育し、家業を助け、さうして夫に對して親切的な同伴者となり、忠實な補助者となり、眞實な慰安者となるのである。

(五) 家政の整理——内助の中でも家政の整理は妻たるものの最も大切な務である。

家政の整理とは即ち家事の整理のことである。一家を治めて行くに必要な各種の仕事はいふ。家政即ち家事に屬する仕事の内で、其の主なるものは、一家の經濟・衣食住・看護・交際等である。

經濟とは一家の費用を節約して利殖を計り、一家の基礎を固め、安全を圖つて行くのをいふ。即ち一家の收入によつて豫算を立て、支出を加減し、節約によつて貯金をなし、勤勉によつて収入を増加し、保険にはいつて非常の場合に備へる等がそれである。

衣食住とは衣食住に關する選擇・保存・調理・衛生等を意味するのである。即ち衣服については、之を選び、之を縫ひ、之を洗ふは勿論、また之が保存等に至るまで、可成自身で之を行ふのである。次に飲食物についても材料の選擇を始め之が料理・貯藏等に至るまでも、可成自身で之を行ふのである。次に住所に於ても常に採光、換氣に注意し、また内外の清潔等衛生にも注意して行く。

くのである。

其の他看病とは病人に對する一切の世話をいひ、交際とは親類と、また他人との交りを圓滿に計つて行くのをいふのである。以上はいづれも家政即ち家事の内容として大切なものである。

若し一家に於て此の家政がうまく行かなかつたら、其の一家は經濟に於て缺乏を來し、活氣と愉快を殺ぎ、平和を破り、惡徳を醸成し、遂に衰頹するに至るのである。家政の整理は本當に妻として、また母として大切な任務なのである。

(六) 舅姑と孝道——前にも言つたやうに、一般に女子は相當の年齢に達すると他家に嫁するのが天理である。此の時には生みの親を離れて、新しい親をもつことになる。即ち嫁した夫の父母を我が父母とすることになる。此の第二の新父母を舅姑といふのである。

生みの父母に對してそこに孝道があるやうに、新しくもつた父母に對してもそこに孝道がある。而して其の内容はいづれも同一である。即ち生みの父母に對する眞心を以て舅姑に事へなければならぬのである。

世の實際を見ると、舅姑と嫁との間には、二者の衝突からしていろいろと忌はしいことが多い。之は畢竟するにまだ双方が互に理解し合ふ所少く、互の自覺の足りない所から起るのである。だから嫁たるものは深く自分を省み、その道に目覺めて、眞の親として孝事して行けば其の



至誠舅姑に通じて、そこに眞の親子の情愛の生ずるに至ることは、古來から其の例少なくない。また一方舅姑に於ても、新婦のまだ家風になれないのを憐み、遠慮なく立入つて、知らざるを教へ、足らざる所を戒めて行くのである。之も要するに家を思ひ、其の子夫婦の將來を思ふ餘りである。而して嫁たるものは舅姑の言は之を善意に解し、我意をすて、尊奉して行くのである。かくして事毎に快く其の命に従ひ心にさからはなるときは、舅姑も遂にその優しい心掛に感じて、いつのまにか好意を以て迎へるやうになる。荒き所行に出づることあつても、我が不徳から招く所だと思つて、些も怒らず毫も恨みず、寧ろ其の心事を憐んで、溫容以て之に従へば、如何に無情な舅姑でも、遂に良心に目覺めて其の態度を改めるに至るのである。殊に一般に舅姑が年寄つて居る。氣は短慮一徹になつて居る。で無理なことも多くある。併しさうあればある程、誠を捧げる所に美しい孝道があるのである。

兎角新しい嫁は之を以て自己の屈辱とか、人格の損傷とか、女性の敗北とか言つて、抵抗し、拒否し、主張したりすれども、之は却つて自己の不寛容を、抱擁力の狭小を語るものである。また一面には餘りに平等觀に落込んでゐる嫌もあるのである。元來道といふものは平等の上のみに立つものでない。差別の上にも成立つものである。孝道はどつちかといふと、寧ろ差別の上に(超越的に)成立つてゐる大道である。嫁たるものは此の點をよく理解して貫きたい。

舅姑と嫁との不和の原因にはいろいろあらうが、今其の内の主なるもの二三をいつて見ると、

- 1、裁縫・編物・料理等の技藝に熟練してゐないこと。
- 2、生花や茶の道の心得のないこと。
- 3、禮儀作法に習はないこと。
- 4、衣服・調度の少ないこと。
- 5、舅姑の承諾なき結婚であつたこと。
- 6、家政整理の才能に乏しいこと。
- 7、思想に新舊の差違のあること。

がそれである。故に女子たるものは、是等の點によく省みて、嫁たらざる前に十分修養すべきは勿論だが、嫁たる後に於ても、夫や舅姑の了解を得て、是等の方面の修養をも怠らないやうにする。殊に近代に於ては思想上の衝突が著しく、之がため家風を亂し、平和を破り、別居を餘儀なくし、甚だしきに至つては破鏡の悲みを見るに至るものも往々にある。以上の諸點は嫁たるものは深く注意し至誠以て舅姑に事へ、以て一家の平和を圖り繁榮を圖つていかなければならない。

(七) 小姑と嫁——夫の家には夫の兄弟姉妹がある。之を小姑といふ。元來是等の人々が一團となつて、同じ父母の愛護の下に生長し來つたものである。だから相互の間には深い愛情がある。併

し嫁と小姑との間にあつては、嫁はまだ家風に熟しない、家事にも慣れない。また心の内がお互に分つてゐない。といつたやうなことが原因となつて、兎角調和がとれず、動もすると二者の間に反目が生じ易い。是等は一家に取つては誠に不祥なことである。

だから嫁たるものは小姑は我が愛する夫の兄弟姉妹で、また我が尊敬すべき舅姑の子女である。故に舅姑に事へる心、夫に事へる心を推して、謙遜に親切に接して行かうといふ賢明な理解から小姑に接して行くのである。殊に若し小姑が一旦他に嫁したが、不幸にして離縁して生家に歸つて來たときの如きは一層同情を以て接して行くのである。即ち瀧子刀自のやうに眞心を以て接して行くのである。

また小姑に於ても、嫁に對して常に心を溫和に持ち、殊に家風にまだ慣れない新婦であつた場合には、とりわけ深く同情し、其の知らない所を教へてやり、足りない所を補つてやつて、自分は背後に於ける親切な後援者になつてやるのである。假令嫁に缺點や落度があつても、之を惡しざまに父母に告げたり、また嚴しく咎め立てたりしないで、陰に之をかくまつてやるのである。

二者の間にかうした深い心情の交流があれば、そこに決して忌はしい暗闘もなく、また不和もなく、平和に圓滿に互に接して行くことが出来るのである。之は單に二者に於ける道であるのみでなく、また親に對する孝道で、また社會・國家の善良な模範である。

### (乙)母としての道

○然らば母としての務はどうか。

(一)子女の教育——母としての務も之を數へあげたら幾つもあるが、大體約して三つ位になるだらうと思ふ。即ち慈愛・養育・教育の三つである。(勿論父もさうだが)

慈愛とは、自然の愛情に任かせて寵愛度なきの謂でなく、我が子女のために永久の仕合を希ふ所に發動する愛情をいふのである。單に目前の慈愛であつては、子女は愛に馴れて放恣になり、のみならず後日の生活を誤るに至るのである。また偏方的であつてはならないのである。若し一方に厚く一方に薄かつたときは、子は母を怨み、母は子を疑ひ、延いては親子・兄弟の仲をも悪化するのである。で慈愛の裡には常に理性が輝き、さうしてそれが濃厚で而も遍滿であらなければならぬ。

次に養育とは子女を扶助し養育して行く務をいふのである。言ふまでもなく子女の初めて生れるや自ら飲食することは出来ない。稍、長じても心身は尙薄弱であつて自活することが出来ない。でそこに他からの扶助・養育を要する。而して此の任に當るものは實に母(父も)である。母(又父も)其の人を措いて他に求むべきでない。子女の養育は母の務として慈愛と共に大切な道である。

次に教育。之は母(又父も)としての務の中一番大切な務である。教育を分けると家庭教育と

學校教育となるが、子女は初め家庭にあつて、次に學校に出て教を受けて、次第に精神上的の發達を遂げて、行くのである。而して家庭教育の中心たる人は父よりも寧ろ母にあるのである。

家庭教育はすべての教育の根源である。各種の教育を授ける基礎は家庭教育によつて成るのである。知性の上に於ても、感性の上に於ても、徳性の上に於ても、身體の上に於ても皆然りである。家庭教育の良否は實に其の子の將來の良否に關係するのである。古から世に勝れた人は必ず善良な家庭から出て居る。換言せばそれ等の人はいづれも賢母の感化を受けて居る。瀧子刀自と松陰先生の如きは、本當によい實例であるまいか。で家庭に於ける子女の教育は母たるものの最も重大なる責任のある教育である。實に母が子女を育てることの良否は、後日其の子の人たりに大なる影響があるのみでなく、延いては社會國家の盛衰にも關係するのである。故に世の母たるものは此の點に十分目覺めて母たるの本分を充實に完全に果さなければならぬ。

(二) 修 養——修養といふのは、知徳を修め、身體を練るをいふのである。これは男女の區別なく年齢の老弱を問はず、人として誰も生涯に通じて必要なことである。併し日本人はどつちかといふと一定の學業を了へて實社會に立つと、修養を中止する傾がある。殊に人の妻、人の母となつた後には、妻となり母となつたがために修養は出来ないと云ふ風に打切つて仕舞ひ、とんと其の方を顧みぬに至るは構偽でなく事實である。之は實に大なる缺點であつて、また因襲的の弊風

である。修養といふことは、人としての價值それ自身に向つて必要である上に、また妻として母として必要である。併し修養の内容は處世時代の如く一般的でなくともよい。範圍を限定した特殊な所でよい。即ち主として家事の方面に關する、育兒の方面に關する、文藝の方面に關するものでよい。是等の方面に關して、適當な時間を作つて、少し宛でもよい、不斷に持續してなして行く。さうでないとは家事の方面にも、らくなり、育兒の方面に於ても完全を缺き、趣味の方面に於ても乾枯となる。而して身體の方面は、特殊の方法によつて特殊に鍛鍊するといふことは出来ぬが、日常の活動の中に其の適法を工夫して、その強健を保持して行くのである。

時代は常に進んで止まない。従つて子女も新しい教育を受け、新しい思想に生きて行く。之がために親子の間に新舊思想の衝突があつたり、子女の教育に古い所があつたりする。勿論母は子女以上に常に修養して子女以上の知徳を備へてゐなければならぬといふのではない。が修養によつて賢明な自己となつてゐなければならぬ、殊に人格の修養は常に怠らないで、此の點には常に子女の模範となつて行かなければならぬ。かうした心得は妻の務として、母の務として、大切な務め即ち道である。世の主婦たるものは此の點に十分目覺めて、自己の大なる本分を全うしなければならぬ。

## 教育勅語

一、勅語

「夫婦相和シ」

二、奉釋

(一) 語句

「夫婦」をつととつま。

「相和シ」 仲善くすること。即ち愛の心を以て一體となつて行くことをいふ。

(二) 大意

「夫婦といふものは一家組織の根本で、また社會生活の根元である。故に兩者は互に相愛し相合して一體となつて、各、其の本分を全うせよ。」といふ御意味である。

我が國の夫婦は家の一時代を成すものであつて、内に於いては祖先に奉仕し、子女を養育し、よく其の家を齊へることを任務とする。外に對しては親族と交り、社會・國家に對する務めを全うすること等を職分とする。而して一家の榮枯、社會・國家の治亂も、夫婦が其の道を得る得ないとは至大の關係がある。で夫婦の道は誠に重いといはなければならぬ。

夫婦の道は相和するを以て最も主要とする。一男一女が純真な愛を以て永久に結んだものが夫婦である。だから、兩者は互に相愛し、相和して一體となつて行くのが自然の姿なのであ

る。

夫婦は其の性を異にするから、其の職分を分つて、夫は一家の長として責任を背負ひ、妻は夫を助けて家事に盡さなければならぬ。併し相和するを以て兩者の根本の道とすることに於ては毫も差別がない。従つてその間に男尊女卑といふ差別もない。一家の秩序の上から夫婦に各、其の分があるけれども、それは平等の中の差別である。

夫婦の愛は清い精神上のものであるから、富をもつて之を盛にすることも出来なければ、貧を以て之を衰へさせることも出来ない。若し貧富によつて動いたときは、それは純真の愛でないのである。彼の夫婦の間に葛藤が起り、不和を生ずるが如きは純真の愛が兩者の間に通うてゐないからである。かうした關係にある夫婦は眞實の夫婦道の上に立つてゐるのでない。夫婦の不和は單に家庭の破綻だけでなく、孝道の破壊、子女の教養の不成立だけでなく、それ等の禍は親族を始め、廣く社會・國家にまで及ぶのである。

教授の實際

區分

第一時 例話を授く。

第二時 訓話を行ふ。

第三時 訓話を行ふ。

### 教具

瀧子刀自の肖像

### 教法

本課に於ては、先づ

- (一) 瀧子刀自は松陰先生の母堂でありしこと。
  - (二) 夫を助けて鋭意家事に勵んだこと。
  - (三) よく姑に事へ小姑を勞つたこと。
  - (四) 家政を整へ子女の教育に努めたこと。
  - (五) よく天下の志士を勞つたこと。
  - (六) 松陰の死は男子の本領だといつて動じなかつたこと。
  - (七) 瀧子刀自の晩年と無上の光榮。
- 等の諸項の下に、瀧子刀自の美しい婦道の顯現、熾烈な愛國心の抱有、丈夫を凌ぐ不動の意志、晩年の光榮等につき切實に説く。

次に右例話と交渉して

- (甲) 妻としての道
  - (一) 和合
  - (二) 貞操
  - (三) 持敬
  - (四) 内助
  - (五) 家政の整理
  - (六) 舅姑と孝道
  - (七) 小姑と嫌
- (乙) 母としての道
  - (一) 子女の教育
  - (二) 修養

等の諸項の下に切實に訓話する。而して女兒に對し特に重きを置く。

夫婦道については、近代は新しい思想が大に混入して來てゐるから、之を説く際十分考へて過激に落ちぬやう注意する。

### 第一時

△例話を授く。

### 一、問答

前授の松陰先生のえらかつたことについて問答し、次に

「今日は其の偉人を生んだ母、即ち瀧子といふ方について、またはなすことの幸福をもつた云云。」

と告げて本教授にはいつて行く。

二、説話

次の要項の下に切實に説く。

- (一) 瀧子刀自は松陰先生の母堂である。
  - (二) 夫を助けて鋭意家事に勵んだ。
  - (三) 誠意を以て姑に事へまた小姑を勞つた。
  - (四) 家政を整へ子女の教育に努めた。
  - (五) よく天下の志士を勞つた。(熾烈な愛國心の持主)
  - (六) 松陰の死とけなげな覺悟。
  - (七) 瀧子刀自の晩年と其の光榮。
- 婦道  
の  
現實

三、整理

以上話した要點につき問答して、一層深く感激させる。

第二時

△訓話を行ふ。

一、問答

○瀧子は誰の母か○嫁した當時はどんな暮であつた○そこで瀧子はどうかされたか○姑に對しては○また小姑に對しては○子女殊に松陰の教育に對しては……等。

二、訓話

以上の問答と交渉して次の要項の下に訓話する。

- (一) 和合
  - (二) 貞操
  - (三) 持敬
  - (四) 内助
  - (五) 家政の整理
  - (六) 舅姑と孝道
  - (七) 小姑と妻。
- (甲)主婦としての道

以上は「訓話資料」を参照して簡明に説く。

三、整理

以上説いた所をその要點に互つて問答し、婦道の内容を要領的に理解させる。

第三時

△訓話を行ふ——教科書を授く。

一、問答

○主婦としての務には○然らば母としての務には。

二、訓話

以上の問答と交渉して、次の要項の下に説く。

(乙)母としての道  
(一)子女の教育  
(二)修養

以上は「訓話資料」を参照し、簡明に適切に訓話する。

三、整理

前後訓話した婦道全體にわたつて其の要點につき問答し、次に勅語の御語句「夫婦相和シ」と結びつけて、一層充實に斯の道を理解させる。而して勅語については、其の讀みと意味とを明かにする。

四、教科書を授ける

一讀させる——質疑に答へる——精神のある所を捉へさせる。

備考

松陰先生母氏事蹟

松陰兄弟七人あり。兄民治父の後を承け、妹芳兒玉氏に適き、次妹壽小田村氏に適き、三妹艶天す。四妹美和(初め名は文)久坂氏に適く。弟季三郎早死す。母兒玉氏名は瀧(實は村田右中の女兒、玉太兵衛に養はる)賢にして婦道あり。性仁愛勤儉、克く事に耐ふ。初め杉氏家貧し、兒玉氏稼穡の艱難を躬らし、馬を牧するに至る。姑に事へて至孝、姑の妹岸田氏亦貧し。病て杉氏に倚る。兒玉氏時に三子女あり。皆幼なり。幼兒を愛育し、病者を看護し、辛苦至らざる所なし。姑氏泣て其義を謝す。松陰の松下村塾を開くに當り、兒玉氏厚く子弟を視、同志の士來る時は酒饌を供して之を款待す。松陰の後進を誘掖せしもの、兒玉氏與りて大に力あり。松陰刑に死し、禍ひ延て其父に及ぶ。然れども兒玉氏恐怖の色なく、能く家事を理して亂れず。前原一誠の亂に當り。孫小太郎及び夫弟玉木正韞(初め名は文之進)、孫婿玉木正誼之れに與りて死す。而て民次外に役す。兒玉氏毅然難に處して誤らず。晩年名聲益、世に顯はれ、朝野の慰問絶えず。明治十五年冬藤田一郎(下野人)兒玉氏を見寫眞を請て東京に歸り、三條太政大臣に謁し遂に乙夜の覽に供へ奉り、皇太后・皇后兩陛下も亦御覽を辱ふし、十六年八月特に羽二重一匹を賜はる。二十年十一月病稍、重し。初め金原明善(遠江人)松陰を慕ひ、其母氏の爲めに謀るもの少なからず。已に瘠に臥すを聞き、大に驚き、土方宮内大臣に詣り狀を具す。事聞す。皇后陛下菓子一函を賜ふ。皇太后宮大夫杉孫七郎書を以て旨

を民治に傳ふ。

前文 卸老母様御事先達以來御病氣の趣皇后宮被<sub>レ</sub>聞召<sub>二</sub>格別の思召を以て菓子一折下賜候段小

官へ御沙汰に付即差贈候間御頂戴の上小官迄御禮の御一書御差越相成度候 下略

幾もなく病癒ゆ。二十二年十二月又縮緬一匹を賜はる。御料局長品川彌二郎命を承り書を付して民治に贈る。

今朝十一時參内仕候處皇后陛下より御側近く召させられ松陰の老母へ些少の品なれども遣はし度候間彌二郎より可<sub>レ</sub>然取計ひ呉れとの御言葉ありし故此包(白縮緬一匹)拜戴し如<sub>レ</sub>斯迄大御心を掛けさせられ松陰の母申迄もなく松陰も地下にて感泣致し候はんと申上げ落涙して御前を退きたり彌二郎が心事御推察可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候右御品御送附方は庫三様へ談じ取計ひ可<sub>レ</sub>申候間何卒先師の御靈前にて北堂君へ御渡しあらんことを奉希望候香川大夫の話には當六日松陰並御老母の事皇后陛下に御話相成候後(御料局長官拜命の時松陰先師在世中の事々々申上たる事あり)幾度も御老母の事御話に相成りよき折もあらば何か老人に遣はし度と御内沙汰有<sub>レ</sub>之過日來品川が參内したれば知らせよとの御事に付先刻申上候處直に御召に相成候との事なり實に先師の顔色彌二郎が眼にちらつき先師の靈魂は皇城を擁護して居る心地致し御前にて落涙に沈み漸く前條記載の御禮丈け申上げたり御推察奉<sub>二</sub>願上<sub>一</sub>候

斯の如く優渥の恩賜を蒙る毎に、兒玉氏夫子及び松陰の靈を祭り深く其明治の聖代に先だちて死するを悲めり。二十三年八月十七日松下村塾再興修築略成り、上棟式を行ふ。因て輿に乗じ出で、之を見且其宴に列し、疇昔を回想し現状を視て、頗る欣慰する所あり。此歳八月二十九日病で死す。年八十四歳、皇后陛下より金百圓を恩賜せられたり。(吉田松陰傳に據る)

## 第十九課 朋友

### 教授の要旨

本課に於ては、朋友に對して交誼を厚くすべきことを論ずるを以てその要旨とする。

君臣の誼、親族の情の外にあつて、最も親しい關係を有して、相助け相益して事を俱にするものは朋友である。

朋友は信義を以て交らなければならぬ。一時の利害によつて相結び、一時の便利によつて相關係するが如きは、たゞに永續せぬばかりでなく、それは眞の交りでない。心に誠あつて言行に偽りなく、而かも理義に合する交りこそ眞實の交りである。

朋友が災難に罹り、或は貧困に苦み、或は志望を得ずして悩むことあれば、進んで之を救ひ、



またその達成に盡してやらなければならぬ。また之に反し或は慶事あり、或は榮達に關するこ  
とあれば、我が事のやうに中心之を祝し、之を喜び、かくして常に苦樂を共にして行く。之が朋  
友に對する誠即ち眞の友情の表現である。

本課に於てはかうした點を中心として説くを以て要旨とするのである。

### 教材の研究

#### 例話資料

##### 一、白石の略傳

新井白石は名は君美、白石は其の號  
である。明暦三年(紀元二二一七年)二  
月十一日江戸で生れた。父を正濟とい  
ひ、上總久留里(今の千葉縣君津郡久  
留里町)の領主土屋利直に仕へてゐた。白石は幼時から甚だ聰明で且膽力に富んだ人であつた。  
三歳の時字を書き、四五歳の時太平記の講義を開いて質疑し、六七歳の時詩の意義を解し、人々  
をして驚歎させた。九歳の時から日課を立てて字を習ひ、十三歳の時その業大に熟達し、利直侯

新井白石の肖像



深く愛して文書の代筆をなさしめた。十七歳の時から學に志し孜々として學んだ。二十一歳の時  
領主利直歿し、其の子頼直後を嗣いだ。併し父正濟は事に坐して罪せられ藩籍を除かれた。こゝ  
に於て白石も土屋家を放逐された。

白石は土屋家を逐はれてから窮乏甚だしく、人或は醫を勧めたけれども彼は聽き容れなかつた。  
時の富豪家河村瑞軒が女婿として彼の窮乏を救はんとせしも、彼はその厚意を謝し、敢然として  
辭した。

二十六歳の時、當時幕府の大老たる古河の領主堀田正俊に仕へた。が僅か三年にして主君正俊  
江戸の城中で斬られ、白石は主君の知る所とならず、小祿が減じられて尙小祿となり、辛うじて  
一家を支へて行つた。併し彼は此のために志を屈し、思をかへることなく、益々修學に勵んだ。  
三十歳のとき、友人西山順泰の紹介で、當時將軍の儒臣として有名な木下順庵に見えた。虚心  
にして才を愛する順庵は、彼の該博に感心して直ちに諸弟子の上席に置いた。さうして二者の間  
には牢乎として抜くべからざる師弟の關係が結ばれた。

三十五歳の時彼は堀田氏に仕へてゐても志を得ず、遂に意を決して仕を辭して浪人となつた。  
此の時彼の家に残つた家財を調べて見たに、青銅三百と白米三斗とに過ぎなかつた。併し彼はこ  
れだけあれば直に饑ゑる事もあるまいといつて、妻を引きつれて江戸の淺草に來つて假住居をし

てゐた。彼は今や流浪の身となり、加へるに貧苦斯の如く甚だしかつたが、彼の意氣は依然盛で少しも撓まず、日夜孜々として學修に勵み、廣く和漢の書を涉獵し、經史百家に精通した。

三十七歳の時其の師順庵の推薦によつて甲斐侯徳川綱豊に仕へて専ら經書を進講した。四十八歳の時、綱豊將軍、綱吉の儲貳となつて江戸に移り、綱吉薨じて其の後を襲ぎ、名を家宣と改められた。白石も亦主君に従つて江戸に移り、幕政に與つて貢獻する所多く、遂に家祿千石を食み、從五位下に敘せられ筑後守に任ぜられた。吉宗將軍となるに及んで、彼は野に退いて専ら力を著書に用ひ、著大な功績をのこし、享保十年(紀元二三八五年)五月十九日永眠した。享年六十九、明治四十年正四位を追贈された。

## 二、白石の交誼

前にも言つたやうに、白石は三十歳の時、當時江戸で有名な學者木下順庵の門に入つて師弟の關係を結んだ。其の頃白石は堀田氏に仕へてゐたが、微祿で生活に非常に困つてゐたのであつたが、彼はその貧苦の中にも孜々として學んで止まず。遂に該博を以て世に聞えるやうに至つた。三十五歳の時、仕を辭して浪人の身となつたが、此の時の窮乏は特に悲惨であつた。

此の時であつた、順庵は白石を加賀侯に薦めんと思ひ、其の由を白石に告げた。然るに此の時同じ門人で岡島石梁といふ人があつた。加賀の生れであつたが、之を聞いて戚然として白石に語

つて言ふやう

「我故郷を出て、遠く江戸に來て學ぶこと茲に年がある。國には一人の母があるが、老衰日に加つて、私の歸るを待つことが甚だ切である。今若し先生の推舉によつて加賀侯に仕へることが出來たならば我が平生の願がこゝに達することが出来る。」

と、白石之を聞いて深く其の心中に同情し、そこで師の君順庵の許に行つて、

「自分の仕へる地はいづれでもよい。加賀には我に代へて岡島を薦め給へ、私の加賀に仕へることは固く辭し申す。」

と、見事に事情を語つて岡島を勧めた。順庵はつくづく之を聽いて、

「今の世に誰か斯の如きものあらう。古人を今に見るとはかゝることをいふのであらう。」

といつて深く感歎して、やがて岡島を加賀侯に薦めた。それから後二年を経、白石三十七歳の時、順庵は彼を甲斐侯に推薦した。侯は後に徳川第六代將軍となつた人である。

白石が自分の衣食にすら事缺く程の窮境にありながら、友人に對する情誼を重んじ、仕を其の人に譲つたといふことは、何と高潔な行爲であるまいか。かうした純高な行爲は人毎にありたいものである。

## 訓話資料

本例話と交渉し、また既習の知識とも連絡して、大體次の内容で訓話する。

(一) 信 義——君臣の誼、親族の情の外にあつて、最も親しい關係を有して、相助け相益して事を俱にするものは朋友である。朋友の間は信を以て相交らなければならぬ。信とは心に誠があつて言行に偽りなきをいふのである。併し其の言ふ所、行ふ所が、義即ち道筋に合つてゐなければならぬ。故に信と義とは離るべからざるものである。従つて之を稱して信義の道といふのである。彼の學校騒動の如き、或は一時の利害のために相結ぶが如きは、信義の道に叶つてゐないのである。其の他虚偽的な欺瞞的な行動も信義に背く即ち反對のものである。實に信義は交友上大切な徳たるは勿論、廣く人類の交際上に於ても至切な道德である。

信義の中でも特に重すべきは約束の履行である。何事に拘はらず、一旦約束した以上は、原則として之を履行するのが道である。彼の「武士に二言無し。」とか「武士の一言金鐵の如し。」といふ標語は、いづれも破約の此の上も無く不徳で、人として誠に恥すべきことを暗に示したものであらう。

違約は多くの場合輕々しく約束を結んだのに基くものである。而してかうなる原因にはいろいろあらうけれども就中主なるものは責任心の薄弱と卑屈とである。故に約束を結ぶに當つては、十分其の事是非善惡を考へ、且それが可能であるか、どうかを察しなければならぬ。若し其

の事が義に叶はず、また實行に不可能であつたら、躊躇する所なく拒絶し、また反省を促すべきである。彼の自分の卑屈性からして、拒絶する勇なく、只管に對者の機嫌を伺ひ、心ならずも約束し實行するが如きは大なる間違である。かうした例は度々あることだから十分注意する。(こゝでは各自にもかうした經驗がなかつたかを想起して反省させるがよい。)

(二) 寬 恕——朋友の間にはまた寬恕といふ徳がなければならぬ。寬恕といふのは、その胸を廣くして、たとひ腹の立つことがあつても怒ることなく、過失があつても咎めることなどなきをいふのである。僅かのことで怒り、僅かの過失に對して責めること嚴であるときは、却つて對者の感情を害し、反抗を高めるに至るのである。寬大で平靜な感情で接して行くと、却つて對者をして自ら其の非を悔悟させるものである。朋友の交りの破れるのを見ると、寬大ならざるがために、それに至るのが多くある。朋友の間は互に寬恕の心がなかつたならば如何に信義を旨としても、永く其の交りを持続して行くことが出来ない。

(三) 忠 告——善を責めるはまた朋友の道である。故に朋友に正しからざる行があつたならば、真心を以て忠告する。さうして改悛させる。互に真心を開いて相誠め、共に知徳の發達を圖つて行くことが大切である。

朋友から忠告を受けたときは喜んで之を聽かなければならない。中には忠告を以て我を侮辱す

るものとし、我に抵抗するものとし、たゞに忠告を聞かないのみか、却つて恨めるものがある。全くの誤りである。忠告は善意からである。我を善に導かんとする赤心からだ、賢明にさつて、その非行を悔い、本心に立ち歸らなければならぬ。さうして中心から感謝して益々友誼を厚うして行かなければならぬ。

自分が真心を以て、また道を以て忠告しても、どうしても用ひないときは其の非行の性質をよく考へて、已むなく絶交即ち交りを絶つのである、勿論自己の忠告が用ひられないからといつて絶交するのではない。其の非行が大で止むを得ない場合である。かうした場合の絶交は道の上から許されて居る。併し絶交其のものは必ずしも永久の性質のものでない。其の後對者が其の非を悟り、心から悔いたときは、再び舊の深い關係に復活することは言ふまでもない。

(四) 救難——こゝに救難といふのは、友の難儀を救助するをいふのである。而して難儀といふことも友人が火災に遇つたとか、水難に遇つたとかいふ所謂天災のみをいふのでなく、友人が職を失うて困つてゐる場合(卷三第九「友だち」——友藏と信吉の例話の如き)、職を得ずして困つてゐる場合、(本課に於ける岡島と白石の例話の如き)、赤貧にして日々の生計に困つてゐる場合、其の他臨時の出來事(卷一第四「友だち」は助けあへ)に於ける一兒童が俄雨に遇つたこときの如き)のために困つてゐる場合等をもいふのである。以上の場合には、自分の力を考へ、其の緩急を察

して、宜しく救助せなければならぬ。

人は災難に遇つたり、また困ることの起つたりすることは慥かに一つの不幸である。お互に希望する所でない。でそれを己れに引當て、同情するといふことは人情の美である。殊に自分と最も親みの關係ある友人にそれがあつたならば、中心から同情し、進んで世話し、また救護する所なければならぬ。本課に於ける白石の如きはこの點に於て、實に重厚な友誼の表現者であつた。誰人も友のためにかうした同情を以て、誠意を以て救難し、慰安する所なければならぬ。

併し以上に反し、友人に於て、或は昇進し、或は慶事があつたりしたことは、中心から之を悦び之を祝ふのである。中には地位の上進を見て之をねたみ、甚だしきに至つては之を惡しげまに言ふものもあるが、之は大なる誤である。却つて自分の心の卑しきを語り、友誼に對する自己の低能を語るものである。かういふ友人は眞の朋友でないのである。朋友は常に苦樂を共にする所が眞の朋友なのである。

(五) 朋友の選擇——朋友はよく之を選ばなければならぬ。それは善い友と交はるときは、知らず識らずの間に善に化せられ、惡しき友と交はるときは、いつしか惡風に染むからである。彼の「麻の中の蓬は矯めざるに自ら直し。」とか「水は方圓の器に隨ひ、人は善惡の友による。」とかいふ古人の語は之につき教訓したものである。

善き友といふのは、性質善良で、學識に富み、信義に厚く、常に善を責め、惡に對して忠告してくれる友をいふのである。惡しき友といふのは、性質不良で、學識なく、約束を重んぜず、虚偽の言行多く、常に言を飾り、言葉巧で、友をして惡しい方面に誘ふ徒をいふのである。

益友を選ぶには、先づ我が身を方正にしなければならぬ。我が身が方正でなうて、益友を得んとしても益友が來ないのである。我に邪曲が多くあつて、さうして友を求めても、其の集る友は悉く邪惡の徒のみである。尙朋友は單に身邊に限るものでない。また一國のみにも限らない。之を廣く世界に求めてもよい。それは人類の共同文明を進め、世の平和を來す所以でもあるからである。

以上要するに朋友は先づよく選ばなければならぬ。選んで之と交つたならば、常に信義を以て交らなければならない。さうして不幸に對しては互に之を助け、慶事に對しては互に祝福して苦樂を共にして行く。また善に對しては互に奨励し、惡に對しては互に忠告して、以て向上を圖り、幸福を開いて行くのである。また些少のことに怒らず、些事の過を責めず、寛大にして親密に交つて行く。かうして行く所に朋友の道を完うし得るのである。かくして行く所に御勅語の御精神に叶ふことが出来るのである。

### 参考

### 信と義

信とは心に誠があつて言行に偽りなきをいふ。信と誠とはどう違ふかといふに、誠とは朱子が「誠は天の道」といつたやうに、倫理學上の原理といふ様な場合に用ひるが、信は朱子が「人の道の信實」といつたやうに人の言行の信實であるをいふ。

行為上の信實とは他人と相接する上に於て一毫の虚偽なく、其のなす事のすべてが名譽を得よう、利益を得ようといふやうな動機からでなしに、爲すべきことであるからといふ義務の意識からするをいふ。貧民を救ふのに、其のことが自身の廣告でなしに、眞に彼等を思うてするのが行為上の信である。子弟を教育するのに當つても第一義的に子弟のためのみを思つてするのが――昇給のため監督者の氣に入らうがためでなしに――行為上の信實である。言上の信實とはうそいつはりをいはずをいふ。國訓の正直がそれである。

義とは人の道に叶つたやうに行爲して行くをいふのである。更に之を動機の方面からいへば、我が本分を盡すといふことである。子としてまさにかくせねばならぬ、臣の分としてかくせねばならぬとの觀念が非常に強くなつて、其の觀念に従つて行爲するときは之れ義である。故に信を盡さうと思つても、其の事柄が人道に反して居るときは、即ち義に背いてゐるときは、信を盡すことが出来ない。若し信を盡さんか、即ち背德の人となり、背德の人たらざらんとするか、即ち

不信の人となり終るのである。彼の學生などが相比周して學校騒動などを起す時よく之を見る。つまらぬ小節の信を立てんがために、身は生徒としての本分を忘れ、生徒たる本分を盡さんとすれば、友人に對して信を失するが如きは隨所に見る所の現象である。故に事を約し、事を成すに當つて、よく其の事が義になつて居るかどうかを考へ、然る後なさなければならぬ。かく信と義とは相即して離れない所のものである。

信義は人の社會的生活を營む上に大切な徳である。が朋友の間に於ては殊に必要な徳である。一時の利害に依つて相結び、一時の便利によつて相關係するといふ様な事ではなく、眞に其の誠心から相許し合つて、心と心とが結び附いた友誼でなければ、其の友情が決して永續するものでない。而して道を行ひ善を責めるものでなければ、決して眞の友と稱することができない。信義は朋友の道の根本である。

言語を以て相約した事は必ず之を履行すべく、假令言語に發せざるも心に於て期する所は必ず之を實行せねばならぬ。彼の勢利の友と稱する輩の友に勢ある時は之と結び、之に従ひ、只管其の及ばざらんことを恐れるが、一旦其の勢を失ふや、冷然として之を見ること路傍の人の如しといふが如きは信義の道に背くこと甚だしいものといはねばならぬ。

### 教育勅語

#### 一、勅語

「朋友相信シ」

#### 二、奉釋

##### (一) 語句

「朋友」 友達のことである。中には朋と友とをわけていふ人もあるが、「朋友」と熟して「トモダチ」として奉釋してよい。

「信シ」 信とは心誠にして言行に偽りなきをいふ。しかしてそれが義に叶つて居ることは言ふ迄もない。

##### (二) 大意

要するに「朋友は互に信義を以て交れよ。」と仰せられたのである。

我々の大切な社會的生活は、親子・兄弟・夫婦など家族の生活にのみ止まらないで、多數の人々と朋友となることによつても成立つのである。だからよく其の道を心得なければならぬ。

朋友の交りについて心得べきことはいろ／＼あるが、その中でも信を以て主徳とする。而して信には言と行の一致と言と心の一致とが其のおもなものである。

軍人への勅諭に「信とは己が言を踐行ひ義とは己が分を盡すをいふなり。」とあるは言と行と

を一致させる一種の信について仰せられたのである。

朋友の交りは親子兄弟のやうに人情の自然に基く關係でなく、また夫婦の様に特別の愛情に基く關係でなく、各人の自由に基く平等の關係である。故に其間に信がなければ、其の交りが成り立たないのである。而して信が深ければ深い程交りが堅いのである。所謂切つても切られぬ仲となるのである。之を斷金の交りとか、刎頸の交りとか、無二の親友とかいふのである。

朋友といふ社會的關係は、單に身邊に限るものでない。廣く一國の内にも成立つものである。また一國のみに限らず、一層廣く世界の人々との間にも成立つものである。國民中に海外萬里の彼方に、志を同うし、業を共にして、至つて親しい交りを結んでゐるものもある。故に朋友は單に近邊に、單に國內に止るのでなく、廣く世界にも求むべきだといふ考がなければならぬ。これは人類の共同の文明を進め、世界の平和を來たすことにもなるからである。これが「朋友相信シ」の聖旨が世界的でもある所以である。

### 聯絡

既習知識であつて、本課に聯絡ある知識は次の如くである。

尋常小學修身書卷一第四「友だちは助けあへ」

○雨の日に一女兒が自分の傘の中に他の一女兒を入れてやつた話○友だちは互に親切を盡し、

兄弟のやうに仲よくして互に助けあふべきこと○友だちに過があつても嘲り誹りなどせぬこと

○己のためのみを思つて友だちに迷惑をかけないこと○友だちの容貌・服装・言語・舉動等につき嘲り笑ひ又は誹らぬこと○告げ口をせぬこと等。

同書卷二第十「友だちに親切であれ」

○小太郎といふ子が文吉といふ友人に力を貸して、難儀を助けてやつた話○友だちは善き事を爲さんとするときは之を助け、惡しき事を爲さんとするときは之を諫めなければならない○難儀を助けられたときの對者の心情(嬉しいこと)○友だちは互に親切を盡して苦樂を共にすべきこと等。

同書卷三第九「友だち」。

○友藏が信吉のために盡した例話○朋友は互に情誼を重ねて相救ひ相助けること○友だちの忠告を無にせぬこと○些細なことのために怒りなどして友情を傷つけぬこと等。

以上約結すれば次の如くなる。

- 1、友だちは常に仲善く交はること。
- 2、友だちは互に難儀を助け、善事を喜んで、常に苦樂を共にすべきこと。
- 3、友だちの缺點や過失に對しては之を責め、之を嘲り、また笑つたりせぬこと。

4、友だちの缺點・惡事に對しては誠意を以て忠告すること。  
 5、常に寛大にあること。また決して陰口などをいつて友だちの人格を傷けぬこと。  
 而して一二年の間は主として彼等の現在生活を中心として説き、三年に至つて將來の生活にも入  
 込んで説いてある。本學年に於ても、勿論三學年の如く將來の生活を中心として説くがよい。

### 教授の實際

## 區分

第一時 例話を授く。

第二時 訓話を行ふ。

## 教具

新井白石の肖像 木下順庵先生の肖像 筆蹟等。

## 教法

例話に於ては、

(一)新井白石の略傳。

(二)白石の重要な交誼。

の二項の下に、先づ白石の全人格を概説し、次に白石が自己の窮乏から救はれ幸運が開ける機會を得しにも拘らず、友人の苦境に深く同情して、それを犠牲にして友人の志望を達してやつた、その純高な心情、重厚な交誼を切實に説く。次に本例話と交渉して、また既習知識とも連絡して

(一)朋友は信義を以て交はること。

(二)朋友は互に寛恕の徳を守ること。

(三)朋友の不善に對しては忠告すること。

(四)朋友の難儀は互に之を救ふこと。

(五)常に善良な友と交はること。

等の項目の下に訓話して、友道の内容を明かにし、本道に目覺めさせて、現在にまた將來にも實現せんとする現實心を啓培する。

本課に於ては朋友は常に身邊に限るものでなく、一國にまた世界に求めてもよいことを附説する。之が現代に大切なことであるからである。

### 第一時

△例話を授く。

## 一、問答



○諸子がかつて友藏といふ一青年が、其の友なる信吉のために大に盡したといふ話をきいたことがあらう。それはどんなことであつたか○若し我が友達で職を得んとして得ることが出来な  
いで困つてゐるときはどうするか。

「今日は自分の幸福を犠牲にして、我が友の志望を達せしめた美しい交誼の持主であつた新井白石といふ人について話す云々。」

の旨を告げて、本課の教授にはいつて行く。

## 二、説話

次の要項の下に話す。

(一)新井白石の略傳 (全人格に)

(二)白石の重厚な交誼 (本説話の中心)

以上は「例話資料」を参照して簡明に適切に説く。

## 三、整理

○木下順庵先生が新井白石を加賀侯に薦めようとした時、岡島石梁がそれを聞いて白石に何と  
いつたか○そこで白石は順庵に何といつたか○順庵は白石の言をきいてどうされたか○白石に  
つき感すべきはどんな點か……といふ風に問答して、一層白石の高潔な行動に感激させ、我

等も亦我が友に對してかくあらうといふ領を自分自身になさしめる。

## 四、教科書を授く。

以上の問答に連絡して、教科書を授ける。

1、一讀させる。

2、質疑に答へる。

3、精神のある所を捉へさせる。

## 第二時

△訓話を授く。

## 一、問答

○朋友とは○朋友の間にはどんな道があるか○信義とは○天災にあつたときは○困つてゐると  
きは○友の過失に對しては○善事に對しては○友の惡しきに對しては○どんな友と交はるべき  
か。

## 二、訓話

以上の問答と交渉して大體次の要項の下に訓話する。

## (甲)朋友の道

- (一) 信義を以て交はること。
  - (二) 困苦を見ては之を救ふこと。
  - (三) 善事に對しては共に喜ぶこと。
  - (四) 悪しき行爲に對しては忠告すること。
  - (五) 過失に對しては寛大なること。
- (乙) 朋友の選擇。
- (一) 朋友の種類。
  - (二) 善き友と交ること。

以上は「訓話資料」を参照して簡明に適切に訓話する。

### 三、教育勅語と聯結

勅語「朋友相信シ」の御意義を明かにする。次に以上訓話せし内容と結合する。

### 四、考察批判

- 1、朋友があるとないとどう違ふか。
- 2、諸子が後日成長して、何か事が起つて篤と相談せんとする必要の生じた時、どんな人を選ぶか。

- 3、信義といふは朋友間のみに必要な徳か。
- 4、朋友の道を實現する上に於ての諸子の考は。

## 備考

### 一、木下順庵

木下順庵は名は貞幹、通稱は平之允、順庵は其の號である。京都の人である。若い時、藤原愷窩の門人松永尺五せきごについて學んだ。後其の名大に天下に聞えるに至つた時、加賀侯前田綱紀、禮を厚うして聘せんとした。順庵固く辭して言ふやう、

「先師松永先生の子、家を嗣いでおはすれども、また仕官の途を得ずして貧しく暮して居られる。願くは我の代りに先づ此の人を用ひて其の望みを果させ給へ。」

と、加賀侯之を聞いて、

「何と情誼の厚い人であるやら、かういふ人は蓋し稀である。」  
といつて深く感心し、遂に尺五の子と共に順庵をも聘した。かく順庵は學問深き上にまた徳行の勝れた人でもあつた。其の後また擢んでられて幕府の儒者となつた。元祿十一年十二月十三日歿した。享年七十八。明治四十二年に正四位を追贈された。門下生中室鳩巢・新井白石・雨森芳洲・祇園南海・三宅觀瀾・神原篁洲・杉浦霞沼・服部寛齋・向井三省・南部景衡は殊に優秀を以て著はれ、木門

の十哲と稱せられた。蓋し師の君の人格の反映である。

二、新井白石の年譜

○土屋氏に仕へし時代

明暦三年(紀元二三一六年大正十一年より二百六十六年前)二月十日江戸榎原内藤邸内に生まる。

萬治 三年(四 歳) 太平記の講義を聴き之を質問す。

寛文 四年(八 歳) 習字を始む三年にして大いに熟達す。

寛文 五年(九 歳) 日課を立て、勉強す。

寛文 七年(十一歳) 擊劍を習ふ。

延寶 元年(十七歳) 始めて經學に志す。

延寶 二年(十八歳) 久留里藩主土屋利直に隨うて上總に至り暫く留まる。

延寶 三年(十九歳) 四月土屋利直歿せしにより父は致仕して淺草田原町報恩寺の庵室に住す。

延寶 五年(二十一歳) 二月父、事によりて藩籍を除かれ、仕途を禁ぜられたるより、白石も亦土屋家を去る。

○流浪時代

延寶 六年(二十二歳) 五月母歿す。河村瑞軒孫女に配せんとせしも之を辭す。

延寶 七年(二十三歳) 仕途の禁を解かれたるより再び土屋氏に往來す。

○堀田氏に仕へし時代

天和 二年(二十六歳) 堀田正俊に仕ふ。六月父歿す。九月朝鮮使と面語す。

貞享 三年(三十歳) 西山順泰の紹介により木下順庵の門に入る。

元祿 二年(三十三歳) 八月女兒出生す。

元祿 四年(三十五歳) 七月長男傳藏明卿生る。秋堀田氏を辭去し城東に移居す。來り學ぶ者多し。

○甲府侯に仕へし時代

元祿 六年(三十七歳) 十二月甲府藩主徳川綱豊に仕ふ。俸米四十八口。

元祿 九年(四十歳) 正月木下順庵を招待し恩賜の書を示す。

元祿 十一年(四十二歳) 十二月師木下順庵歿す。遺言によりて榊原玄輔と共に葬儀を管し、池

上本門寺東行に葬る。

元祿 十二年(四十三歳) 次男平藏宣卿生る。

元祿 十四年(三十五歳) 藩主の命によりて「藩翰譜」を作る。

○西城に仕へし時代

寶永 元年 (四十八歳) 十二月藩主徳川綱豊將軍の繼嗣となりて西城に入る。依つて西九御側衆支配となる。經史を進講す。

寶永 二年 (四十九歳) 若年寄支配となる。

○天下の樞機に參せし時代

寶永 六年 (五十三歳) 正月將軍綱吉薨じ、家宣職を嗣ぐ。正月十一日當時の急務三條の封事を上る。同月二十七日皇子・皇女御出家の先例を廢し、親王宣下、皇女は御降嫁あるべきことを建議し、此し議行はる。二月貨幣改鑄の議を上る。三月長崎貿易につき建議す。七月武藏に於て五百石の地を給せらる。十一月前年渡來の羅馬宣教師審問の命を受け、屢之と面話す。

寶永 七年 (五十四歳) 二月武家諸法度の草案を上り、四月之を頒つ。十一月上洛して中御門天皇の御即位式を陪觀す。

正徳 元年 (五十五歳) 正月琉球聘使に伏見の旅宿に於て會見す。六月布衣の士(諸大夫)に列せらる。十月從五位下筑後守に叙任せられ、朝鮮の信使に對面す。此の時謁見等の儀は白石の立案により全く舊例を改む。相模に於て五百石の地を増せらる。

正徳 二年 (五十六歳) 五月封事を上りて勘定吟味役を置くべきことを論じたるにより、九月

勘定頭萩原重秀免黜せらる。十月將軍家宣薨じ子家繼嗣ぐ。白石稍勢力を失ふ。この年「讀史餘論」成る。

正徳 三年 (五十七歳) 六月「改貨議」三冊を上る。此の年「采覽異言」成る。

○閑居時代

享保 元年 (六十歳) 四月將軍家繼歿し、五月吉宗嗣ぐ。是より白石全く勢を失ひ、嚮に建議して行はれし所多く廢せらる。此の頃より出仕を罷む。「折焚柴の記」成る。

享保 二年 (六十一歳) 正月、小川町なる屋敷を召上られ、深川一色町に僑居す。

享保 四年 (六十三歳) 「東音譜」・「方策合編」・「南島志」等成る。

享保 十年 (六十九歳) 五月十九日歿す。淺草田原町高龍山報恩寺(眞宗、現今東本願寺別院境内にあり)に葬る。

明治四十年(歿後一八二年)十一月十五日正四位を贈らる。

三、白石の著書

史傳の部

折たく柴の記

續折たく柴の記

讀史餘論

古史通

古史通或問

史疑

藩翰譜

史論

地理の部

蝦夷志(名北島志)

南島志(名琉球志)

五十四郡考

山形紀行

那須國造碑釋文

采覽異言

西洋紀聞

朝鮮國に關するもの

國書復號紀事 朝鮮國信書式之事

朝鮮信使遊見儀註

江關筆談

朝鮮信使議

以爾菴議草

白雉帖……等

言語學の部

東雅 東雅領袖

東音譜

同文通考

經濟の部

五事略

改貨議 改貨後議

市舶議

市舶新例

畿内治河記

奥羽海運記

兵書の部

本朝軍器考

孫武兵法擇

孫武兵法副言

故事の部

經邦典例

正徳年號辨

新近問答

人名考

祭祝考

日東行程考

品革威考

詩集の部

白石詩草

白石餘稿

停雲集 室新詩評

雜の部

尺牘箋

白石先生遺文

同拾遺

白石手簡

退私錄

白石紳書

決獄考

鬼神論

新井家系

岩松家系

系

右の外「白石先生著述書目(享和三年堤朝國編)」「一話一言(太田南畝選)」所載白石書目には

西洋圖說

西學推問

列朝實錄

五色筆

西洋人物集

和蘭紀事

日本紀論

詩經圖

西學考略

阿

蘭陀考

文學考

## 第二十課 禮儀

### 教授の要旨

本課に於ては、公衆に對する禮儀の心得を授けるを以てその要旨とする。

禮儀とは、人の内面にある愛敬謙讓の思念が、外部即ち言語の上に、動作の上に、或る一定の形式をとつて表はれたものをいふ。而かもそれは社會的に承認された習慣的の形式である。

禮儀は個人的にも亦社會的にも大切な道德的形式である。即ち各個人がよく之を守ることによつて、自己を檢束し自己の品位を保つことが出来る。また人々が禮儀を重ずることによつて、社會の秩序を保ち、交際を圓滿になすことが出来る。殊に國際上に於て、國際の圓滿を得、親善を増し、國家の品位を保つことが出来るのである。

禮法は一般に對者をもつて居るけれども、その内でも主として自己に關するものと、社會・公衆に對するものとある。例へば容儀を整ふとか、服裝に注意するとかは甲者に屬し、汽車・汽船に乗つたときの心得とか、集會、訪問の際に於ける心得とかは乙者に屬する。本課に於ては主として乙者即ち廣く社會・民衆に對する禮儀の心得を説き之が現實を論ずるを以て主眼とするのである。

## 教材の研究

### 訓話資料

#### 禮儀

○禮儀とはどんなことか。

さう、禮儀といふのは、心の内にある敬の心が外に一定の形式で表はれたものをいふのである。どうだ、諸子は朝、學校に來て先生と廊下に出遇つたらどうするか。さう、お辭儀をするだらう。ところでなぜさうするのか。さうだ、先生を敬うてゐるからだ。そこで諸子は分るだらう、禮儀といふものは内にある敬の心をお辭儀(身體を前方に曲げる形式)といふ形式によつて、外に表はしたものであるといふことが。さうして其の形式といふものは自分勝手のものでなく、社會の誰人も廣く一般に認めてゐる形式である。而かも一時に出來たものでなく、すつと前から出來てゐる習慣的形式である。勿論時勢の進化につれて時に變つて行く。併し變つても、それが其の後、またすつと繼續して習慣になつて行くのである。

以上は動作に屬する形式であるが、言葉に屬する形式もある。例へば人を呼ぶのに「さん」をつけ、朝起きたとき「お早うございます」といふが如きはそれである。これ等も矢張敬が或る形式

をとつて外に表はれたものである。一言でいへば、すべて禮法といふものは心の内にある敬が或る一定の形式をとつて外に表はれたものである。而かも社會の認識した習慣的形式である。

○何故に禮法は必要であるか。

さうだ、諸子はよく容儀の整つた子と、さうでない子とを比べて見たとき、心にどんな感じがするか。さうだ、甲の子は私共に愉快な感じを與へ、乙の子は不愉快な感じを與へるのである。

どうだ、起居動作よく作法に叶つてゐる人と、さうでない人とを比べて見たとき、諸子はどう思ふか。さうだ、甲の人はおのづとそこに品位があり、然らざる人は何となく下品に見える。

どうだ。劇場へ劇でも見に行つたとか、音樂會に音樂でも聞きに行つた時、下足口に我も人もと先を争ふのを見て諸子はどう思ふか。さうだ秩序のないのに驚くだらう。

どうだ私共が外人に對して無作法なことをしたとせば、彼等は私共を何と思ふだらう。さうだ、品位のない國民だといつて嘲り笑ふだらう。

さあ諸子よ、かうした譯からして禮儀は何故に必要なかを考へて見たら、禮儀は個人的にまた社會的に大切なものだといふことが直ちに氣がつくだらう。即ち私共が禮儀を守ることによつて、自己を檢束し、自己の品位を保つことが出來、また人々が禮儀を重ずることによつて、社會の秩序を保ち、また愉快に圓滿に交際して行くことが出來よう。殊に外國人に對して禮儀を重

じ、親切を旨とすることは、たゞに國民の品位の高きを示すのみでなく、また國と國との交際を圓滿にし、親善を増す所以でもあるまいか。

要するに禮儀は人の愛敬謙讓を、形式化したもので、之が現實は個人の品位を保ち、相互の感情を和げ、交際を圓滑にし、社會の秩序を保持し、國家の品位を保ち、國際關係を親善にするものである。従つて社交的道德の形式として極めて大切なものである。教育勅語にも「恭儉己レヲ持シ」と宣うて、人類の至切な倫常としてある。

所で現代はどうかといふに、餘程世の中が自由を要求し、解放を叫ぶやうになつて來た。之がため人は禮儀作法は形式である。四角四面な形式である。窮屈な形式である。吾等の自由を束縛する形式だといつて、之を輕んじ之を嫌ふ傾向が著しく生じて來た。併し之は慥に思想に囚はれた誤解であつて、禮儀作法其の物は決して其の人の言の如く窮屈なものでなく、また自由を束縛するものでもない。前にもいつたやうに、禮法といふものは、社會的生活を營む上に、人の内面から、さうあらねばならないといふ所謂必然的の要求から成立つた一種の習慣的形式で、何人も自由を束縛し、解放を阻まんとして生れた形式でない。殊に自由といふものは、何等道德上の制裁のないものでない。本當の自由は道德上の制裁に従ふ自由である。だから眞の自由は決して禮法とぶつつかるものでない。寧ろ眞の自由とか解放とかは禮法があるために、それを得それに達

することが出来るのである。試みに考へて見よ。どうだ禮儀といふものが地に落ちて、人心には些の檢束もなうて、人々は放縱であり、社會に何等秩序がなかつたとき、そこに果して人々は自由を捉へ得るだらうか。解放を求め得るだらうか。却つて人々の自由が侵害され、解放が束縛に變ずるであるまいか。

諸子よ、諸子は文明國人が自由であると思ふか、野蠻人が自由であると思ふか、いづれか。さうだらう。自由は文明人にあるだらう。次にどうだ、諸子は禮儀は文明國にあると思ふか、それとも野蠻國にあると思ふか。さうだ、文明國は禮儀の發達した國である。そこでどうだ、禮儀といふものは人の自由を縛り、解放を妨げるものだらうか。さうだらう。禮儀は却つて人の自由解放を擁護するものだらう。勿論禮儀といつても、前に言つたやうに、其の形式が永久不變のものでない。人心の進化と時代の推移とによつて、其の形式に改變あるは言ふまでもない。而かも人間の經濟的生活の發展と共に簡單になつて行くであらうと思ふ。併し之を以て禮儀の退化とか禮法の滅亡だと思つてはならない。人間が地上に社會的生活を營んで居る限りは、禮儀も地上から去り、地上から滅びるといふことはないのである。禮儀は人生の最終の日まである形式である。而かも人類の平和と幸福とを擁護する至切な道德的形式である。

○禮儀を行ふときにはどんな心で行はなければならないか。

さうだ、心と形とを離してはいけない。換言せば精神といふものと形式といふものを離してはいけない。勿論禮法に重なる所は精神である。精神のない禮法は假令形式がどんなに整うて居ても、それは虚禮に過ぎない。虚偽に過ぎない。偽善に近いのである。

併し精神が重いつて、形式を輕じ、坐作進退に何等節度なく、粗雑なものであつてはならない。嫻はざる形式であつては、精神が表はれず、誠意を缺くのである。故に形式にも十分圓熟すべきは言ふまでもない。要は内にある愛敬謙讓を、十分圓熟した形式によつて表現する所に禮儀の本領があるのである。

○禮儀の形式にはどんなものがあるか。

さう、禮儀には行住坐臥、進退出入から慶弔慰問に至るまで、其の形式たるや頗る多い。今から主として社會民衆に關する禮法をあげて、其の心得の大體を説いて行かう。

### 一、容儀に關する心得

容儀を整へることは、一は他人を尊敬し、一は自己の品位を保つ主旨に出づるのである。彼の垢面・蓬髮・破衣を着け、弊履を穿つて、奇異の態をして得々たるが如きは容儀を整ふ所以でない。是等の如きは大に其の人の品位を下げ、世人の侮蔑を招くのである。容儀上に於て特に注意すべきことは次の如くである。

- 1、身體は時々入浴して常に清潔なるべきこと。
- 2、顔面・手足等の汚れたる時は其の都度必ず洗ふべきこと。
- 3、女子にあつては日々頭髮を梳ることを怠らぬこと。
- 4、手足の爪は時々之を切り、爪の垢も常に取去つて清潔なるべきこと……等。(既習に屬す。)

### 二、衣服に關する心得

衣服は皮膚を保護し、寒熱を防ぎ、體温を保つに必要であるのみでなく、また容儀を整へ品位を保つにも必要なものである。諺に「馬子にも衣裳」といふことがある。以て服装は人の容儀を保つ上に如何に至切であるかは知るに足るであらう。

衣服は身分・地位に應じ、また季節と場合とに依つて、老幼・男女・年齢に従ひ、世の流行、土地の好尚に適はなければならぬ。また特に敬意を表すべき場合即ち婚姻・葬式・賀壽其の他諸種の儀式等には禮服を着用するのが一般の習ひになつて居る。衣服に關し特に注意すべき諸點は次の如くである。

- 1、衣服は正しく之を着用すべきこと。
- 2、襟元を正しく合せて開かないやうにすること。



- 3、シャツ及び洋服の釦は正しく掛くべきこと。
- 4、帯は正しく後で結ぶべきこと。
- 5、羽織・袴の紐は中央で結び、其の端を餘り長く垂れないやうにすること。
- 6、食事の時、膝のあたりを汚さないやうに注意すること。
- 7、衣服の汚れた時、又は綻びたる時其の儘になさず、直ちに繕ひ貰ふこと。シャツの釦の落ちた時なども同様である。
- 8、帽子は正しく之を被ること。……等。(既習に屬す)

### 三、食事に關する心得

食事は身體の攝養上大切なものだが、之が作法にも注意しなければ野鄙となり、自己の品位を損すると共に、傍らの人に對して不快の感を與へる。西洋に於ては殊に八釜敷しい。食事につき注意すべき諸點は次の如くである。

- 1、食事の始終には挨拶をなすべきこと。
- 2、食事中は容儀を亂さぬこと。
- 3、食物を身邊及び器中に取り散らさないこと。
- 4、物をかみ又は汁を吸ふとき音を立てないやう注意すること。

- 5、食器を手荒く取扱はないこと。
- 6、食事中は四邊を見廻はさぬこと。
- 7、食事中人の食膳をのぞき、又は室内を見廻はさないこと。
- 8、食事中の談話には、話題に注意すべく、また食物を口にしながら談話すべからざること。
- 9、食物はいそいで喰はないこと。
- 10、食事中、咳・唾などするときは、横に俯いて手又はハンカチで鼻・口を被ひ、唾又は口にせる食物の飛び出ることなきやう注意すること……等(概ね既習に屬す)

### 四、戸障子の開閉に關する心得

戸・障子の開閉に注意することも禮法の一つである。即ち之が開閉に注意せざるときは、或は之を損傷し、或は塵埃を立てるなど、保存上不利であるのみでなく、また人に迷惑を及ぼし、自己の品位を落すことにもなる。注意すべき諸點は次の如くである。

- 1、扉・戸・障子・襖等は靜かに開閉せねばならない。また開け放しにして置くことはならない。
  - 2、便所の扉を開くときは、軽く叩いて合圖した後開くこと。
  - 3、室に入るとき、扉の開ける場合は、出入共に之を閉ぢるに及ばない。(概ね既習に屬す)
- (注意) 戸・障子・襖等の開閉の作法及び之が實習は別の時に於て授ける。でこゝには之を省く。

### 五、船車に乗つたときの心得

汽車・汽船・停車場・渡船場等の如き多人數集合する所では、其の言行を慎まなければ、自己の品位を損するのみでなく、公衆に迷惑を掛けることは極めて大である。然るに公衆に對する禮法を輕するは我が國民の通弊で、世界一等國の仲間入した大國民として大に恥づべき所である。船車に對する心得中殊に注意すべきものは次の如くである。

- 1、船車に昇降する際、または乗車券を求める際は先を争はないこと。
- 2、船車に昇降する際には、なるべく老弱・婦女等を先にすること。
- 3、乗車券を求める時には驛員の指圖に従うて一列に進んで行き、反對の方面から進み、又は列の中間に押入る等の事をなさないこと。
- 4、老幼には可るべく序を譲るがよい。妄りに自分の便利を圖つて坐席を廣くかつたりしないこと。
- 5、船車中で不行儀な行をなし、野鄙なる言語を放たないこと。
- 6、他人の容貌・服裝等を指笑したり、また悪口をいつたりしてはならない。是等は却つて自己の人柄の下劣を示すものである。
- 7、船車内に飲食物の殘滓を撒き散らし、又は湯茶などをこぼさぬこと。

- 8、唾壺以外に痰唾を吐き、又は煙草の吹殻などを捨てないこと。
- 9、携帯品は夫々置くべき場所に整頓し、他人の物と紛れないやうに注意すること。
- 10、車窓から物品を投棄し、又は痰唾を吐かないこと。
- 11、船車内で放歌し又は濫りに高聲に談笑しないこと。
- 12、乗船・乗車中は船車の規則をよく守り、また掛員の指示によく従ふこと。(兎角邦人には此の徳が缺乏して居る)。

### 六、集會に關する心得

集會には儀式的集會、討論・評議・研究の集會、講演・講評の會合等色々ある。今是等の場合に於ける心得の主なるものをあげれば次の如くである。

- 1、豫め通知を受けたとき、先方に於て準備を要する場合には、必ず參否を答へ、出席の場合には時刻を違はさないこと。
- 2、出席の通知を爲した後、止むなき故障のため出席し難いときは、速かに其の旨を通知し遠約を謝すること。
- 3、出席した時は、係員の指揮に従ひ、豫め會場の設備及び集會の次第を心得て置くこと。
- 4、出入、着席の際には先を争ふことなく、進退坐作を靜かにし、尊長・老幼等を先にする。着

席・退散の際には隣席の人に會釋するがよい。

5、屋内に於ては帽を戴き、外套・襟卷等を纏うてはならない。帽・傘・襟卷等は之を整頓して所定の場所に置くこと。

6、集會の席上で、耳語し又は多數の解せざる辭を用ひる等、總て他人の惡感を惹くが如き言動を爲さないこと。

7、講話・演説中は特に靜肅にし、已むを得ない場合の外退出しないこと。

8、講話・演説中に談話し、又は足音を立て、或は批評するが如き言語を發し、其の他妨害となるが如き所作をなさぬこと。

9、止むなく退出せんとするときは、一禮して靜かに退出する。扇の開閉等も努めて音を立たないやうにする。場合によつては其の旨を司會者に告げてよい。

#### 七、道路上に關する心得

道路上注意すべき主なるもの次の如くである。

1、道路は必ず左側を通行すること。

2、歩道・車道の區別ある所では必ず之に従ふこと。

3、行列に出逢つた時は妄りに之を横ぎらないこと。

4、同伴者と横列を作つて他人の通行を妨げないこと。

5、道路に佇立し又は遊戯等をなして他人の通行を妨げないこと (概ね既習に屬す)

#### 八、慶弔に關する心得

慶弔の禮法は同情と誠とを表して人と悲喜を共にする精神であるから、禮法の重きものうちである。殊に婚姻及び葬儀は人生の大事で、いづれの國でも皆それらの制度と儀式とが備つて居る。だから、その規定に従ひ、其の風習に應じて行はなければならない。近來漸次華奢に流れ、虚禮に走る傾きがあるが深く警戒すべきである。これが心得中殊に注意すべきものは次の如くである。

1、祝賀・見舞・弔問には自ら往くを禮とする。

2、遠方又は止むを得ざる差支のため自ら行くことの出来ない場合には、直ちに書狀又は電報を以てするか、または代人を遣はすかする。

3、慶弔・儀式等の場合は相當の衣服を着用するのが其の禮である。

4、親しき家に慶事(卒業・入營・出産・婚姻・榮進・新築落成等)ある場合は祝意を表するため訪問をなし、又は祝詞を送るを禮とする。

5、祝賀の訪問を受け又は祝詞を送られた場合は速に答禮の訪問をなし、又は禮狀を送る。

- 6、親戚・知人に不幸があつた場合には速に弔問せねばならない。
- 7、先方の都合を伺つた後必要に応じて相當の助力をなす。
- 8、親戚又は懇意な間柄であつたら土地の習慣に従つて相當の香奠を贈る。
- 9、會葬の際は靜肅にして十分哀悼の意を表し、式場に到らば氏名を通じて葬儀の終つた後に退散する。
- 10、會葬の時刻を違へない。
- 11、會葬の際、高聲に雑談し、又は失笑する等、苟くも哀悼の意を失するが如き言動があつてはならない。
- 12、弔問・會葬の際には相當の禮服を着用する。
- 13、會葬者が玉串を捧げ、又は焼香をなさうとする場合には、順次柩前に至つて敬禮し、少しく進んで之を行ひ、再び敬禮して退く。
- 14、會葬の往復には他人を訪問せぬ。
- 15、弔問・會葬に對する答禮は忌明の後に之をなす。但し會葬に對する答禮は直ちに爲すも妨げない。(忌明は一樣ならざれども、神道にあつては五十日祭後、佛道にあつては三十五日若しくは四十九日後とする)

(注意)本項は第一學期の作法教授の場合に授けた筈であるから、こゝでは復習的に取扱ふがよい。

#### 九、外國人に對する心得

私共の日常守るべき禮儀は、たゞに邦人間のみでなく、また外國人に對しても同様である。殊に今や國と國との交際が親密になり、往來が益々頻繁になつた今日に於ては、彼等外國人に對しては、一層言語・舉動を慎んで、不快の念を懐かしめず、交りを親密にして行かなければならない。邦人はどうかすると偏狹な考から外人を輕侮し、無禮な言行を敢てなすものがある。これ等は單に自己の品位を下げるだけでなく、また國民の品位を傷つけ、國家の名譽を落すものである。外國人に對して禮儀を重んじ、親切を盡すは文明國民の美風なのである。左に特に注意すべきものをあげて示さう。

- 1、外國人に接しては快く隔てなきやうにすること。
- 2、汽車・電車等では外國人になるべく席を譲ること。
- 3、外國人に道などをきかれた時は親切に教へてやること。
- 4、外國人につきまとひ、または惡口などを言はないこと。
- 5、外國人の異つた風俗・習慣を笑ひなどせぬこと。
- 6、肌をあらはすことは、外國人の最も嫌ふ所であるから、外人の前でさうした舉動をなさぬこと。